

水經

ASIA LIBRARY
DS
655
.M63

3 9015 04763 1471

PROPERTY OF
*University of
Michigan
Libraries*
1817

ARTES SCIENTIA VERITAS

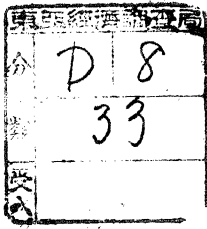
~~C II. / 05~~

WDC / 167



三神敬長著

比治實事情



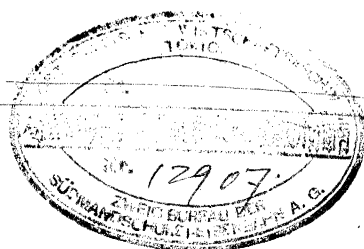
~~DS~~
5550

Asia Library

DS

655

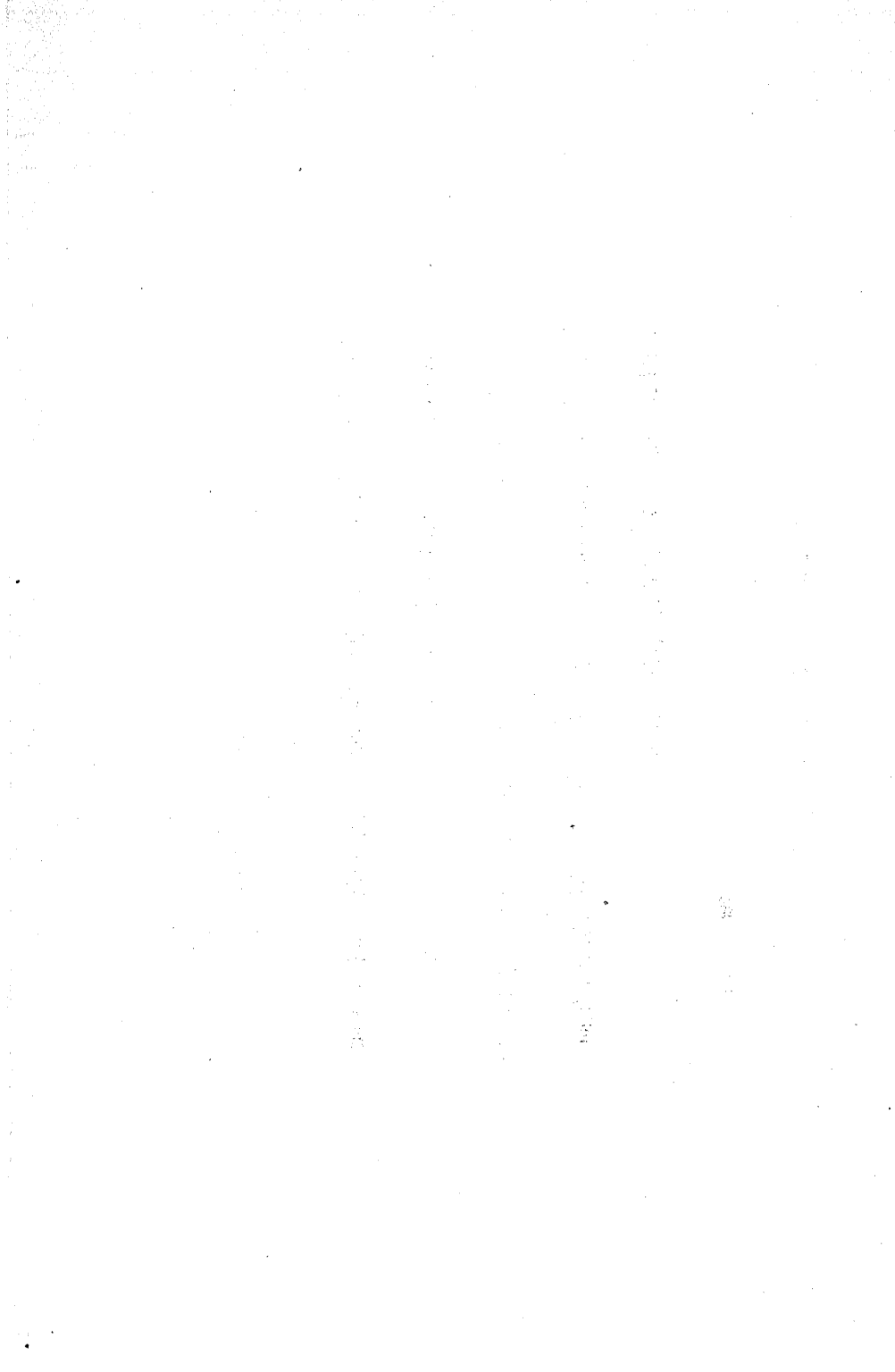
M63



大正六年比律賓に於て病を得引續き健康勝れず遂に大正十年七月十四日鎌倉に於て歿せる亡妻徳子及び

大正八年十二月七日比律賓ダバオに旅行中同地に客死し遺言して遺骸をダバオ灣内に投ぜしめ北緯七度東徑百二十五度四十分三百尋の海底に眠れる亡弟八四郎の靈に捧ぐ

著 者



RIZAL'S LAST FAREWELL

Adios, Patria adorada, region del sol querida,
 Perla del mar de Oriente, nuestro perdido Eden!
 A darte voy alegre la triste mustia vida,
 Y fuera más brillante más fresca, más florida
 Tambien por ti la diera, la diera por tu bien.

En campos de batalla, luchando con delirio
 Otros te dan sus vidas sin dudas, sin pesar;
 El sitio nada importa, ciprés, laurel o lirio,
 Cadalso o campo abierto, combate o cruel martirio,
 Lo mismo es si lo piden la patria y el hogar.

Lo vi cuando veo que el cielo se colora.
 Y al fin anuncia el día tras lóbrego capuz;
 Si grana necesitas para teñir tu aurora,
 Vierte la sangre mia, derrámala en buen hora
 Y dórela un reflejo de su naciente luz.

Mis sueños cuando apenas muchacho adolescente,
 Mis sueños cuando joven ya lleno de vigor,
 Fueron el verte un día, faja del mar de Oriente,
 Secos los negros ojos, alta la tierra frente,
 Sin cejas, sin arrugas, sin manchas de rubor.

Ensueño de mi vida, mi ardiente vivo anhelo,
 Salud te gita el alma que pronto va a partir!
 Salud! ah qué es hermoso caer por darte vuelo,
 Morir por darte vida morir bajo tu cielo,
 Y en tu encantada tierra la eternidad dormir.

Si sobre mi sepulcro vienes botar un día
 Entra la espora yerba sencilla, humilde flor
 Acércala a tus labios y besa al alma mia,
 Y sienta yo en mi frente bajo la tumba fría.
 De tu ternura el soplo, de tu hálito el calor.

Deja a la luna verme con luz tranquila y suave;
 Deja que el alba envíe su resplandor fugaz,
 Deja gemir al viento con su murmullo grave.

詩ノ終臨ルーサ・リ

(リア = 中文本ハ譯邦 = 並譯英)

Si desahogado y poses sobre mi cruz un due-
ño que el ave entona su cántico de paz.

Deja que el sol ahuyendo las lluvias evapore.

Al cielo tornen pavor con mi clamor en voz;

Deja que un cer arrigo mi fin temprano llora,

En las serenas tardes cuando por mí alguien ora,
Ora también, Oh Patria, por mi descanso a Dios!

Ora por todos cuantos murieron sin ventura,

Por cuantos padecieron tormentos sin igual,

Por nuestras pobres madres que gimen su amargura,

Por huérfanos y viudas, por presos en tortura

Voy por ti que veas tu redención final.

Y cuando en noche oscura se envuelva el cementerio

Todos los muertos queden velando allí,

No turbes su reposo, no turbes el misterio

Tal vez acorde, sigas de cítara o salterio,

Soy yo, querida Patria, yo que te canto a ti

Y cuando ya mi tumba de todos olvidada

No tenga cruz ni piedra que marquen su lugar,

Deja que la are el hombre, la esparja con la azada,

Y mis cenizas antes que vuelvan a la nada,

El polvo de tu alfombra que vayan a formar

Entonces nada importa me pongas en olvido,

En atmósfera, tu espacio, tus escalas frías

Vibrante y limpia nota sere para tu oído

Armonía, luz, colores, rumor, canto, gemido

Constante repitiendo la esencia de mi fe.

Mi patria idolatrada, dolor de mis dolores,

Querida Filipinas, ay, el portier adios

Adiós te dejo todo, mis padres, mis amores.

Voy donde no hay esclavos, verdugos ni opresores

Donde la fe no mata, donde el que regna es Dios.

Adiós, padre, y hermanos, horos del alma mía

Amigo de la infancia en el perdido hogar,

Dad gracias que descanso del fatigoso día,

Adiós dulce estrangera, mi amiga, mi alegría,

Adiós, querido ser, morir es descansar.

序

日本人と支那人とは外貌善く相似たり、然れども其氣質の相異なる事英佛人の間に相違あるが如し。比律賓人は然らず外貌氣質兩者ながら全然我と同一にして唯習慣に異有るのみ、比律賓人を日本の國土に置けば數世ならずして新たなる日本人を生ず可く、亦日本人を比律賓諸島に置けば矢張數世ならずして新たなる比律賓人を生ず可し。先年余マニラに行きし時或公會の席上にて比律賓人とは諸君の如く西班牙語を能くする日本人を謂ひ、日本人とは拙者の如く片言の英語を喋べる比律賓人を謂ふと定義せしに、列座の比律賓人も日本人も皆拍手して妙と稱し善と稱せり。

偕此南隣の同胞は如何なる地方より出て來りしや、如何なる風俗習慣歴史を有し今如何なる政體の下に何を爲して生活し何事を考へつゝありや、其統治國たる北米合衆國及び近隣なる支那日本等の諸國との關係は如何、凡そ是等の事柄は日本人の須らく疾くに知る可くして未だ知らざるものなり。三神君の本書を著せしは即ち此の智識上の缺陷を補はんが爲なり。

余の知る限りに於ては現今邦人中比律賓を知り比律賓を愛し日比親善の爲めに盡力すること三神君

の右に出づる者無し、三神君の比律賓を談るは餅屋の餅を談り酒屋の酒を談る如く其正確的要余の稱讃を俟たざるなり。余は念ずアギナルドを知りてリサールを知らず呂宋を知りてミンダナオを知らざる邦人の此書に依りて大に其數を減ぜんことを而して余も亦此書によりて一層善く比律賓を知り一層深く比律賓を愛し一層多く日比親善の爲めに盡力するに至らんことを

大正十一年一月十九日

土 屋 元 作

はしき

名も無き著者が渺たる一小冊子を書いて、それで比律賓の事情を我國の識者に知らしめんとするは少しく無理の註文である事は、著者も能く承知して居る。併ながら著者は大正元年三井物産會社の馬尼刺支店を管理する爲めに同地に行き、大正七年まで留り、其後二年許り新嘉坡に行つたが、大正九年三井を辭し、目下は比律賓の事業と我財界の一部を聯結するパイプの管理者として、比律賓と日本との間を往來して居る關係上、比律賓の事には深きインテレストを有つて居る爲め、少しにても比律賓の事情を我國に紹介せんとして此書を刊行したのである。比律賓に關する邦字の書物としては曩に土屋元作氏が「比律賓跋涉」を書かれたが、觀察も面白く、斷案は適切で、殊に常に文筆に従事せられて居る同氏の故、行文流暢思はず卷を終る中に比律賓の事情に通ずるのであるから、此以上別に新しく本を書く必要はないが、唯比律賓の如き新進の國では時々刻々色々の變化があるので、本書は主として同書出版以後に起つた事、及永年著者の従事して居つた經濟方面の事を書いたのであるから、比律賓の事情に通ぜんと欲する人は、本書と併せて土屋氏の書を讀まれ

んことを希望する。

リサール傳の一章は比律賓大學教授オースチン・クレীগ氏のリサール傳を土屋元作氏の抄譯せられたもので、氏の好意に依り之を本書中に收むることを得たのは著者の幸福であつて、茲に同氏の好意を感謝する。

本書は全部口語體に書綴つたが、唯獨立問題の一章のみ論說體にしたのは、此章は元と著者の談話を目下「爪哇日報」並に「南洋及日本人」を經營して居る佃的外氏が文に綴つたものであるので、同氏に敬意を表し、多少後に附加へた所はあるが、大體其儘を本書に載することにした爲めである。本書に添付した比律賓經濟地圖は比律賓政府商工局の調製に係るもので、特に同局長レイス氏の好意に依り翻刻添付したものである。此機會に於て同氏の好意に對し感謝の意を表す。

過去十年間に於て比律賓に關する英文の著書は随分澤山讀んだので、本書中には種々の著者の意見又は記述が不知不識の間に引用せられてあるが、特に現比律賓大審院判事マルコム博士及現比律賓大學文科學長カラウ氏の著書などは最も多く參考に供した、茲に謝意を表する次第である。

大正十一年一月

著者誌

目次

第一章	比律賓事情一斑	(一)
第二章	獨立問題	(二八)
第三章	比律賓の政治組織	(六九)
第四章	比律賓産業一斑	(八九)
第五章	マニラ麻並椰子栽培事業	(一二三)
	附ダバオ其他に於ける邦人事業	
第六章	比律賓土地問題	(一五四)
第七章	比律賓の愛國者リサール	(一六四)
第八章	比律賓人種及び其文明	(一五二)
第九章	南洋の御伽噺と日本の御伽噺	(二五八)
第十章	比律賓の婦人	(二六五)
第十一章	比律賓カニバル	(二七一)

目

次

第十二章

菅沼貞風の傳(英文)

(二七三)

第十三章

經濟的同盟(英文)

(二八〇)

第十四章

リサール紀念日演舌(英文)

(二八八)

終

比律賓事情

ドクトル・オブ・フィロソフィー

三神 敬 長 著

第一章 比律賓事情一斑

比律賓は千八百九十八年米西戦争の結果米國の領土となつたのであるが、能く調べて見ると、亞米利加が比律賓を取つたと云ふことは所謂豫定の行動と云ふことでなく、寧ろ豫期せざりし出來事であつたと言ふ方が適當であるかと思ふ。其證據には馬尼刺灣頭に西班牙の艦隊を殲滅したデューウキー提督に與へられたる命令書を見ると（其當時亞米利加の海軍次官は有名なるルーズベルトであつた）西班牙の艦隊を撃滅せよと云ふ趣意は何であつたかと云ふと、馬尼刺を占領すると云ふ事は寧ろ第二の目的であつて、主なる目的は西班牙の軍艦が太平洋などに飛出して亞米利加の通商を妨害されては困るから之を防ぐのが第一であつたのである。随つて馬尼刺灣頭の海戦は千八百九十

八年五月一日の朝に行はれて、晝までに片付いて、西班牙の軍艦は全部撃沈され若くは捕獲されたのであるが、亞米利加の陸兵が馬尼刺灣に入つて來たのは八月であつて、其間三箇月の時間があつた。是が若し豫定の行動としたらさう三月も放つて置く筈はない。さうして亞米利加の馬尼刺を占領したのは八月十二日で、比律賓の日で言へば八月十三日であるが、亞米利加の日で言ふ此八月十日は華盛頓で西班牙の利益を代表して居つた佛國大使ジュール、カンボンと亞米利加の國務卿と休戰條約を結んだ日であつて、其休戰條約の條項を調べて見ると斯う云ふことがある。第一條には西班牙が玖瑪に對する主權を讓ると云ふ事、第二はポルト、リコ及其他の西印度に於ける西班牙領は合衆國に譲り且ラドロン群島の中の一を讓ると云ふことがある（今日米國がグワムを領有して居るのは此條項の結果である）第三には此比律賓に對しては割讓と云ふことは書いてなく、唯亞米利加が之を占領して持つて居り、さうして後日平和會議に依つて是が運命を決すると云ふことを此休戰條約に書いてある所を見るも、初より米國が之を取らんとする考はなかつた事が分る。それから其後引續き巴里に於て兩國の委員の間に講和談判をやつた時に、亞米利加から五人の委員が行つたが、其委員の間に比律賓を如何に處分しやうと云ふことに就て意見が一致して居らなかつた。例へ

ば委員長のデーは比律賓群島中の或一部を取らうと云ふ説であつて、又委員の一人グレーと云ふ人は全部取らないと云ふ説であつて、残りの三人は全部取らうと云ふ説で、即ち亞米利加を代表して平和會議に條約を取結びに行つた委員の中でも斯くの如く議論が一致して居なかつた位であつて、隨て條約を取結んでも亞米利加では上院で以て之を批准することが憲法に依つて定められてあるから、之を上院の議に付した所が僅に一票の差で通過したのである。法定數の一票多かつたと云ふことだけで、是だけでも國民の輿論が一致して居なかつたと云ふことが分る。もう一つ實例を舉げて見ると、其當時ミスシッピー州から出て居つた上院議員のウキリアムスと云ふ人が上院の委員會で以て比律賓の事を話す時分に、比律賓が何處に在るかを知らざる議員が多かつたので、一々椅子を持つて行つて其上に昇つて地圖に就て比律賓は此處にある是であると云ふことを委員に説明するので骨が折れたと云ふことを話して居る。尙比律賓の事に就てはオーソリテと稱せられて居るウスターと云ふ博士が居るが、是は比律賓に永く居つた人で、十三年間彼の地に内務長官をして居つた人であるが、嘗て亞米利加のミシガン大學の動物學の教授であつて動物標本を蒐める爲めに千八百九十年頃に比律賓に行つて二箇年半程各地を歩いた事があるので比律賓の事情に通じて居つた、

此人が千八百九十八年學校から二年許り暇を貰つて獨逸で動物學の研究をしやうとして、其途次華盛頓に行つて大統領のマツキンレーに會ひ自分の知つて居る比律賓の話をした。所がマツキンレー曰く、お前のやうに能く比律賓を知つて居る人はない、是から政府の役人として比律賓に行つて呉れると云ふ事で、其場で獨逸行を止めて比律賓調査委員の一人として行つたと云ふやうな事もあつて、何れの方面から考へて見ても亞米利加人が比律賓を占領しやうと云ふことは初から考へて居らなかつた許りでなく、比律賓に對する知識などは殆ど全然なかつたと言つて差支ない。占領した後で扱どうしやうと云ふことであつたと言つて宜いのである。

斯う云ふやうに米國の比律賓領有は寧ろ偶然の出來事であつて豫期せざりし事であつたのである併しながら之を領有するに決した理由は外にある。それは第一に多數の犠牲と多くの資財を抛つて馬尼刺の城頭に立てた彼の星條旗を故なく撤することは戰勝國民の心理狀態ではなかつたらうと思ふ。即ち一種の愛國的心理狀態と云ふものが確にあつたのである。もう一つは亞米利加は正義人道の爲め西班牙と戰つたのである。西班牙は玖瑪に於ても比律賓に於ても甚しき惡政を行つて居つて人民は苛政に苦しんで居つた。それを救はんが爲めに亞米利加が戰爭をしたのであるから、今此比

律賓を西班牙に返すことは、例へば邪慳な繼母の手から子供を救つて置きながら幾何もなくして又元の繼母に還すやうなもので、到底忍ぶ可らざる事である。さればと云つて之を獨立させたらどうかと云ふにまだ獨立獨行は出来ないから、合衆國は正義人道の上から言つても義務として之を助成しなければならぬ。合衆國は比律賓を哺育して行く所の義務があると云ふ正義論。それから尙他の理由は、亞米利加は國が大きい許りでなく國內に富源が多く其國內の商賣と云ふものは却々多額である、外國貿易も多かつたが以前は内國商業の方が重要^せられて居つた位である。然るに十九世紀の末に於て亞米利加の製造工業が非常なる大仕掛になつて、所謂トラストと云ふ問題の盛んになつたのは其當時であるが、斯様に製造工業の仕掛が大きくなると隨て品物が安く出来るけれども、それには之を吐出す所の市場がなければならぬ。それが爲め其頃亞米利加の製造工業者が此市場を求めることに付て非常に注意をするやうになつたのである。それで比律賓を一の出店として東洋南洋方面に亞米利加の製品を送ると云ふことは非常なる利益である。試に馬尼刺を中心として千七百哩の半徑を以て圓を畫いて其内に住んで居る人口が幾らあるかと云ふと一億二三千萬ある。尙之を延長して三千五百哩の半徑内に居る所の人口を調べて見ると七億何千萬とかある。斯う云ふ所に

出店を設けて亞米利加の製品を賣捌く取引所にしたら非常な利益があることであらう。即ち斯う云ふ利益論と愛國論と正義論の三つが(また他にもあるだらうが)主なる理由であつて、愈々比律賓を領有することになつたのである。

斯う云ふ理由であるからして隨て比律賓に對する施設もそれに適ふやうにすることになつて色々な施設をやつたが先づ主として舉げて見ると教育衛生交通と云ふやうなものが特に目立つて居る。教育は西班牙の時代にも法律の上では相當教育に對する設備があつた。即ち紙の上には學校が澤山建つて居つたのである。けれども實際に於ては乏しく、一般の子弟が教育を受けることは到底望まれない事であつた。故に亞米利加が占領すると同時に兵隊の中から教員になれる者を選抜して、小學校を直ぐ開き教育を授けるやうにした。一方で鐵砲を撃つて居る中に斯う云ふ事を始めたが、今日に於ては比律賓の小學に入つて居る兒童の數は百萬前後あるだらうと思ふ。一千萬許りの人口の中の百萬であつて、是は日本の五千萬に對し八百萬の就學兒童があつたとすれば、之に比して及ばざること遠きであるが、一方亞米利加が占領して以來僅に二十年餘りほか經たぬ。殊に亞米利加から見れば一の植民地であり、又教ゆるのも英語でやると云ふことを考へて見たら、非常の好成績を

舉げて居ると言はなければならぬ。假に朝鮮若くは臺灣に於ける日本の小學校などの設備及就學兒童の數と之を比較して見たらば、甚だ残念であるが吾々の方が及ばない。然るに又千九百十九年の比律賓議會に於ては比律賓の總歲出の半額にも當る三千何百萬圓と云ふものを五箇年間繼續事業として小學校の建設費に充てゐることに投票して居る。斯う云ふやうな具合で教育と云ふことに付ては却々盛んにやつて居る。

それから衛生に就ては統計的に言ふと煩雜になるから之を略して、大體に於て事實を言へば、主なる町々には水道を設け又は下水を通じ、又不健康なる濠などは埋立てると云ふやうなことを盛んにやつて居る。又米國に行はれて居る所の食物取締規則を設けて牛乳罐詰其他の食料品の如き一々試験をして、若し有害なるものがあればどしどし告發すると云ふやうな方法を取つて居る。又顯著なる例は馬尼刺市には蚊退治隊と云ふものがあつて、市役所の役人が蚊を退治して歩く、消防隊の外に蚊退治隊があつて、是は小さいけれども同じく唧筒を持つて居つて其中には油を入れてあつて少しでも蚊の發生するやうな處には之を注いで歩くと云ふこともやつて居るので、前に著者の居つた當時馬尼刺に殆ど蚊が居ないと云ふこともあつた。斯う云ふやうに衛生方面に於ても着々やつて

居る爲め傳染病等の統計も前から見ると大變少くなつて居る。

もう一つは交通であつて、是は産業を發達せしむるに就ては最も必要なるは今更言ふまでもない事で、殊に比律賓の如き產物の大部分は原料品であつて粗製品であるから、例へば麻砂糖椰子の實若くは煙草の葉と云ふやうなものは、嵩が高い割に價の安い物で、之を悪い道路で運搬したならば運賃に追倒されてしまふ、隨て産業が起らないと云ふことになるから、交通を良くして運賃を少くし今まで市場に出なかつた物をも出るやうにすると云ふ所から之に力を注いだのである。其方法としては鐵道の敷設道路の改良並に延長であつて、殊に其道路たるや一定の方式に依つて拵へたもので、實に立派なものである。是は町許りでなく田舎に行つても一定の方式に従て砂利を敷きローラーで轉がして實に立派なものが出來て居る。東京市のやうに砂利を敷き放しにして車や靴をローラーの代りにして踏込ませるやうな亂暴な事は比律賓では今日見られない。著者が數年前馬尼刺から北の方へ數百基米自動車で旅行したことがあつたが誠に上等のものであつた。

次に比律賓に對して亞米利加は哺育の義務がある、行く／＼は獨立獨行の出來るやうにしてやる義務があると云ふ所から政治的に教育する必要があると云ふので、千九百二年七月一日比律賓の憲

法とも稱せらるゝものが施行せられた。尙ほ千九百三年に比律賓の國勢調査をして、是が終つてから後二年間平和の狀態が續いて居つたら民選議院を設けると云ふことになつて、遂に是が許されて千九百七年に比律賓アッセンブリーと云ふものが出來たのである。其以前には立法行政は如何なる形式でやつて居つたかと云ふと、千九百二年までは軍政が布かれてあつて、千九百二年から之を撤廢し民政となつたのであるが、其前から比律賓コンミッションと云ふものがあつて、その會長が當時タフトであつた、ウイスター博士なども委員の一人であつたが、其中の一人は教育長官をやり、他の一人は内務長官をやり、もう一人は大藏司法の長官を兼ね、尙一人は警察と商業の長官をやり、尙此以外に委員が二三人あつて、是でコンミッションを組織して居つたのである。其後會長が總督になつたが、總督になつてからも此制度が行はれて居つた。而して此コンミッションが萬能であつて、即ち是が立法の事を議する時には立法の機關となり、行政の事を行ふ時には行政の委員となると云ふやうに兩方の資格で總ての事をやつて居つた。然るに千九百七年に民選議院が出來て、其議員數八十一名是が謂はゞ衆議院と云ふやうな形になつて、而してコンミッションは上院同様な形になつて兩者で以て總ての法律を作ると云ふことになつたのである。

翻つて亞米利加の政界を見ると、千八百九十六年にはネブラスカの一青年辯護士から一躍して民主黨の大統領候補者となつたブライアンとオハイオ州のウヰリアム、マツキンレーとが候補者となつて鎬を削つて選舉を爭つたが、其時にどう云ふ問題で戦つたかと云ふと、ブライアンの民主黨は銀の自由鑄造と云ふことが主なる主張であつた、然るに選舉の結果共和黨の候補者たるマツキンレーが選ばれ、其治世中に米西戦争が起つて比律賓が亞米利加の領有となつたのである。然るに其次の千九百年の選舉は矢張民主黨のブライアンと共和黨のマツキンレーが候補者であつたが、今度も民主黨宣言中には銀の自由鑄造と云ふ事も入れてあつたが、主なる主張は非帝國主義であつた。即ち比律賓を領有することは亞米利加の歴史に反して居る、國是に背いて居るから直に獨立を與ふべしと云ふやうな議論であつた。其時にも民主黨が負けて共和黨が勝つた。其後千九百四年にも八年にも民主黨は其主張を宣言の中に入れて居つたけれども始終負けて居つたから之を實施する機會がなかつたのである。然るに千九百十二年共和黨の方にタフト、ルーズヴェルトの間に争があつた爲めに、遂に一大學教授から身を起したウヰルソンが大統領に選ばれることになつた。其時のバルチモアの民主黨大會に於ても比律賓獨立問題と云ふことが宣言書中にあつた。故にウヰルソンが當選

すると同時に此政綱を行はなければならぬことになつて、直に時の比律賓總督フォーブス氏の辭職を聽入れ、米國下院議員ハリソン氏を總督に任用し、十三年も内務長官をして居つたウィースター博士の辭職を聽入れ、曾て日本の外務省の顧問をして居つたデニソンと云ふ人の從兄弟のデニソン氏を内務長官にし、副總督ギルバート氏を免職してカンサス州のマルチン氏を副總督に命じたと云ふやうな具合にして役人を入替へて民主黨の政綱を實行することにした。尙根本的に比律賓人の政治上の位置を定むる法律を發布しやうとしたが、此法律は色々事情があつて少し遅れて千九百十六年八月十九日に漸く兩院を通過して、越えて八月二十九日に大統領の裁可を得て法律となり、此法律を通稱ジョーンス法と云つて居る。ジョーンスと云ふ人が此法律を提出したので其人の名を取つた譯で、是は却々重要な法律である。殊に其前文に重要な事が書いてある。一寸之を譯すと斯う云ことになる。

米國は領土獲得を目的として西班牙と戦ひたるものに非ず、比律賓に確固たる政府の建設せらるに至らば直に合衆國の主權を撤廢して彼等に獨立を與へんとするは合衆國民の意志にして、開戦當時と今日と何等變ることあらざるが故に、此目的を達せんが爲めに合衆國の主權に障礙を與へ

ざる範圍に於て比律賓人をして出來得る限り多く其内政に干與せしめ他日獨立の曉能く其權利の行使に適せしめんが爲めに此法律を發布するものなり

と云ふことが法律の前文に書いてあつて、即ち是が獨立の約束と云ふことになる。そこで此ジョーンス法の内容の詳細に付ては之を第三章に譲り其大略を言へば、今までやつて來た所の立法權は下院の方は宜いが、上院の方は任命されたる役人であつてそれが行政官を兼ねて居ると云ふやうなことで、それが爲めに行政と立法の區別が判然して居ない。それに對してジョーンス法に依ると、比律賓に上院下院より成る民選議會を置き比律賓人の選舉に依つて之を舉げる、さうして下院の方は元の八十一名を九十名に増加し、又上院は二十四名とする、それから總ての比律賓の法律は此兩院を通過して總督の裁可がなければ法律とならぬと云ふのである。選舉權に就ては近頃我國でも喧しいやうであるが、範圍が非常に廣い、例へば比律賓の男子二十一歳以上の者にして左の一に該當する者は選舉權を有すと云ふことである、第一、英語を讀み且書き得る者、第二、西班牙語を讀み且書き得る者、第三、土語を讀み且書き得る者、此中のどれでも一に當つて居れば宜しいのである。然るに此三つのどれも出來ない者がある、それに對しては直接國稅三十圓以上を納めれば宜しい、此直接

國稅三十圓以上は一見高いやうであるが、是は比律賓の税制を調べて見ると必しも高いことはない。比律賓では營業税とか商業税とか云ふ税がある、それは賣上高の一步を税金として取る、百圓の商賣をすれば一圓税金を取られる、一箇年三千圓の商賣をすれば三十圓であるから、一箇月二百五十圓の商賣をする人ならば選舉權がある譯である。それから不動産五百圓以上を持つて居ればそれでも宜しい。尙其上以上の各項のどれにも當らないものでも從來選舉權を持つて居つた者、それはどう云ふものかと云ふと西班牙時代に村役人をした經歷のある者は皆選舉權を持つて居る。斯くの如く選舉權は多くの人に行渡つて居る、選舉區は所謂小選舉區で、一區から一人づゝ出ることになつて上院と下院の選舉區の違ひは上院の議員の方が數が少いので、隨て選舉區は下院に比して大きいと云ふ譯である。行政の長官は無論總督であつて、是は合衆國の大統領の任命に依ること勿論である。其外比律賓の役人にして合衆國大統領に任命せらるゝ者が十二人、總督を入れて十三人である。是はどう云ふ人々と云ふと、副總督、大審院長及判事八名、それから會計検査院長及次長、是だけ任命されるのである。其他の比律賓の役人は比律賓上院の推薦及協賛を経て總督が任命することになつて居るから、總督が任命しやうと思つても比律賓の上院でいけなないと云ふことであれば駄目

である。それから總督は兩院を通過した法律と雖も裁可しないことが出来る。即ち不裁可權を持つて居るが、此不裁可權は絶對的のものでなく、一遍不裁可になつても同じ法律案が三分の二以上の多數を以て再び兩院を通過すれば總督は裁可しなければならぬことになつて居る。併ながらジョーンス法の前文にもある通り、合衆國の主權に障害を與へざる範圍と云ふことが書いてあるから、萬一外國に關係のある法律などを作つて、それが爲めに合衆國に累を及ぼすやうなことがあつては困ると云ふので安全の爲めに、合衆國大統領が最高絶對の不裁可權を持つて居つて、如何なる法律と雖も大統領は不裁可することが出来る、それから司法制度は前と大なる差がなく、大審院始審裁判所及其下に區裁判所のやうなものがある。尙此外にジョーンス法は比律賓政府に公債を募る權限關稅を改正する權限を與へて財政の運用を滑かならしむるやうにした。

今日比律賓に於ける政治上の有様は斯う云ふやうに殆ど自治の有様であるが、扱て今後の問題として比律賓が果して獨立するや否やと云ふことは、是は何とも云ふことが出来ぬ。表面から言ふと比律賓に確固たる政府が出来れば合衆國が主權を撤廢して獨立を與へると云ふ公の約束が出来て居るのであるから、確固たる政府が建設されて居るや否や又之を判斷するは誰かと、云ふと合衆國の

代表者たる總督が之を認めるのであらうと思ふ。而して總督はどう云ふことを言つて居るかと思ふと千九百二十年比律賓の議會に出した總督ハリソンの敎書の初めに斯う云ふことを言つて居る。

比律賓人は千九百十六年八月二十九日のジョーンス法に依つて過去四箇年間政治をやつて居つたが、今や最後の獨立を待つて居る。其間に一層政治組織を完成し、尙産業等を發達せしめて今度來る所の獨立國になつた時に一層立派なものになるのが肝要である

と云ふことを亞米加代表者たる總督が言つて居るのみならず、千九百十八年比律賓から亞米利加へ獨立請願委員が行つた時分にも、前の總督ハリソンは確固たる政府が比律賓に建設せられて居ると云ふことを證明して居る所を見れば、理窟上からは獨立を許さなければならぬやうになつて居るが、さう世の中の事は理窟通りに行かぬ、と云ふのは、亞米利加が比律賓を取ることに決心した理由は、第一は愛國心第二は正義論第三は利益論で、此最後の點は今日も其當時も變りばないから其點よりして亞米利加が比律賓を放すことが困難であるかも知れぬのである。併ながら比律賓ではどう考へて居るかと思ふと、比律賓の一番大きな政黨で議員全體の五分の四以上を持つて居る國民黨の大會に於てどう云ふ宣言をして居るかと思ふと、第一項に確固たる政府が今日比律賓に成立して居ると

云ふことを宣言して居る。又第八項にジョーンス法で約束をして置いたことを履行せずして愚圖々々することは亞米利加の名譽に關すると云ふことを決議して居る。比律賓では獨立を希望し又獨立し得ると云ふ自信を持つて居る。所て果して獨立をするかしないか分らぬが、要するに比律賓は自治的に非常に進んで居る。今度の亞米利加の大統領は共和黨であるから、隨て亞米利加の比律賓に對する政策も多少變化があることは不思議でない。既にウッド將軍及ハリソンの前の總督フオーブスの二人を比律賓に派遣して各方面に互つて調査せしめ、其報告を得、且ウッド將軍を總督に任命した。ウッド將軍の政策は如何にと云ふに次の章に詳細述べてあるから此所には省略するが、要するに獨立は尙早しと云ふに歸着するのである。

獨立問題は此位にして置き、扱て是から吾々が比律賓に對してどう云ふ態度を執つて宜いかと云ふに、假に比律賓が獨立したとして武力を以て之を取つたらどうかと云ふに、是は賛成出來ない、理窟から言つても他人の持つて居る物を自分が持つて居た方が都合が好いと云ふことで、それを取ると云ふ譯には行かない。卑近な例を言ふと今日日本の銀行家に金が喰る程あつて使ひ途がなくつて困つて居るとして、吾々のやうななくて困つて居る者もある、斯う云ふ者が其銀行家の金庫の中の

金を此方の懷中に入れて置いたら大變都合が宜いけれども、之を黙つて取つて來ることは出來ないのと同じやうであつて、寧ろ吾々は金庫に金が唸つて居つて使ひ途がないと云ふ場合に、其銀行と妥協して之を借出し有利に使つて銀行にも相當な利子を拂ひ吾々も利益を受けると云ふことにしたならば一番宜からうと思ふのである。又假に比律賓を取つても宜いと云ふ理窟があつて之を取つたらどうかと云ふと、それでも尙且大に考へものだらうと思ふ。之には色々の理由があるが、主なるものを言へば、第一宗教の問題である。比律賓には千九百十八年の國勢調査に依ると千三十五萬人の人口があつて、其中九百六十五萬許りの者は基督教信者である。朝鮮で少し許りの基督教信者があつても始終何か問題を起して居る、比律賓は殆ど全人口を擧げて基督教信者である。而して基督教國でない日本が行つて支配することになつたら、それだけでも大問題が始終起つて煩に堪えないだらうと思ふ。又今日比律賓人の心理狀態及歴史を見ても、比律賓の獨立問題は亞米利加が占領して以來初めて起つた問題でなく却々古い歴史を有つて居る事である。それに亞米利加占領以來漸次選舉權も擴張され、所謂自治の途を進めて來たのであるから却々今日他國の支配の下に屬すると云ふことは決して満足するものでない。西班牙に對しては反旗を翻へし、亞米利加になつて政治上の

意味から云ふと善政を布いて居る亞米利加に對してまだ獨立させぬと言つて頻に苦情を言つて居る。亞米利加では言論を壓すると云ふことはないから朝鮮人のやうな眞似はしない。併ながら亞米利加の領土たる馬尼刺に於て國民黨の大會に於て宣言書にさう云ふことを書いて少しも憚らぬと云ふ有様であるから、其點から言つても却々日本が之を支配すると云ふことは徒に勞多くして其割合に效能が少からうと思ふのである。斯様に比律賓人は政治上に於ては進んだ者を持つて居るが之に反して産業上に於ては未だ甚だ進んで居らない。産業に缺く可らざる土地資本及勞働此中の土地は成程澤山ある、比律賓の土地の面積は十一萬五千平方哩あつて日本の本土と餘り變らぬ、さうして山嶽もあるが平地も日本の割合より多い、それに對して人口が一千萬しかないと云ふ風であるから土地は潤澤である。それで勞働はどうかと云ふと、熱帶地方は天恵が多い爲めか氣候の影響の爲めか知らぬが能く働かぬと云ふのは確かである。一人としての勞働者の能率は甚しく低い、さうして見ると勞力と云ふものは缺乏して居るやうである。亞米利加の領地になつてから、亞米利加は金持の國であるから資本を澤山入れたらうとは想像されるのであるが、實際見ると割合に入つて居ない。何の爲めに亞米利加から資本が入らぬかと一寸不思議に感ずる人もあるが、日本の資本家で、

亞米利加が資本を入れないのは儲からぬから入れないのである、儲かるなら遠慮して入れない筈はない、故に日本から資本を入れても駄目だ無駄だと言ふ結論をした人もあるが、一應は尤もの考である、併し著者の調べた所に依ると亞米利加の資本を餘計入れない主なる理由は、亞米利加はそれ自身の仕事は澤山ある今日戦争以來亞米利加が投資國として金を貸す方の國になつたが、是までは借りて居つたのである。然るに一方亞米利加の國內に投資しなければならぬ仕事は澤山あるのみならず、中央亞米利加南米など亞米利加本國に近いから何と云つても亞米利加が相當な優先權を持たなければならず、投資もしなければならぬ。斯く國內又は隣接地に投資すべきものが多いから一萬數千哩を離れた比律賓に投資されぬと云ふのは無理もないことである。それからもう一つは政治上の將來が不安定である。亞米利加が比律賓に獨立を許すや否や、許しさうでもあるし、許さぬさうでもあると安定して居ないと云ふことが、資本家に對して甚だ面白くない、尙又亞米利加が資本を持つて來ても勞働者が今言つた通りの有様であるから、土地と資本許りではいかん。是等が主なる理由となつて亞米利加の投資が捗々しく行かないことと思ふ。それに對して日本はどうかと云ふと、第一臺灣とは殆ど一葦帶水である、長崎から馬尼刺に直航すれば三日半許りで行ける、

此近いと云ふことが非常な利益である。それから比律賓の政治上の將來是が獨立しやうが此儘で居らうが日本の投資家には大した影響はない。第三は日本からは資本と勞働とを共に入れることが出来る。其例として比律賓の南端にダバオと云ふ所があるが、其地方には千九百七年頃からマニラ麻の栽培を初めて著者もそれを經營して居る會社に關係して居るが、其處には一時八千人以上の日本人が居つて日本人の農業會社が五十許りもある。比律賓に於ては支那人の勞働者を入れることを禁じて居るが、日本の勞働者を入れることは禁じて居ないのみならず日本の勞働者の入つて來ることを嫌つて居ない。比律賓人は日本人に對して決して惡感を持つて居ない、例へば一昨年著者が行つた時に土地法で大分問題が起つて居つたが、要するに其土地法を修正して貰はんと仕事をして居る日本人が迷惑をすると云ふ點があつたから、之を修正して貰ひたいと云ふことを上下兩院の議長などに頼んで結局其諒解を得て昨年二月七日の議會に於て修正案が兩院を通過し、日本人が困る點を修正して呉れたが、其通過したる事を上院の議長が報告して呉れた中に修正案提出の理由が付けてある。どう云ふことを書いてあるかと云ふとざつと斯うである。

現行土地法は比律賓立法部の特許あるに非ざれば亞米利加人若くは比律賓人に依つて六割一分以

上の株式を所有せらるゝ法人以外に比律賓の官有地拂下及租借を許さず、然るに其法律發布前比律賓群島中殊にミンダオ島に於ける官有農業地の租借を願出で尠からざる投資をなせる日本人の會社一二にして止まらず、是等の會社は一面より言へば比律賓の農業發達上貢獻すること尠からざるものと言ふべく、隨て吾人の十分なる好意と相當なる待遇を受くべき資格あるものとす、茲に吾人は現今存在する彼我の好關係を尙一層助成せんが爲めに具體的方法を以て吾人の希望を現し、而して彼等の我國に盡せる助力に對して吾人の満足の意を表するは隣帝國の人民に對する我等の義務なり、是れ本案提出の理由とす

と云ふ説明書が付けてある。是などは日本の議會でこんな事をしたら大分問題になるであらうが、能く彼等の態度を現して居ると考へる。又一昨年態々日本の帝國大學の松波博士を聘して講義をして貰ひ、又最近向ふの大學に日本語の課目を設けたいと云ふやうな希望を述べて居る。斯様な譯で大體に於て非常に好感を持つて居るのであるが、唯一つ注意すべき事は、小國の當ではあるが武力を以て比律賓を取ると云ふやうな多少でも考若くは疑を持たしめる事は特に慎まなければならぬ。それからもう一つは日本人が往々にして比律賓許りでなく何處でもやることであるが、其土地の人

の利益を少しも顧みずして、唯自分に利益があれば宜いと云ふやうな遣方をする人がある。例ば或人は馬尼刺の附近に土地及工場を買つた、さうして其所へ高い旗竿を立て日の丸に似たやうな旗を立てた爲めに物議を醸したと云ふことがある。それから永い間比律賓に住んで居つた日本人で西班牙人から馬尼刺附近の土地を買つて砂糖畑にする計畫があつたが、土人等は驚いて自分等は先祖代々此土地に居る者であるから此所を追立てられると困ると云ふので、多數の人が竹槍蓆旗で總督府へ押掛け買戻して呉れと云ふことで遂に買戻されたことがある。それから或所では比較的高い値段で或耕地を買つた、之を其土地の人に言はせると、算盤づくではそんな値段で買ふ筈はない、日本政府が後に付いて居るのではないかと言つて驚いた。何でもない事であるが斯う云ふ事があるから餘程注意をしなければならぬ事である。外國へ行つて仕事をするには、若し外國人が日本へ來て斯う云ふ事をしたら日本人はどう思ふかと云ふことを常に頭に容れて置かなければならぬ事である。之を考へない爲め往々にして他の者にまで迷惑を及ぼす事がある。斯くの如き點に注意してやつたならば比律賓は吾々を歓迎することは疑ない事である。

本章を終るに臨んでウッド、フオーブス調査委員の編纂に係る比律賓現状の數字を掲ぐれば左の通りである

人口統計

千九百三年調査	七百六十三萬五千四百二十六人
千九百十九年調査	一千四十三萬三千八百七十五人

内 譯

基督教比律賓人	九百三十五萬二百四十人
回教比律賓人	四十三萬四千八百六十八人
佛教比律賓人	二萬五千五百六十八人
其他の比律賓人	五十四萬五十四人
米 國 人	六千九百三十一人
西班牙人	四千二百七十一人
英 國 人	千二百二人

支那 人

五萬五千二百十二人

日本人

一萬二千六百三十六人

其他の外國人

二千八百九十三人

土地統計

島嶼の數

約三千

總面積

十一萬五千二十六平方哩

開墾總面積

一萬一千五百三平方哩

此見積價格

二億二千九百萬弗(金の弗に算し)

商業的價值ある森林面積

六萬四千八百八十平方哩

内九割九分は官有

州の數

四十九

自治町村の數

八百二十九

國富見積價格

五億五千萬弗(金)

教育統計

小學 校 數

六千四百九十三

就 學 兒 童

百二萬人

小教育學を受けたる者

三割五分九厘

中等教育のみを受けたる者

八分九厘

其以上の教育を受けたる者

一割三分

教 員 の 數

一萬八千百三十四人

中米國人

五百一人

大學及同等の學校

十七

比律賓大學々生數

四千百三十人

米國大學留學生

二千七百人

出產死亡統計

死亡率

出產率

(人口千人に對し)

幼兒死亡率

	マニラ	地方	マニラ	地方	マニラ	地方
千九百〇四年	四〇・五七	二六・〇〇	三三・八〇	四〇・〇六	八〇・一八六	二〇三・七一
千九百十三年	二三・五六	一八・八五	三三・三五	三九・三四	三三・二四六	一四七・五五
千九百二十年	二六・四七	二〇・七三	四三・五四	三六・五四	二一三・〇二	一六〇・七一

財政統計

千九百二十年度總歲入

四千五十萬弗(金)

人口一人に對する租稅總額

三弗九十六仙

米國との通商千九百三年

千七百八十萬七千四百一十一弗

千九百二十年

一億九千七百五十萬六千四十一弗

新聞雜誌統計

日刊新聞

四十五種

發行數

十三萬一千四百部

週刊其他

六十九種

發行數

十九萬五千七百部

投票統計

千九百十九年一般選舉投票數

六十七萬二千二百二十二入

婦人投票權なし

言語統計

地方方言の數

八十七

種族の數

四十三

交通統計

鐵道哩數

七百五十五哩

一等道路

二千九百二十哩

第二章 獨立問題

第一節 獨立問題の起因

一、比島史の概要

比律賓群島は彼の南米尖端の海峡にその名を留むるマゼランに依つて一五二一年發見せらる、然れどもマゼランはセブの對岸マクタン島に於ける土人との戰闘中不幸にして斃れたる爲め遂に比島に根據を拵るに至らざりき。

一代の冒險兒マゼランに依りて發見せられたる比島の名一たび歐洲に傳はるや、幾多の風雲兒をして躍動せしめたり、中にも西班牙は屢兵船を艤して比島の遠征を試みたるも、レガススビーが一五六五年セブを、次で一五七〇年マニラを占領するに至る迄いづれも失敗に畢りぬ。

其の當時、東洋に新陸地の發見、又領土の擴張は如何なる目的なりしやを釋ぬるに、主たる目的二あり、一は當時歐洲に於て富の源泉と稱せらるゝ香料の產地がこの方面にあるを索ねて來るもの即ち金錢上の利益を目的とするものにして、二は西班牙及び葡萄牙の國王がキリスト教『舊教』を世

界に宣傳布教せんとするにありき、從つて是等萬里遠征し來る中には僧侶も混り居たり。

其頃比島内部の狀況を見るに、幾多の酋長各地に割據し、各勢力範圍を維持して其處に何等の統一なかりき、マニラの如きもラジャ、ラカンドラと其緣者ラジャ、ソリマンとが相對峙してマニラを兩分し居たるなり、斯く如く勢力の分散狀態にある比島は比較的少人數と比較的短時間に於て西人の爲に征服せられたるなり。

西班牙人が比島を征服し、而して之を統治せし方法は如何なるものなりしやを釋ぬるに、征服は武力に據りたるは勿論なるが、統治は宗教の力を利用するに努めたり、之れ一にその本國に於ける僧侶の勢力強大なるに因るものにして、比島に於ても總督は僧侶に一目を置くの有様なりき、斯かる僧侶の政治上に於ける強き勢力は軈て西班牙の比島領有に幾多の禍を誘引するに至れり。

比島に於ける僧侶の勢力は必ずしもその本國に於て宗教の勢力強大なる爲のみにあらず、總督は僅少の年限を以て交代するも、大僧正の如きは異動甚だ稀にして、多くは長年月その地に留まるが故に土地の事情に精通するは勿論、法門の雜輩に至りても各地に於て土人と接觸し、之を撫育するの機會多く、殊に政府が人民に對して苛酷の取扱のある場合の如きは其間に立入りて人民を保護す

るが故に土民に對する僧侶の信望は日を経て益々加はるは當然なり。

當時比島に總督として赴任し來る者の眞の目的は、善政を施きて未開の地を文化せんとするにあらず、又愚昧なる土民の智能を啓發せんとするにもあらず、一に私財の收獲にあり、比較的短年月に富裕となりて老後を風靜かなる本國の都會に送らんとするが眞の目的なりき、故にその在任中は收斂誅求を是れ專と爲せしなり、行政の首腦者たる總督既に斯くの如し、その末輩に良吏なきはいふ迄もなし、然るに一方土民に對する僧侶の信望日に加はるあり、然らでだに宗教の勢力強大なる西班牙植民地に於て、官吏が僧侶の爲に益々壓迫せらるゝは已むを得ざるなり、殊に總督の更迭に際し、その治政中の功罪を調査して之を本國政府に報告する委員中に大僧正のあるあり、若し總督にして彼の逆鱗に觸れんか忽ち彈劾の鐵槌を加へらるべし、左れば僧侶の勢力加はると共に漸やく專横の爪牙を現はし來り、遂に人民に對し精神上のみならず政治上に迄も全然之を支配するの有望なるに至れり、斯かる專横に對し總督と雖も如何とも爲す能はず、況んや地方の小官吏に於てをや、一例を挙げれば地方の官吏に於て何事かを爲さんとすれば先づ其地の僧侶に許可を請はざるべからず、即ち比島に於ける政治上の實權は總督の手より僧侶の手に移りたりといふも過言にあらず、

法門にその人を得れば或は善からんも、若しその人を得ざれば宗教政治の前路危し、一五七〇年より一八九八年に至る三百二十八年間に總督を替ふること實に百十五、更迭の頻繁なる驚くべきにあらずや。

一五七〇年、西班牙の比島領有以來十九世紀の中葉に至る迄、外國との間に多少の事件ありたり、例へば支那の冒險家リマホンのマニラ入寇の如き、或は我が豊臣秀吉の比島總督に書を送りて朝貢を迫りたる如き、又一七六一年英軍のマニラ占領（翌年平和條約成立と同時に還附）の如きはありたれど、内政上には變化なかりき。

然れども、稍にそよぐ呂宋の風は何時迄も靜かにてあらざりき、一八六九年、東西兩洋の短縮として古今の偉業たる蘇士運河の開鑿さるや、西班牙本國と比島の交通の容易になると同時に歐洲の新らしき空氣は呂宋の森にも吹きわたり漸次比島土民の思想上に變化を來せり、比島革命戰の首腦と認めらるゝマビニの如きも、その革命に關する論文に於て蘇士運河の開通が比島土民の思想に一大變化を與へたりと言へり。

二、キヤビテの動亂と三僧侶の死刑

一五七〇年より十九世紀の中葉に至る約三百年の間、内政上に一大事件として特筆するはなかりしと雖も始終平穩なりしといふにあらず、種々の騒動は各所に於て演ぜられたり、然れども其騒動たるや多くは特種の地方的問題に關聯する局部的のものにして、一般的性質を帶ぶるはあらずりと。

然るに一八七〇年に至り端なくも一般的騒動を惹起するの因發生せり、そは土人の僧侶と西班牙人の教團派僧侶との確執なりき、元來、教團派の僧侶は我邦の比叡に於ける延暦寺の如く、又高野に於ける金剛峯寺の如く、寺坊を市中に營まず、世間と交渉を絶ちて教義の研究と修業に専念し、唯市中の僧侶不足なる場合のみ出で、市中に寺坊を構ふるを許さる、故に市中の僧侶充分なるに至らば直ちに市中を引揚ぐるが當然なるに、教團派は之に背きて市中を引揚げんとせず、地の利を有する寺坊を固く持して動かざりしもの多かりしかば、遂に土人僧侶との間に隙を生ずるに至れり。

彼等兩派の宗教上の爭鬭は最も熱心を以て進行し、土人側に於ては遠くローマ法王に直訴するもあり、就中、特に力を入れて争ひたるは、ブルゴス、サモラ、ゴメスの三僧なりき、ゴメスの如き八十五歳の高齢を以て而も熱烈なる抵抗を試みたり。

一八七二年、キャピテの海軍工廠に小規模の騒動起れり、その騒動は稍土民の謀反的性質を帶び

たりしも決して一般的の叛亂にあらざりき、然るに奸譎にして陰險なる教團派は常にその間隙を狙ひつゝありたる敵將ブルゴス、サモラ、ゴメスの三僧を陥るべき好機と爲し、政治上の勢力を利用して百方策を講じ、キャビテ謀反の罪を此三僧に歸せしめん事に努めたり、專横なる西班牙僧侶に蔽はれて天目爲に闇く、マニラ法院は被告の三僧に對し證據の何等據るべきものなきに拘はらず、叛逆の大罪に問ひて死刑を言渡せり、哀れむべし無辜の三僧は法衣の儘銃殺の刑に處せられたり。

聲無き石も之を打てば鳴る、無辜の民の生命を斷ちたる暴虐なる裁判は一般の比島土民をして甚だしく反感を抱かしめたり、即ち政府並に教團派に對して何等かの方法を講ぜざれば如何なる危險に遭逢するやも知れずとの觀念——國民的自覺——その運動起るの動機となりしなり。

三、偉人リサル現はる

比律賓革命史より抹殺せんとして抹殺し得ざるもの、即ち、ドクトル、リサルルの小説及びその死刑なり、彼の健筆に成る二卷の小説は比島の土民に深刻なる國民的自覺の印象を與へたり、而して彼の死刑は國民的自覺の爆發となれり。

ホセ、リサルル、イ、メルカドは彼の本名にして一八六一年生る、比律賓人中その種々なる點に於

て他に比隣を見ざる不世出の偉人なりき、彼は幸か不幸か、その同胞が少しく國民的自覺を起せし時代に生れたり、幼少の頃より學藝衆に秀で、十四歳にして既にラテン語の詩を作りたりといふに見るも、決して平凡の人物にあらざるを知るべし、長じて西班牙本國の大學に醫學を修め、後ち維納、伯林、巴里及び倫敦等に轉學して斯學の蘊奧を極めぬ、彼の修業は單に醫學のみにあらざりき、修學各方面に亘り、實に博識多才にして語學の如きは英獨佛西は勿論、日本語さへも多少解し、其他繪畫、彫刻、更に土木に至る迄殆んど専門家の壘を摩するものありしといふ、その彫刻の如き作品今尙マニラに残存し、後人をして技巧を讚嘆せしむ。

彼が歐洲滯在中、祖國の現狀を慨し、如何にかして同胞を覺醒せしめ、以て光明の彼岸に達せしめんかに腐心し、其結果、可成廣く普及し、而して可成深き印象を與ふるの方法として小説に據るの最も勝れるを思ひ、一八八五年、白耳義に於て一書を公にせり、題してノリ、メ、タンヘレといふ同書は英譯されて『社會の腫物』と題さる。

四、リサールの小説と其死刑

リサールは小説の序に於て曰く

比律賓には非常に惡性なる腫物を生ぜり、予は之れが治療の方法として昔時病人を寺院の階段に座せしめ參詣人中之れが治療法を知る者あるを待ちたると同一方法を取らんとす、予は祖國の缺陷を世に公にするは非常に苦痛を覺ゆるも之を忍ばざれば腫物を治療するの機會なし、故に予は涙を振つて祖國の恥しき事實を少しも隠さず又偽らず之を描出す。

と、此書を読む者はその當時比島に於ける社會狀態を最も明かに知るを得、西班牙の僧侶が如何に社會上に跳梁跋扈し居たるか、一讀して瞭然たると同時に、之が救濟策はその當時土民の騒ぎ立てたる參政權の獲得のみを以て決して救濟の目的を達し得ざるを知らしむ、即ち救濟の根本問題は土民を教育してその智能を向上し、而して政治上の權利を行使し得るの能力を養成せざるべからずといふがリサールの主張なりき。

リサールはこの書に於て何等危險思想を表し居らず、即ち同胞に對して西班牙政府に謀反せよとは論じ居らざるなり、然るに西班牙の政府及び宗教家は此書を手にして痛く恐慌を感じぬ、政府はリサールの家族に對して種々なる壓迫を加へたり、その壓迫は甚だしく殘忍を極めたり、之を傳へ聞きてリサールは憤慨せざるを得ざりき、故なくして無辜の民を虐ぐる政府の魔の手は、溫和なるリ

サルをして過激に赴かしめたり、彼は一八九一年同じく白耳義に於て再び一書を發表せり、題してエル、フィリバステリスモといふ、英譯されて『貪慾の世』と題せり、内容は前著の續篇なれども思想文章共に稍過激に涉れり。

西班牙の政府及び僧侶は恰も第二の爆烈彈を投げつけられたる如く驚きたり、後著が最も彼等の忌憚に觸れたるは、リサルが同書の卷頭に於て、彼の罪なくして殺されたるブルゴス、サモラ、ゴメス三僧の靈前に捧ぐの一文なり。

即ちリサルは同書を三僧靈前に捧げて曰く

教會は卿等の犯罪を確認せざるが故に、卿等を貶するに忍びず、又政府は裁判に公明を缺き、社會をして卿等の斷罪に誤判なきやを疑はしむ、全比島の人民は卿等の靈前に禮拜し、呼ぶに殉國の士なる敬稱を以てす、卿等がキャビテの叛亂と關係ありしや否や、又憂國の士なりしや否や、更に正義自由に對し渴望せしや否やに付確證なき限り、予は單に卿等を以て予が匡正せんと欲する害惡の犠牲者として靈前に此書を捧ぐるの權利ありと信ず將來、西班牙人は卿等の名譽を恢復し、その罪を謝し、而して卿等の英靈を慰むるの日あるべきを期待す光榮ある其日の來る迄、此書を以て

處も知れざる卿等の墓に供へたる、枯たる花輪とし世人にして確證なきに拘はらず卿等生前の行爲を攻撃する者あらば、そは手を卿等の血に染むるものなることを知らしめよ。

前後二卷の小説は比島の人心に深く泌み渡りたり、恰も警鐘を亂打する如く祖國の同胞を覺醒せしめたり。

リサールは其後香港に歸りて醫院を開き、得意の眼科を営みぬ、何時の世如何なる國の英雄にも親子の情に淪りなく、リサールの如き憂國の士も祖國に在りて政府の暴虐に泣く親を思ひては斷腸の感に堪えざりしが、遂に時の總督の許可を得て歸國せり、然るに奸譎にして執念深き僧侶はリサールを社會に生存せしむるは、恰も虎を野に放つ如き危險ありと爲し、遂に比律賓群島の最南端ミンダナオ島のダビタンに幽閉して社會との交通を遮斷せり。

慷慨悲歌の士リサールは長く無爲にして配所の月を眺むるに忍びざりしが、歐洲に於ける彼の友人等は彼を救はんとして西班牙政府に請願書を差出し種々畫策する處ありたり、恰も好し、西領キューバに内亂起り、兩軍傷病者多くして醫藥の不足せるを聞き、總督に書を致し傷病者看護のため從軍せんことを請ひ、許されて西班牙本國に向け出發せり。

當時偶々總督更迭し、新總督は僧侶の讒を容れて本國政府に急報しければ、リサールの到着するを待て捕縛し、更にマニラに送還して獄に投じ、擬するに叛逆罪を以てす、法院はリサールの瑠璃の如く明瞭なる辯解に耳を傾けずして死刑を言渡し、一八九六年十二月三十日、綠蔭濃かなるバグンバイアンの芝生に於て銃殺の刑を執行せり、リサール時に年三十五。

五、アギナルドの奮起

西班牙政府の比島治政三百有餘年、その間失政の數枚擧に遑あらずと雖も、リサールの死刑は蓋しその最も大なるものならん、小銃の一弾を以てリサールの生命を斷つは容易なり、然れどもリサールの思想を斷つは難し、飛丸彼の心臟を貫く時、迸る血潮は全比島の人民に革命の洗禮を興へたるなり。

顧れば蘇士運河の開通より歐洲の新思想漸次呂宋の天地に浸潤して土人僧對教團派爭論の近因となり、無辜の三僧の死刑によりて比島人對西班牙人の問題起れり、更に憂國の士リサールの健筆に成る雄篇に依りて比島社會の缺點曝露せらるゝや一般の土民をして國民的自覺の促進となり、遂にリサールの死刑に至つて一大爆發の導火を爲し、一般的革命叛亂を起すに至れり。

是より前『カテイブナン』と稱する一種の秘密結社土人の間に組織せられ千八百九十二年、其本部をマニラに置くに至れり、此結社の目的たるや後に至り種々過大視せられ、甚だしきに至りては島中に在住する總ての白人を屠殺するを目的としたり杯、西班牙官憲より誣られたりと雖、尠くとも其當初より斯る目的ありたりと云ふを得ず、然れども千八百九十五年頃に至りては其黨員中最も過激派の一人たる、アンドレス、ボナファシオの勢力の下に漸次革命的色彩を帶ぶるに至れり、政府當局者及び僧侶團はあらゆる方法を以て此結社の内容を知らんとし、遂に千八百九十六年八月マニラ市の一僧侶マリアノ、ヒルに依つて隱謀の内容發表せられたり、是に於て當局者は愕然とし驚き、即時マニラ其他此結社の蔓延せる地方に戒嚴令を布き、盛んに檢舉を開始せり、結社員も事茲に至りては又如何ともする能はず、旗擧の準備未だ整はざりしにも係らず、マニラ市外カローカンに於て初めてカテイブナンの革命旗を翻すに至り、之れが爲め各地に散在せる黨員一齊に烽起し、キャビテ州に於てはアギナルド等指揮の下に擧兵せり、リサール死刑宣告の理由は、同人が此結社の首腦たりしと云ふにありたれども其當時リサールはダピタンに幽閉せられ事實上外部との關係を斷たれ居たれば其事あるの理なし。

アギナルドは一八六九年キャビテに生れ、其旗擧げ當時は二十七歳の青年にしてキャビテの村長を勤め居たりき、最初キャビテに民軍を起して同地の兵營を襲撃し、相當の武器を奪ひたる爲め稍成功せしかば、近隣の評判一時に揚り、來り投ずる同志多く、叛亂は附近に擴延せり、然れども烏合の衆として政府の軍隊に敵し得ず、漸次後退して森林に入り以て攻むるに難き地の利に據りて防戦しぬ、斯くては革軍も出でて戦ふ能はず、又官軍も入りて攻むる能はず、恰も蜂の巢をつゝきたる如く各地に叛亂續出しければ政府も奔命に疲れ、何等かの名目を以て干戈を斂むるの必要上、土人パテルノは總督と協議して仲裁する事となり、和議成立、革命軍はアナギルド外首領が政府より八十萬弗を受けて國外に去ること、又政府は内政を改善することを條件とし、一八九七年十二月アギナルド及首領數名は先づ四十萬弗を受取りて香港に向つてマニラを去れり、此和議を稱してピャクナバト條約と云ふ、斯くて叛亂は表面上平定せし如きも、アギナルド一派は決して比島の獨立運動を中止せしにあらず、海外にありて徐ろに再舉を圖るの考へありたるや疑ひなし、一八九八年、アギナルドは歐洲に於て比島の現狀を説明し以て一般歐洲人の同情を得んが爲め、香港より渡歐の途新嘉坡に來れり、是れアギナルドの比島に於ける再舉及び米西戰爭勃發の間際なりき。

第二節 米西戦争と比島

一、アギナルドと米領事ブラットとの約束

一八九八年に入りてよりキューバ問題に因を發し、米西兩國の國交は甚だしく危殆に陥りたり、アギナルドは祖國を西班牙政府の苛酷裡より救出せんがため渡歐に決し、四月香港發サイゴンを経て四月二十一日新嘉坡に到着せり、米西關係愈々切迫し、人道と正義を高唱して已まざる米國はアギナルドの新嘉坡着の日たる四月二十一日を以て西班牙と砲火の間に相見ゆるに至れり。

アギナルドは新嘉坡に於て、曾てマニラに於て面識ありたる英人ブレアの紹介を得て翌二十二日新嘉坡駐在米國領事ブラットと會見し何事か比島に關して密議を交へたり、當時アギナルドの行動は一般の視聽を引き、特に英紙フリープレスがアギナルドと米領事の密會を報ずるにより著しく世人を刮目せしめたり、其密談の内容に關しては明瞭の記録を留めず、又之が參考として何等文献の徵すべきものなく、人をして徒らに揣摩憶測せしむるのみなるが、後日に至りアギナルドは比島獨立の保障に關する約束ありたりと主張するに及んで遂に米國議會の問題となり、米西戦争終了後、

プラットは議會に引き出されて仔細に亘る取調べを受けたるも、宣誓の上斯かる約束無かりし旨言明せりといふ。

アギナルドとプラットの密談中、果して比島獨立の保障に關する約束あらざりしか、嚴格の意味に於ける約束或はなかりしならん、何となれば遠外駐在の一領事にして斯かる國家に重大の關係を有する大問題を約束し得るものにあらず、然れども、米國は當時西班牙と開戦早々の際なりしかば領事プラットが祖國の利益の爲に比島に名聲高きアギナルドを巧みに利用すれば比島攻略上に便利多かるべきを考へたるは想像するに難からず、故に兩者の密談中、比島の獨立に關する談話もありたらん、殊にプラットが在香港の米海軍デューウイ提督に宛て電照せし電文に徴するも多少有意味の密談ありたるを疑はざるなり、即ち其電文左の如し

プラット領事よりデューウイ提督に宛たる電文に曰く

比島叛徒の首領アギナルド當地に在り、若し御希望とあらばアギナルドは直ちに香港に歸りマニラの叛徒をして提督と協力するの打合せを爲すべし

と、而して之に對しデューウイの返電に曰く

アギナルドを直ちに送れ

と、斯くてアギナルドは四月二十八日英船マラッカ號にて新嘉坡を發し五月四日香港に歸着せり。
然れども、時既に遅く、デューウィ提督は本國政府の電命に依り艦隊を提げて西班牙艦隊擊滅の爲にマニラに向け出發の後なりき。

アギナルドは已むなく香港駐在米國領事を介してデューウィに請ひ、其許可を得て米海軍運送船マカロク號に搭乘し、比島の獨立——祖國救済の希望に燃えつゝ五月十九日マニラ灣の一角たる彼の居村キャビテ、ビエホ村に到着し、直ちに上陸せり、當時既に米海軍は西班牙艦隊擊滅の後なりき。

二、アギナルドとデューウィ提督との約束

五月一日、米海軍は比島の海上權を掌握し得たるも、陸兵を有せざるが故に纔かにキャビテの海軍兵營を占領せるのみにて他の陸上に對しては如何とも爲す能はず、マニラ市に對してさへも指を染むるを得ざりき、茲に於てデューウィはアギナルドの舉兵を便として之を許し、鹵獲の西軍々器を與へたり、即ちアギナルドは同志を糾合して軍隊を組織し、キャビテを根據として威を近隣に振へ

り、八月米國陸軍の到着する迄、武を練り兵を養ひ、聽て來るべき一大機會に對し多大の期待を有しにき。

八月、米陸兵を滿載せる運送船連橋して來り、直ちにマニラ攻撃に移りたるも、米軍司令官は考ふる所あつてアギナルド軍の參加を許さざりき、そは彼等軍兵に充分の訓練と節度なく、且つ西班牙人に對する憎惡心深刻なるものあり、若し彼等にマニラ進入を許さんか、掠奪と殺戮の危險あるを慮りたるが爲なり、斯くて米軍専らマニラ攻撃に當り、八月十三日、星條旗はサンチャゴ城頭高く掲揚せられたるなり。

アギナルドとデューウィ提督との間にはブラット領事と同じく比島獨立の約束問題起れり、アギナルドはキャビテ舉兵の際、提督と比島の獨立を明かに約束せりと主張し、之がため米國政界の問題を惹起し、戦後上院特別委員會はデューウィ提督を召喚して該約束の有無を質せしも提督之を否認し、結局確認するに足るべき證據なき儘有耶無耶の裡に葬り去られたり。

この問題に關しては曩に第一回及び第二回比律賓委員會の一員にして引續き十三年間比島政府内務部長としてマニラに居住し、比島事情の權威者たるウースター博士は、その著『比島の過去及現

在』に於て數百ページに亘り有らゆる方面より考證して該約束の有無を攻究し、其結論に於て何等約束なかりし事を證明せり。

領事ブラットと謂ひ、提督デューウィと謂ひ、その地位よりして斯かる大問題を隨意に約束し得るものにあらず、彼等とアギナルドとの會見中、假し比島獨立に關する談話ありたりとするも、それは自己の出來得る範圍に於て比島人民の爲に其獨立に關する便宜を與ふべしといふに過ぎざるべし、蓋し此位の程度なるべし。

然れども比島人民は獨立問題に對して一の大なる希望と期待を有し居たるがため戰後米國が比島領有に決するや甚だ之に惑ひたるなり、そは米國は對西宣戰の布告に於て領土の獲得を目的とせず、キューバの人民が西班牙政府の苛政に虐げらるゝを傍觀するに忍びず、即ち正義と人道の見地よりしてキューバ人を西班牙の暴政裡より救出するを目的とすと云へり、米國の宣戰理由は昭々として日月の如く、何人の見を以てするも米國に野心の疑ふべきものなかりき、戰爭の結果は西班牙敗れて米國の勝利に歸せり、故に比島は西班牙の手より離れて米國の領有となるなく、比島は比島人の國土として其獨立を許さるべきものなりと思考し居たるなり、斯かればこそ一般比島人をしてアギ

ナルドのブラット領事及びデューウィ提督と約束ありとの主張を無稽にあらずと信ぜしめたりき、然れども比島は米國の領土となりぬ。

三、比島共和國の成立及消滅

アギナルドはデューウィ提督の許を得てキャビテに於て兵を擧ぐるや五月二十四日、一般比島人民に對し布告を發して曰く。

西班牙軍を殲滅し、憲法を制定して政治の組織完成するに至る迄、予は比島共和國の獨裁主權者たるべし

と、六月十二日、獨立國旗を掲揚し、地方行政制度を設け、代議士選舉令を發布し、同二十三日、獨裁政治を廢し、革命政府を建設し、アギナルドは假大統領となれり、八月一日、各地の議員選舉を行ひ、本部をキャビテよりマニラの北方二十哩のマロロスに移して此處に議員を召集し、九月二十九日憲法成立して立國の基礎完了せり、いふ迄もなく、アギナルドは第一期大統領に選舉せられたり。

當時米軍は依然マニラ市を占領して比島軍の入市を許さず、比島軍は市外のサンファンデルモン

テ橋を境界として屯營し居たり、之より先きマニラ攻撃に比島軍の參加を許されざりしことはアギナルドを始め一般比島人民をして痛く失望せしむると同時に、甚だしく憤慨せしめたり、從て比島軍は米軍に對し快からざるものありたる折柄、比島兵のサンファンデルモンテ橋通過に際し米兵の誰何に答へざりしてふ一小事件の發するあり、偶々之が導火を爲して兩軍は砲火を交ゆるに至れり、米軍は間もなく比島軍の根據地を衝きて之を占領し、比島軍は散亂して折角の獨立も有名無實となり了れり。

大統領マツキンレーは比島の處分に關し調査の必要上時のコーネル大學總長シューマン博士を委員長とする調査委員の一行を比島に赴かしめ比律賓に對する米國施政の方針を定むる參考資料の報告を爲さしめたり。

第三節 比島の處分とジョーンズ法

一、米西講和條約成立と比島の處分

四月二十一日砲火を開きたる米西戰爭は百十有四日後の八月十二日休戰條約成立せり、その十二日

は比島の十三日に相當し、恰も米軍のマニラを攻陥して星條旗をサンチアゴ城頭に打ち樹てたる日なり、

同年九月、米西兩國の全權委員巴里に會合し、講和談判を始めたるも容易に調はず、就中米國側に取りて難問題とせられたるは比島の處分なりき。

之先、アギナルドは五月比島に歸りて舉兵するや、香港に於ける同志に檄を飛し、革命政府の利益の爲に各國政府に向つて熱心なる運動を試ましめ、尙米西の講和談判に際しては代表者を或は巴里に或はワシントンに派遣して米國の比島領有の不條理を説き、只管その獨立の實現に努めたり、然れども大統領マツキンレー氏は輿論の趨向に鑑み、左の如き理由に基きて比島の領有を電命せり。

米國は西班牙の苛政より比島人民を救ひたり、故に之を西班牙に還附するを得ず、又他に讓渡するも不可、然るに比島人民の現状は智能の發達充分ならず、即ち獨立の能力なきを以て其時期の到來迄之が傳育の任に當るは米國の義務なり

といふか理由なりき、斯くて比島の領有を包含する講和條約は一八九九年四月十一日、批准交換せられたるなり。

二、ジョンズ法の由來

比島領有を包含する講和條約の批准に際し之が許否權を有する米國上院（出席議員數の三分の二以上の賛成を必要とす）に於て五十七對二十七を以て可決せられたるに見るも比島領有が米國の全部を擧げて希望せしものにあらざるを知るべし、左れば米國議會は比島人民に自治を許すべきを方針とし、左の條件を具備するに至らば、民議院の開設を許すべしとの法律を作りたり、即ちその條件は第一——一般の平和狀態の持續、第二——國勢調査の完成、第三——國勢調査完成後二年間平和狀態の繼續なりき。

一九〇〇年三月十六日、第二回比島委員會委員任命せられ、委員長はタフト氏にして委員一同マニラに出張し種々調査する所ありたり、一九〇二年七月三日迄比島は軍政なりしも、一九〇一年七月二日より軍政内に民政長官を設けたり、一九〇二年七月四日、軍政を撤し、又一九〇五年二月民政長官の名を廢して總督と爲し、第一期總督にタフト氏任命せられたり。

一九〇五年三月、比島の國勢調査完成し、而して其後二年間平和狀態を繼續しければ愈よ民議院の開設に決し一九〇七年十月十六日を以て開院式はマニラに於て舉行せられたり是れ比島自治の

第一步なるも未だ充分ならず、例へば立法行政の兩權を有する上院類似の機關ありて其多數は米人なりき、其他比島人民は財政の調節に對しても何等の權能なかりしなり。

民選議院設立と同時に議院は代表者二名を選出してワシントンに駐在せしむる事となれり、此制度は布哇或は米國大陸中の領地と稱する未だ獨立に至らざる州（現今無し）に於けると同じ、代表者は米國の費用を以てワシントンに駐在し、兩院に於て投票權なきも發言權を有するものなり。

翻つて當時に於ける米國政界の情勢を観るに、一八九六年の大統領選舉に於て共和黨はマツキンレー氏にして民主黨はブライアン氏各々候補者なりき、而して兩黨宣言の主義綱領中其の最も重要な論争點は銀貨自由鑄造問題なりき、選舉の結果共和黨の勝利に歸し、マツキンレー氏大統領となりたるが、其治政中の一八九八年米西戦争起りたり、次期の大統領選舉（一九〇〇年）は兩黨の候補者前回と同一にして、民主黨候補者ブライアン氏の宣言中には依然銀貨自由鑄造問題を含み居たるも兩黨の最重要論争點は最早銀貨問題にあらずして實に帝國主義の是非にありたり、即ち共和黨は帝國主義を是とし之に對し民主黨は反對の地位に立ちたるなり、約言すれば比島の處分問題が兩黨の最重要論争點なりき、選舉の結果は從前の如く、民主黨敗れ、更に一九〇四年及び一九〇八年の選舉

毎に民主黨は非帝國主義を主張して選舉を争ひたるも勝利は常に共和黨の手に歸しにき、然るに一九一二年、共和黨はタフトとルーズベルトの二派に分裂せし爲め茲に一大隙を生ぜしかば遂に民主黨の乗ずる所となり、選舉の結果一大學教授より身を起して躍進民主黨の候補者となりたるウィルソン氏の當選を見たり。

當時ボルチモアに於ける民主黨政綱中に比島獨立問題を含み居たるなり、左れば同氏が一九一三年大統領就職以來比島問題の解決に銳意し、其第一着手として總督其他官吏の大更迭を行ひ、而して新總督ハリソン氏の赴任に際し、獨立に關する大統領の意見を比島人に傳へしめたり。

共和黨治政中の比島統治方針と民主黨新政のそれと根本の相違を解説するに格好の適例あり、それは彼の比島政府の内務部長として十三年間引續きマニラに在りたるウィスター博士の辭職するや、居住米人の主なる者はマニラホテルに相會して博士の爲に送別の宴を張りたり、其席上博士の試みたる演説中、比島統治方針に關して左の如き一節あり、即ち曰く

比島人に獨立を與ふとするも、未だ其時機にあらず、何となれば現今の比島人は多くの點に於て自主獨立の資格に缺如すればなり、合衆國は恰も後見者の幼兒に於ける如く彼等の手を引きて歩

ませざるべからず、即ち比島に於ける施政の方針は米國が見て以て比島民永遠の利益なりとする事は比島民の賛否に係らず、之れを遂行するにあり。

この演説のありたる翌年、ウースター博士の後任として來りたるデニソン氏は主として米人より成るシチー俱樂部の晝餐會席上に於て左の如き演説を試みたり、即ち曰く

比島政府は比島人の負擔する租税を以て其經費を支辨し居れり、即ち比島政府の收入は比島人の金なるが故に、その金を如何に使用すべきかを考慮するは納税者の權利たらずんばあらず『註に曰く、比島に民政開始以來統治費に對し合衆國政府より補助を受けたることなし、只一回比島飢饉の年合衆國の決議を以て四百萬ペソの救恤金を受けたるのみ』由來東洋人と米人とは事情を異にす、米人の如く焦急の辯を比島人に望むの必要なし、即ち比島の政治は比島人が認めて以て利益なりと信ずる事を行へば事足る。

以上兩者の演説に就て見るも共和民主兩黨の比島に對する統治方針に根本の相違あることを知るべし。

比島より第二回目には派遣せられたる代表者の一人にマヌエル、エル、ケソン氏あり英明の士にして

比島自治獨立の促進に與つて大いに功ありたり、ケソンは呂宋の片田舎に生れ、マニラに出て、法律を學び、辯護士となりて種々の公職を兼ね、遂に比島の代表者として派遣せられたるなり、頭腦極めて明敏にして奮闘努力を主義とし洵に精氣發瀾たる偉丈夫なりき、最初代表者として米國に渡りたる時は、英語不充分なりしも半年後には巧妙なる演説を爲し得たるに徴するも、其非凡なるを知るべし、ケソンは前述の如き比島に對する米國政界の情勢を觀取するや好機逸すべからずと爲し、ワシントンに於て政客の間に大いに活動し、殊に當時下院議員にして米國領有地に關する常設委員會の會長たるウキリアム、アトキンソン、ジョーンス氏の信任を得たり、是れ比島の自治に數段を進めたる自治法案の提出者にして同案が普通ジョーンス法案と稱せられたるは同氏に依りて提出せられたるに依る。

二、ジョーンス法發布

ジョーンス氏提出の比島自治法案は米國下院に於て相當議論ありたるも一九一五年の議會に於て大體原案の通り可決せられたるが上院に於ては容易に決せざりき。

當時上院に於ては比島の事情に通ずる議員少數なりしかば自治法案を特別委員の審査に附せり、

委員會は院外の方面に亘りて比島事情の精通者を求め、之が意見を徴しにき、此中には第一期比島總督にして前大統領たるタフト氏ありウースター博士あり比島副總督マルチン氏あり前副總督ギルバート氏陸軍省屬島事務局長マーカンタイア將軍あり、比島代表者ケソン氏あり其他實業家宗教家等十有餘名に上りたり。

是等諸氏の意見は必ずしも一ならず、或者は獨立を許すべしと説き、又或者は自治を非とするもありたり、然れども委員は大體の事情を知るを得たれば之を上院に報告せり、當時上院に於ては共和民主兩黨の勢力相半ばし該法案の討議に於て共和黨は法律前文の將來に於ける獨立許容の約束を削除すべしとの修正を主張し、民主黨は之に反對して若し右の約束を削除すれば該法案は無意味なるべしと説き、討論久うするも何等決するなくして遂に會期は終れり、この報一たびマニラに至らんか、比島人民の失望甚だしきを思ひ、ウイルソン大統領は彼等を慰撫せんが爲に『來議會には之が通過に努むべし』との電報を送りたり。

翌年再び該法案は上院の議事に上れり、討論の末左の二修正案成立して可決せり。

クラーク氏の修正『法律發布より二年乃至四年間に於て大統領が其時機と認むる時獨立を與ふべ

し、若し與ふ可らざる事情ありたる時は其旨議會に報告すべし』ゴルナ氏の修正『比島固有の飲料の外禁酒令を施く』

然れども下院はこの二修正を削除せしかば兩院協議會ありて遂に下院の主張成りて一九一六年八月十九日可決確定し、同月二十九日大統領の裁可を得いよ／＼法律となりて發布せられたり、問題となりたる同法律の前文は、第一章に之れを譯出したれども再録すれば左の如し。

米國は領土獲得を目的として西班牙と戦ひたるものにあらず、比島に確固たる政府の建設せらるゝに至らば直ちに合衆國の主權を撤廢し、彼等に獨立を與へんとするは合衆國民の意思にして、開戰當時と今日と何等淪る所あらざるなり、故に此目的を達せんがため、合衆國の主權に障害を與へざる範圍内に於て比島人をして出來得る限り多く比島の内政に關與せしめ、他日獨立の曉能くその權利の行使に適せしめんが爲に此法律を發布するものなり。

右の法律前文は明かに比島の獨立を保障するものなるが、尙その前文の次に權利法典 (Bill of Rights) の規定あり、英米兩國のそれと略相似たるものにして、言論の自由、信教の自由、法律の定むる裁判を受くるの權利、ヘビース、コルパス、既往に遡る法律を拵る可らず等比島人民の自由及び生命

財産の安全を保障するものなり。

ジョーンス法の内容に付ては次章に詳論する處あるを以て茲には之れを省略し唯舊法に比し異なる主なる點を擧ぐれば

一、立法と行政を斷然區別し、比島人に全然立法權を與へて總督を純然たる行政長官たらしめし
たること、

二、合衆國大統領の任命する官吏の數を限り、其以外の官吏の任命に關する協贊權を比律賓上院
に與へたること、

三、公債募集及び關稅變更の自由を與へて財政運用の範圍を廣からしめしこと
即ち兵事及び外交事務を除きては殆んど獨立と異なるなき狀態となりたるなり。

第四節 米國の歐洲戰參加と比島

這次の大戦に於ける特別現象の一ともいふべきは小弱國に對してその獨立に關する權利を認むる
にあり、殊に民族の自主的權利に對する列強の容認に就てはポーランドの如く又チエツク、スロバ

ツクの如く特に著しきものあり、又米國大統領ウキルソン氏の宣言中その第五條に左の如き言あり
即ち

殖民地の處分はその殖民地所有者の意向同様に殖民地住民の意向をも尊重して公平なる處置を爲すべきなり

と、叙上の傾向と謂ひ、又ウキルソン氏の宣言と謂ひ、比島獨立の爲には多大の便利あるものなり、左ればこそ比島の政治家はこの好機逸すべからずと爲し、主として左の如き二の方法に依り、戦後比島獨立の承認を求むべきを計りたり、方法の第一は米國の參戰と同時に比島人より成る二萬五千の義勇兵を募りて之を合衆國大統領に提供せり、一見すれば單純なる比島と合衆國との關係に過ぎざる如きも、少しく立入りて考ふれば比島人も聯合國の目的を賛し犠牲の一部を分擔せんとするものなり、而して方法の第二は軍費の分擔なり、即ち合衆國が世界人類の自由の爲に戦ふの主旨を以て募集せし所謂自由公債に對し比島人は熱心に應募し、毎回數千萬ペンを米國に供給せり、是れ亦前記の如く一見すれば比島と合衆國との單純なる關係の如きも決して然らず、總て獨立の前提たらんが爲に外ならざるなり。

敵極度の疲弊困憊は世人の意表外に休戦の期を速めたり、茲に於て比島人は委員を合衆國に急派て獨立に關する適切なる運動を始めたり、是れ當時内外の新聞紙の傳へたる所の獨立請願委員とす、委員長は多年比島人の代表者としてワシントンに、駐在し、その政客の間に熱心且つ巧妙なる運動を試て幾多顯著なる功績を擧げたるケンソン其人にして、蓋し最も適任といふべし、彼等は出發に際し左の兩院決議書を受け、ウィルソン大統領不在に付之れを陸軍大臣ベーカー氏に提出せり。

比律賓獨立請願委員は合衆國政府に對する比島民の好意友情並に感謝の意を最も明瞭に言明すると同時に最初の機會に於て充分なる敬意と信賴とを以て比島獨立問題を提出し最後の解決を計る可し、而して此問題を議するに當りては千九百十九年三月九日比律賓立法議會に於て承認せられたる宣言書に記述せる事實並に主義の概略を深く留意す可し。

比律賓人及び之れが獨立請願委員に取りて最も幸福とす可きは此獨立問題に關する主なる事實及び之れに適用さる可き主義原則に就き何等爭議の點なき事是なり、比島民は既定の主義に準據して作りたる計畫の實施に必要せる細目を満足に定めんが爲めには只合衆國政府と委員との間に眞宇なる意見の交換を必要とするのみなる事を信ずるものなり。

此主義原則たるや新たに發見したるものに非ずして其大部分は千七百七十六年米國が當時現在の比島より少き人口と財源を有したるにも係らず大膽にも眞正の權力は國主の意志に依るものに非ず人民の承諾に依るものなりとの原則の下に新政治組織を建設したる時に於て既に宣言せられたるものなり、一國民が他の支配下を脱して獨立したる事實は歴史に其例乏しからずと雖も、其羈絆を脱するに常り宇宙の通理及び自然法を招致し來つて單に自國の爲めのみにあらず、同様の位置にある世界の他の國民の爲めにも正義自由の原則を打立てたるは蓋し米國の舉を以て嚆矢とす可し。

此偉大なる國民と過去二十箇年間膝を交へて共に事に當りたる比律賓人は此原則は其當時と今日との間何等差違あるものに非ざる事を信ずるに至れり、時に此原則に背馳せる言論なきに非ざりしと雖も責任ある宣言は常に此主義を是認し而も屢々明言せられたるを以て比島人民は合衆國の目的は併合又は領土擴張に非ずして全く正義人道並に自由にある事を信ずるに至れるは當然の事と云ふ可し。

此了解の下に比律賓人は彼等の期待の實行せらるべきを信じ、這回の戰亂の必然の結果として起る可き革正と其國民的人格の向上に務め、其初に當りては米國有司と和衷協同し其終りに及んでは

内政に對しては殆んど總ての責任を負ひ以て合衆國より與へられたる政權を善用し米國占領以來今日に至る迄過去二十箇年間に於ける國民的記錄は之れを全世界に發表し、之れが檢閲及び批評を受けるに躊躇せざるなり。

一方に於て今日の戰爭に依り人類社會組織を道德的及び政治的に再評價したる結果として民主主義の大勝利を得たる事實は千七百七十六年に宣言せられたる原則（米國獨立の宣言）に一新生命を與へたるものにして事實上千九百十六年の約束（ジョーンス法前文の公約）を批准確認せるものと云ふ可し比島人は米國參戰の目的は比島人の希望と合致するを思ひ雙手を舉げて之れに賛し僅少ながら彼等の精力と資財とを米國に提供したると同時に主義理想の合致を精神とし比島に於ける米國の國際的責任を引受けたり、戰時中種々の動搖騷擾ありたるにも不拘社會の秩序井然として亂れず米國の星條旗悠悠々として朝風は翻れるは米國軍が比島に駐在せる爲めにあらずして比律賓人民が誠心誠意米國に忠節を盡くしたるに依るものなり。

今や戰終り優勝せる此主義原則を實行せんとして世界各國孰れも之れに熱中せる時に當り自治の能力を遺憾なく發揮せる比島人が其國運の最後の決定を合衆國又は若し必要ならば世界の裁判に要

求するは蓋し其時機を得たるものと云ふ可し、比律賓問題は各方面の利害關係極めて複雑なるが故に請願委員は獨立の條件及び新國家の安全保證と外部殊に米國との關係に就ては公平にして相互に利益ある程度に於て充分なる論議を爲す權限を有せり、而して此點に就ては委員は合衆國が是迄比島に對して採りたる政策の精神に従ひ、殊に千九百十四年の獨立案起草せらるゝに當つて考慮せる相互の了解並に利益の意義に留意するを要す、而して今回の戰爭に依りて現はれたる主義が滔々たる勢を以て從來成立せる國際間の關係に變更を來したるを以て前述の獨立案中に記述せる條規中變更す可き點あるは誠に其所にして殊に世界の平和を維持し正義を樹立せんが爲め列國協同一致の行動を採るの有効なるを信ずるが故に比律賓は出來得限り速に此協約に加入し得る方法を採る可し、最後に於て比律賓人は其主權國より離れて新に獨立國家を樹立するに當り、其茲に至れる精神並に目的を最も精確に言明するの必要ありと信ずるが故に委員は以下の事項を明示す可し。

一、比島人が必ず附與せらる可しと信ずる獨立を與へらるゝのみならず、比島人をして其程度に達するを得せしめる米國人の努力に對する感謝の意は比律賓が獨立したる後と雖も米比間の關係に疎隔を來す事なく劫つて一層密接となるに至る可し

一、此感謝の意は米比間將來の關係を定むるに於て根本的事實たる可し

一、現今の國際關係に於て比律賓人は唯自由及び文明の普及を計るの一手段たるを企圖するに過ぎざるなり

一、比律賓政府は常に立憲的行動を取り其國內に居住する各國人に對し眞の民主的政治の恩恵に浴せしむ可し

一、比律賓は自己の力のあらん限り又各國に於て承認する限り所謂戰後の革新、正義、平和の爲め各國と協力して之れが遂行に務む可し

一、最後に比律賓は新たなる地位を得て從來の善政を保取助長し比島をして從來の如く法治、秩序、正義、自由の地となし、此領土内にある國民は其米國人たると又他の外國人たるを問はず安全に彼等の財産權利を行使し、繁榮と幸福を享有するを得せしむ可し

第五節 獨立問題の現狀

ヴェルサイユ平和會議の結果は甚しく米國人の不滿を買ひ、ウキルソン氏の名聲を失墜したると

同時に、反ウキルソン反民主黨の氣分國內に横溢し、米國上院は遂に専らウキルソン氏の首唱に成れる國際聯盟を含める平和條約の批准を拒絶するに至れり。斯くの如き形勢なりしかば比律賓獨立案の如き之を議會に諮るも到底通過の見込あるべき筈なし、然れどもウキルソン大統領は自己の任期中最後の議會に送れる教書中に左の提言を下したり

茲に諸君の注意を乞はんとする一事は、比律賓自治法施行以來同島民は確乎たる政府を建設維持し來り、獨立を與ふる先行條件として附したるものを具備したるを以て、余は茲に曩に爲したる公約を履行し彼等が希望せる獨立を與ふるの自由と義務とを有する時機に到着せる事を提言せんとするものなり

共和黨多數を占めたる議會に於ては此教書に對し、何等の處置を執ることなくしてウキルソン大統領の任期終れり。代つて大統領の榮位に就きたる共和黨のハーディング氏は就任早々、ウッド將軍及前比律賓總督フォーブス兩氏に命じ比律賓の現狀を調査し之が報告を爲さしめたり。兩氏は其隨員と共に千九百二十一年五月四日馬尼刺に着し、三四箇月に亘り各地に旅行し、到る處地方人士と會議を開き、必要と認めたる場合は秘密會をも催し、各方面の人士に就き其忌憚なき意見を聽取し

たり、其旅行の範圍を見るに、比律賓群島四十九洲中四十八洲に亘り、會議を開きたる場所實に四百十九箇所の多きに及びたりと云ふに至りては、如何に此調査委員が比律賓全體の人士よりファスト、バンド、インフオメーションを得んとするに努めたるかを知るに足るべし。

斯くの如く熱心忠實に材料の蒐集に努めたる調査報告書は、千九百二十一年十一月三十日馬尼刺に於て公にせられたり。之を一讀するに一般民情を始め政治行政立法經濟の各方面に亘り詳細に現狀を描出し、一方比律賓人及其希望に對して同情を表すると共に、其缺點又は失政に對しては遠慮なき批評を下し、左の結論に到着せり。

一、人民は幸福且平和にして大體より見れば繁榮と云ふを得べし、米國治下に在るの利益を適切に感ぜり

二、基督教比律賓人は到る處獨立を希望し、其多くは米國保護の下に之を得んと欲せり。之に反し米國人及非基督教比律賓人は米國治下に在る事を希望せり

三、米國保護の下に獨立するは眞の獨立にあらざる事を認識せざる者多きを見る

四、政府破壊の因を爲すべき事情絶無と言ふを得ず

五、官吏の中少からざる部分は性質善良にして能力を有し、其義務を遂行するに誠實なるを認むれども監督不十分なると又十分の経験なき者を急速に任命したる結果、一般行政事務の能率は低下したり

六、比律賓人は官吏として格別の能力を發揮したる者多く、殊に青年官吏は將來特に有望なり、官吏任用令は大體に於て正直に運用せられたりと雖も、黨派的任命の爲め尠らず腐敗せるを見る

七、司法權執行に對し疑懼の念甚しく政府の安定に障害を與ふる虞あり

八、經濟上より言ふも國防上より見るも獨立を維持するに足る程度に組織十分ならず

九、立法部は威嚴あり且代表的人物を網羅せり

十、或種の公務が成績不良なるは比律賓人固有の無能に基因するに非ずして、寧ろ経験なき事及之を得るの機會なかりし事、並に監督不十分の結果なりと言はんとす

十一、官吏任命に對し上院の協賛を得るの必要は、時に總督と上院との間に確執を來することあるべし

十二、比律賓の有する種々の美點は之を認むるも、過去八箇年間事實上自治を實行せる成績より見るに合衆國の監督を撤し陸海軍を引上げ、比律賓の運命を其肥沃なる土地及商業上の利益に漙漙する強國の意に任すべき理由を發見せず。此時期に於て比律賓より米國の主權を撤廢し、其關係を斷ち、比律賓に對し秩序ある恒久的鞏固なる政府を建設する最好機會を與へざるは、比律賓人に對しては不信米國人に對しては不幸にして、進歩に逆行し米國の責任を盡さざる甚しきものなることを確信す

以上の理由に依り左の進言をなす

一、比律賓が既に與へられたる政權を有効に行使するに至るまで十分の時間と與ふる爲め、當分の間現狀を維持すること

二、合衆國の責任ある代表者たる總督に其地位に對する責任に相當する權力を與ふること、即ちジョーンズ法に依りて與へられたる督總の權限中、其後比律賓立法部に依りて制限又は分割せられたるものに對し、若し比律賓立法部に於て之を復舊せざる場合は、米國議會は是等の法律を無効と宣言すべし

三、官吏任命に當り若し總督と比律賓上院との間に確執を生ぜる場合は之に對し最後の決定を與ふる權限を米國大統領に附與すること

四、如何なる事情ありとも合衆國をして、比律賓に於て責任のみありて之を果すの權力なき地位に陥らしむる如きことある可らず

比律賓人側殊に過去八箇年間實際行政權を掌握しつゝありたる國民黨の人々より見れば、此結論及進言に對して首肯し難き點あるべしと雖も、調査委員たるウッド將軍並に前總督フォブス氏の人物閱歷より言ふも、亦其調査の詳細に亘りたる點より見るも、合衆國大統領及共和黨の多數を占むる會は此報告に基き對比律賓策を定むべく、殊に委員の主班たるウッド將軍は十月初比律賓總督に就任したるより見るも、此方針を實行すべきこと疑を容るべからず。果して然らば比律賓獨立問題に茲に一頓挫を來したりと言ふべく、比律賓人の失望誠に同情すべし、然りと雖も大勢は轉々して一刻も休止することなく、前記報告書結論中、比律賓より米國の主權を撤廢し陸海軍を引上げ肥沃なる土地及商業上の利益を得んとする強國の取るに任せ云々の點は、報告書作製後米國主裁の下に太平洋會議華盛頓府に開かれ、四國協商、海軍々備制限等の協定成り、若し比律賓獨立に對し必

要なりとせば四國が其領土保全を保障するが如きは易々たる事なるべく、此點に就ては米國並に比律賓は深く顧慮するの必要なるべし。唯其内政並に經濟的組織に於て完全なる獨立國たるの域に達せりや否や、本章に論じたるが如く獨立問題は其起因する所遠く、十九世紀の半ばに及ぶと雖も人民が政權を行使するに至りたるは米國占領後の事にして、而も千九百七年民選議院設立に初まりたりと言ふも不可なく、自治法施行せられてより近々七八年に過ぎず、而も其短日月の間に於て比律賓人の示したる自治の能力進歩の行程は、世界の人をして驚嘆せしめたるものあり。ジョーンス法前文に現れたる獨立の公約は柄として日月の如く、之を破るが如きは單に比律賓人に對して信を破るに止らず、米國人否全世界の人に對して其不信を表明するものにして、米國人として又其國柄として爲し能はざる所なれば、假に比律賓獨立の時期少しく遅るればとて一國民の生命より見れば十年又は數十年は寔に一刻の事にして深く焦慮するに足らず、而も此間其内政及經濟組織を完成するに意を用ひば、結局比律賓人として何等の損害なく、寧ろ禍を轉じて福となすに非ずや、余は比律賓の友人として彼等の希望に同情し彼等の能力に敬意を表するもの、必ずや余の誠意を諒とせん。

第三章 比律賓の政治組織

現今の比律賓の政治組織を述べる前に、比律賓と米國との法律上の關係を簡單に言へば、比律賓は米國が所謂ライト、オブ、コンクエストとして西班牙から割讓されたものであつて、米國の領土たるに於て何等の疑がない、併ながら比律賓人は米國人と同様の憲法上の權利を有するやと云ふに、米國の憲法は比律賓に施行されて居ると云ふ譯に行かぬ。即ち我國で云へば朝鮮臺灣などに比較すべきものである。米國大審院の判決例に依れば、比律賓は米國々内法に對して米國の一部でなく、國際法上から見れば米國の一部である。此結果として米國の法律は特に比律賓にも之を施行することを明言して居ない限り比律賓には施行されぬ。例へば米國の禁酒法の如き比律賓には行はれて居らぬ。併ながら米國領土の一部であるから之に施行する法律は米國は議會に於て作ることが出来るのみならず、之を他の國に割讓し又は獨立を與へることも米國議會で決定することが出来るのである。右の次第であるから今日の比律賓の政治組織は米國の議會で作つた法律に依つて出來て居るのである。或る制度の如きは法律の明文はないが別に法律で禁じて居らぬ爲め、一種の法律外の制

度として現存して居るものもある。

そこで今日の政治組織の基礎をなして居る法律は何であるかと云へば、前二章に於て大體其内容を述べた千九百十六年八月二十九日に發布せられた比律賓自治法一名ジョーンズ法である。此法律の出來た來歴に付ては前章に述べたから之を省略して、現在の組織を述べれば、大體に於て米國の制度と同じである。即ち司法立法行政と三權分立して居つて、行政の長官は言ふまでもなく總督で米國上院の協賛を経て大統領が任命するものである。此下に副總督があつて是も同じく大統領の任命に係り、總督の代理をする外教育部の長官である。此以外比律賓の役人で米國大統領が任命する者は大審院長及判事八名、會計検査院長並次長等合せて十三名であつて、其他の者は皆比律賓上院の協賛を経て總督が任命するものである。立法部は上下兩院から成立ち、總て比律賓に發布せらるゝ法律は之を通過しなければならぬのである。司法部は大審院、始審裁判所及區裁判所（ジャステイス、オブ、ピースコート）であつて、此以外馬尼刺市の如き特別の市に於てはミニシバルコートと稱する手輕の裁判所がある。

總督及行政部

言ふまでもなく總督は、外に向つては比律賓政府を代表し、内に於ては行政長官であると同時に米國大統領の代表者として合衆國の利益を保護する一の監視者である。是が結果として第一政務に關する合衆國政府との交渉、合衆國在外領事及比律賓駐在外國領事と通信並に交渉、第二犯罪人引渡に關する事務、第三旅券發行の如き、比律賓代表者としての職責であつて、又行政長官としては行政全部に關する司配監督の權を有する外特に法律に明記せられたるものは、第一合衆國大統領の任命すべき者以外の比律賓政府の官吏の任免、但し任命の際は比律賓上院の協賛を要す。第二罪人の恩赦減刑、第三法律に依り其用途を指定し居らざる官有地を移民、公賣又は特殊の公共的用途に用ひる爲め之を保留すること、第四土地收用、第五外國人追放、但し此場合は追放さるべき人に自己を辨護する機會を與ふるを要す、第六上院の協賛を経て保護及公安の爲め散在せる小部落を合併集中すること等である。尙又合衆國の利害を保護看視する大統領代理者として總督は比律賓立法部の通過した法律に對し不裁可權を持つて居る。ジョーンズ法の前文にも合衆國の主權に障礙を及ぼさざる限り國內の政治に干與せしむ云々とある通り、比律賓人に自治を許すは宜いが、勝手に法律を作り合衆國の利益と背馳したる、又は國際間の問題を惹起すが如き法律を施行されては外國に對す

る責任者たる合衆國が迷惑をする譯であるから總督は、若し斯かる法律案を通過した時には之を裁可しない權能を持つて居る。併ながら此不裁可權は絶對的のものでなく、同一法律案が三分の二の多數を以て再び兩院を通過した時には不裁可の効力を失ふ。此場合は合衆國大統領が持つて居る絶對不裁可權を行使するより外はない。尤も兩院を通過した法律が大統領の手に達してから六箇月間に不裁可の宣言がない時は裁可したものと看做され法律となるのである。

比律賓には所謂開化した比律賓人即ち一般から言ふと基督教比律賓人の外に、蠻人と稱する半開の者があつて、是等の蠻人は固より代議制の理窟などは解らぬ人々であるから、隨て是等の人々の中から代議士を選出して議會へ送ると云ふやうなことは出来ない。是等の者の代表者として總督は適當と認めた者を上院議員に二名下院議員に九名任命することになつて居る。即ち是等蕃人の利益は總督が之を保護すると云ふ譯になつて居るので是等蕃人に直接關係ある法律は時に依り總督が不裁可することがある。例へば千九百二十一年三月蕃人子女の強制教育に關する法律を不裁可したのは即ち其理由である。尙此外總督は比律賓に於ける安寧秩序を保持し外敵に對して領土を保護する爲めには、比律賓の軍隊又は義勇兵を召集し、又合衆國陸海軍司令官に其部下の軍隊を出動せ

しむることを請求し、必要の場合は戒嚴令を布くことが出来る。副總督は總督不在又は他の理由の爲めに總督が職務を執行することが出来ない時に之に代る者であつて、同時に教育部長官である。從來は行政部が内務、教育、財務並に司法及商務並に警察と云ふ四省に分れて居つたが其分類が少しく不都合であるので、比律賓自治法發布後此分け方を變更する爲めに委員を任命し研究した結果、第一地方官憲の政治を指導する爲め内務省、第二國民の智育體育を保護増進する機關として文部省第三官業並に歳入徴收及財政事務を司る爲めの大藏省、第四法律の執行秩序公安の保持及び國民の權利を保證する爲め司法省、第五自然の資源を保存し並に是が發達を圖る爲めの農務省、第六國民共通の福利を増進し、且一般の繁榮を圖る方法にして私人の爲す能はざる所を行はんが爲めの商務交通省を設置することとなつたのである。而して各省は更に其中に種々の局課があつて、それぞれ所管の事務を掌つて居る、今主なるものを列記すれば。

總督に直屬するもの 會計検査院、官吏任用を司る人事局、比島護國軍

内務省に屬するもの 非基督教種族事務局、地方局、憲兵隊、比律賓一般病院、醫術開業試驗委員會、馬尼刺市及バギオネ市

文部省に屬するもの 教育局、保健衛生局、檢疫局

大藏省に屬するもの 税關、稅務局、金庫局、造幣局、印刷局

司法省に屬するもの 司法局、地方裁判所、土地登記所、公益事業監督院、圖書博物並記錄局、

監獄局、

農務省に屬するもの 農務局、山林局、土地局、氣象臺、科學局、農業植民事務局

商務交通省に屬するもの 土木局、郵便局、物品供給局、商工局、勞働局、測量局

であつて今日に於ては文部省を除く各省の長官は何れも比律賓人であつて、局長も教育局山林局、氣象臺、科學局等三四のものを除いては總て比律賓人である。

抑々立法行政司法の三權を分立すると云ふとは十八世紀英佛兩國政治學者の説であつて、是が感化を愛けて造つた米國の政治組織は此主義を採つて居るが、實際に於ては此間に十分の聯絡が取れて居らなければ仕事をやつて行く上に於て非常なる不便不都合を生ずるが故に、米國に於ても行政權を握つて居る大統領と、立法權を持つて居る議會との間に、表面何等の聯絡がないかの如く見えるが、政黨發達の結果多くの場合大統領は議員の多數とは同一政黨に屬するが爲めに、不十分ながらも

兩者の間に聯絡が取れるのである。又英國の如きは議會に於ける多數黨の首領が其主なる黨員を率ゐて内閣を組織するので、或意味に於ては内閣即行政部は立法部の執行委員會の如きもので最も能く立法部と行政部の聯絡が取れて居るのである。英國の自治植民地例へば加奈陀の如きは總督は英國政府を代表して居るが、其下に議會の多數黨の首領が首相となつて内閣を組織して居ること、殆ど英本國の政黨と異る所がない。比律賓に於ては最初自治法が發布された時に米國式にするか英國式にするかと云ふことで色々議論があつて、一時は英國式に倣つて内務長官を閣員の首席とし、多數黨の首領で下院議長であるオスメニヤ氏を之に當らしめんとしたのであるが、少くとも二つの不都合なる事情があつて之を實行することが出来なかつた。夫れは第一文部長官は米國大統領の任命するものであつて常に米國人であるのみならず比律賓の政黨に屬して居ない、第二オスメニヤ氏は下院議員であるから内務長官として行政部を率ゆると同時に下院を率ゆることは出来るとしても、上院に對しては多數黨の首領であると云ふ外何等の關係がない。殊に上院はオスメニヤ氏と殆ど肩を聯ぶるケンソン氏が議長として之を率ゐて居るので、オスメニヤ氏が一人で行政部に入つたならば上院と行政部との間に常に種々の問題が起りはせぬかと云ふ懸念もあつたのである。さればと云つ

て今日の比律賓ではオスメニヤ、ケンソンの兩氏が聲望力量共に他に卓出し比律賓を背負つて立つて居る人であるから、總督が政治をやつて行く上に於て常に相談をする必要があるのて、遂に一種の變態内閣を造ることになつた。之をカウンシル、オブ、ステートと云ふ。此變態内閣は自治法にも書いてなく又法律で以て造つた制度でもなく、總督の行政命令で出來たもので、所謂エキストラリィガルのものである。而して是が議長は總督自身であつて、オスメニヤ氏は副議長である、其他は各省長官及上院議長であつて、即ち總督副總督及行政各部の長官と、上下兩院議長等て組織せられて居るのである。

斯くの如くカウンシル、オブ、ステートは法律外の制度であるが、實際に於ては比律賓最高の機關であつて、其主なる仕事は第一重要な政務に就き總督の諮問に應じ助言を與ふること、第二豫算を調製し總督が之を立法部に提出する前に承認を與ふること、第三行政部各省の方針を決定すること、等であるカウンシル、オブ、ステートは比律賓に於ける制度上の最高機關であることは前述の通りであるが、更に實際に立入つて觀察すれば、比律賓の政治は總督と上下兩院議長の三人で行つて居ると言ふことが出来る。是は上下兩院議長が當然斯くの如く重要なものであると云ふよりは。

比律賓の政黨關係とオスメニヤ、ケソン兩氏の人物の然らしむるものである。序を以て米國占領後の比律賓政黨の概略を述べれば、最初は千九百年にフエデラリスタ黨が出来てドクトルタベラ、トレスポインカミノと云ふやうな人々が主としてやつて居つたので、其宣言に依れば、米國の主權を認め戰鬪を休止し平和の手段を以て相當の權利を與へられんことを米國に請願すると云ふことであつた。併ながら平和の手段に依つて獨立を圖ると云ふ論者もあつて漸次に其勢力を増し千九百七年民選議員選舉の結果に依ると、八十一名中三十二名のナシヨナリスタ議員を選出するに至り、フエデラリスタ黨の後身たるプログレッシスタ黨は僅に其半數即ち十六名の議員を得たに止つた、ナシヨナリスタ黨は其後も獨立問題を携けて大に奮闘した結果輿論は翕然とし之に歸し、今日に於ては新にデモクラタ黨が出来たが其數は極めて少く、上院に一二名下院に數名の議員を有するのみであつて、大多數はナシヨナリスタ即ち國民黨員である、而して下院議長オスメニヤ氏は此多數黨の首領、上院議長は其副首領である。そこで若しオスメニヤ氏が多數黨の首領であるならば當然其政黨を率ゐて居るのであるからオスメニヤ氏と總督と兩人で相談をしたならば、副首領たるケソン氏を此中に加へずとも差支はなく比律賓の政治は兩人で出来るではないかと言ふ人もあるかも知れない。

いが、是はさうは行かぬ理由がある。それはケンソン氏とオスメニヤ氏の比律賓に於ける勢力は一般にはオスメニヤ氏の方が強いことになつては居るが、ケンソン氏の勢力も亦頗る侮る可からざるものがあつて、オスメニヤ氏と雖も常にケンソン氏と相談の上でなければ獨斷でやると云ふ譯には行かぬ。又此以外に表面には現れないが、オスメニヤ氏は比律賓群島中央部及南部住民たる密西耶人の代表的人物であると同時に、ケンソン氏は馬尼刺及其附近のタガロ人の代表的人物であつて、此二種族が比律賓の二大種族であるので、例へば我國の關東關西と云ふやうな趣もあるのである。殊にケンソン氏は官吏任命に對する協贊權と云ふ如き行政權の一部を持て居る、上院の議長であるから、どうしても萬事に就て此人を除外することは出来ぬ。

余談に涉るが比律賓に於ける二大勢力たる此兩氏は其性質が全然違つて居つて、一口に云へばケンソン氏は西洋流オスメニヤ氏は東洋流である。前者が馬を陣頭に進めて三軍を叱咤する鬪將であれば後者は謀を帷幄の内に運らす謀將である、ジョーンス法發布の時迄は、ケンソン氏はワシントンに駐在し専ら米國政客の間に奔走し之れが通過を力め、オスメニヤ氏は比律賓に留りて同志の結束を堅ふすると云ふ様に兩者共各其得意とする事をやつて居つたから何も問題は起らなかつたが、同法發

布の結果上院が新たに設けらるゝ事となつたのと獨立問題が先づ目鼻が付いたので、ケソン氏は比律賓に歸り上院議長となつた。夫以來両者が同じ舞臺で働く事となつたのであるから勢ひ両者の間に勢力争が起るに至つた。尤も此争は必ずしも両氏が意識的にやつて居る譯ではないかも知れないが、両氏は夫れ／＼配下があるので本人がやらなくても其配下がやると云ふことになるのは誠に止むを得ない事である。乍併表面両氏が争を初める事になると第一獨立問題にも影響するし又反對黨の乗ずる處ともなるので、兩者共互に耐忍して今日迄表面大なる衝突をやらなかつたが、最近のマニラの新聞に依ると愈々今度は破裂したらしい。其結果は果してどうなるかは分らぬが、今日のナシヨナリスタ黨は余りに優勢であつて獨立問題に對し一致の步調を取る上からは誠に好都合であつたが、政治上の監視者としては反對黨が余りに貧弱であつて充分の監督が出来ないので自然事横の事も出来たのであつたが、若しケソン氏とオスメニヤ氏とが對立するならば兩方共相當の勢力を有するのであるから、此點に於ては政治上一つの進歩を來す事と思ふ。乍併之れが爲めに獨立問題に多少共頓挫を來すが如き事あつては、誠に遺憾である。賢明なる兩氏はデイヴァイド、エンド、ルールと云ふ事は先刻御承知の事と思ふから杞憂に過ぎないであらう。

立法部

米國議會に於て特に比律賓にも施行せらるべきものとせられたる法律以外の比律賓法律は、總て比律賓立法部を通過したるものでなければならぬ。即ち比律賓に於ける立法權は上下兩院より成る比律賓立法部に屬するものである。比律賓議會は毎年十月十六日（公休日ならば其翌日）馬尼刺に召集せられ日曜日を除き百日より多からざる期間開會せらるゝのである、總督は必要と認めたる場合三十日より多からざる期間臨時議會を召集することが出来る。比律賓立法部は一般の立法權を持つて居るのであるが、比律賓は獨立國でなく、米國の治下にあるのであるから、米國の法律に依つて此權利を與へられたるものであつて、隨つて米國の法律で禁じて居ることは出来ないのである。今如何なる事が禁じられて居るか即ち比律賓立法權には如何なる制限があるかと云ふに、第一、比律賓大審院及始審裁判所の管轄事項を縮少することを得ず、但し擴張するを妨げず、第二、總督の任命に依る上下兩院議員（上院二名下院九名）に關する規定を變更改廢することを得ず、第三、米國との間の關稅に關し立法することを得ず、第四、教育局非基督教教種族事務局衛生局を廢止することを得ず、第五、總督の行政監督權を取去ることを得ず、第六、輸出税を課することを得ず、第七、權

利法典を侵害することを得ず、第八、法律案は一定の形式を以てすることを要す、第九、米國議會は比律賓立法部に於て與へたる法律特權其他の權利を變更し改訂し又は廢止することを得、第十、總督及米國大統領は不裁可權を有す、等である

比律賓に於て發布せられたる總ての法律は前掲第九の制限に依り米國議會に於て之を廢止することを得るのは勿論だが、是と同時に米國大統領の裁可を得ざれば有効とならざるものがある。それは第一米國以外に適用さる可き關稅、第二官有地、第三山林、第四鑛山、等五移民、第六幣制に關するものである。

議員の數は自治制發布の當時(即ち千九百十六年)に於ては下院九十名上院二十四名であつたが、下院の方は其後州の分立があつたので幾分か増加することになつた。選出さるべき議員の數は人口に割當てゝあるが、少くとも一州から一人は出すことになつて居る、選舉權はどうなつて居るかと云ふに自治法にもクォーリフアイド、ゾォーター即ち制限されたる選舉權者と書いてあるが、其制限なるものは如何なるものであるかと云ふと極めて僅かである。即ち二十一歳以上の他國の臣民にあらざる男子で、一箇年以上比律賓に住居し、其中半箇年は其選舉區に住したる者の中左の何れ

の一項にても該當すれば選舉權があるのである。

一、五百ペソ（圓と同價）以上の不動産を所持し若くは三十ペソ以上の直接國税を納むる者

二、英語西班牙語若くは土語の中一を讀且書得る者

三、此法律發布の時現に選舉權を有し且行使したる者

此選舉權は上下兩院の何れの選舉にも同じである。被選舉權は選舉權を有する者で英語又は西班牙語が出來、年齢は下院議員は二十五歳以上上院議員は三十歳以上の者に限り、選舉區は小選舉區單記である。

司法部

比律賓の裁判所は大審院、始審裁判所、ジャスティス、オブ、ピースコート及馬尼刺市に於ける刑事に限る市裁判所があつて、訴訟を決するのである。大審院は最高裁判所であつて上告事件を取扱ふので、通常の場合が最終の裁判であるが、事件の問題が米國の憲法法律若くは條約等に關するものであるか、又は事件の金額が五萬ペソ以上のものであつた時は更に合衆國大審院に上告することが出来る。判事の數は院長以外に八名あつて米國大統領の任命するものである。始審裁判所は群

島各地に散在し一司法區域に一つづゝある、但し馬尼刺市は特別であるから四つある。始審裁判所は普通一人の判事で事務を執つて居るのであるが、別に補助判事があつて事務の多い所には臨時に應援に行くのである。馬尼刺市には始審裁判所が四つあると言つたが、是は裁判所か四つあると云ふのではなく、事實に於ては裁判官が四人居つて別々の室でやつて居るのである。即ち我が裁判所で第一部とか第二部とか云ふやうなものである。ジャステイス、オブ、ピースコートはミュニシパリティ毎に一つづゝあつて、總督が任命し別に任期を定めず誠實に職務を執行する間は免職せらるゝことがない、其地方の始審裁判所の判事の監督の下に在つて、刑事上の小事件とか宣誓とか又は商人の帳簿の證明とか云ふ事を扱つて居るのである。馬尼刺市には市裁判所と云ふのがあつて、餘り重大ならざる刑事問題を至極手輕に取扱つて居る。之には辯護士も附かず裁判官が即決刑の言渡をする。尤も被告が不服の場合には始審裁判所に正式の裁判を仰ぐことが出来るのは勿論である。

裁判官の獨立と云ふことは何れの國に於ても必要な事であつて、行政官が濫に之を免黜するやうなことがあつてはならぬ、比律賓に於ても此事は十分保障されて居る。即ち大審院判事は大統領の任命する所であつて終身官である。始審裁判所の判事は比律賓上院の協賛を経て總督が任命するの

であるが、是が罷免は大審院の判決に依つて始めて總督がやるのであつて、是があるまでは總督と雖も如何ともすることが出来ない。又ヂヤスチース、オブ、ピースは監督判事たる始審裁判所判事の進言がなければ免職をすることが出来ぬことになつて居る。唯一つ茲に問題となるのは裁判官の任地を變更することである。我國に於ては曾て此問題で大分議論があつたことがあるが、比律賓に於ても一昨年始審裁判所判事ボレメオ氏を他の場所に轉任せしめんとして一問題を起し、遂に大審院に於て司法大臣は本人の意思に逆つて轉任を命ずることが出来ぬと云ふ判決を下した。

比律賓には我國の如く裁判所内に検事局と云ふものがなく、其代りビュロー、オブ、ジャステイスと云ふ一般検事局とも謂ふべき一局がある、其長官が即ち検事總長である、検事總長は政府が原告か被告かになつた時には總て政府を代表して法廷に立つのであつて、實際に於ては其部下の検事がやるのである、地方には各州毎にフィスカルと稱する官吏があつて、此職務は中央に於ける検事總長と殆ど同一である。

次に財政の事に就て一言して此章を終りたいと思ふが、先づ豫算は如何なる方法に依つて編成せらるゝか、要するに財布の口を誰が握つて居るかに依つて人民の政治上の權力の強弱が岐れるので

あるからは頗る大切の事である。今行はれて居る方法は先づ第一にカウンスル、オブ、ステートて翌年度の財政の大方針を定め、此方針が定つた上で各省の局課長に其各受持の仕事に對する豫算を各所屬長官の手許まで出させる、各省長官は之に對し増減を加へ其省全體の豫算として之を大藏省に差出す、大藏省の長官は斯くして集つて來た各省の豫算の中重複等の點はないか、又カウンスル、オブ、ステートて決定した方針と背馳するやうなものはないかを検査して全體の豫算を編成するのである。若し大藏長官と各省の長官と意見の衝突する等の事があつた場合には之をカウンスル、オブ、ステートに持出し是が決定を仰ぐ事になつて居る。斯くの如くして大藏長官に依り編成されたる豫算は之をカウンスル、オブ、ステートに先づ差出し是が承認を受けるのである。豫算がカウンスル、オブ、ステートの承認を経たならば總督は之に對する意見を付して立法部に提出する。立法部では先づ之を下院に於て議することになつて居るが、最初一般的の討議があつて其際は大藏長官が議會に出席して豫算に對する各種の説明をする。若し必要があるならば其他の各省長官の出席を求めて説明を聽くことも出来るのである。大體に於て異議がなければ之を委員會に廻して尙詳細の點を討議した法上律案として議會に報告する。下院に於て通過したならば之を上院に廻し上院でも下院と同

様な順序を経て而して始めて豫算が成立するのである。豫算は最初立法部に提出せらるゝ時には收入全體に對する支出を定めてなく、一部の收入を餘して置ゐて、其餘つた部分に對しては立法部に於て用途を定むる餘地を存して置くことになつて居る。今千九百二十一年の收支豫算の概略を示せば次の通りである

收入の部

租 稅 收入

五六、〇三六、〇〇〇比

官業收入並に利子

二三、五七二、三三二同

雜 收 入

四、六八一、六〇〇同

合 計

八四、二八九、九三二同

支出の部

收 稅 費用

一、六八八、三七〇比

官業經理費

一四、五〇二、五〇四同

公債償還並に利子

三、四五九、二八一同

一般行政費

五、二〇二、〇九八同

公安維持に關する費用

一〇、三七三、四一一同

社會改良に關する費用

九、〇九三、四二三同

産業發達に關する費用

一〇、四三七、八五一同

地方費補助

一五、三四七、〇九五同

退職恩給基金

六〇〇、〇〇〇同

官業起業費

九、八四五、七四五同

豫備費

三、〇〇〇、〇〇〇同

合計

八三、五四九、七七八同

差引剩餘金

七四〇、一五四同

次に政府の收入の主なるものは先づ第一セデュラ税、是は一種の人頭税であつて、官吏軍人外國使臣其他貧民不具者等を除く十八歳以上六十歳以下の男子は總て課税せらるゝもので、年額一人に付二ペソ、此税を拂ふとセデュラと云ふ一の證明書を呉れる、是が即ち自己を證明する證據となる

ので、比律賓に於ては法律上の手續をするには此證明書を持つて居らなければ出来ないのである。第二所得税、第三相續税、第四關税、第五消費税、是は煙草燐寸酒と云ふやうなものに對する内地消費税で、隨て之を輸出する時分には免税されるのである。第六、免許税是は營業職業等に對する税であつて、職業に對しては一定の免許料を取り、營業に對しては賣上高の一分と云ふやうな率で税金を徵收するのである。第七、印紙税、是は種々の證書若くは證券等に貼用する印紙税であつて我國のものと大差はない。第八、銀行保險會社等に對する税金、第九、森林税、第十、鑛山税、と云ふやうな租税と其他に官業の收入、例へば鐵道會社の收入及國立銀行の政府の持株に對する收入等が主なる財源である。

第四章 比律賓產業一斑

比律賓政府の許可を得て本書に、同政府商工局出版の經濟地圖を附録として添付せり。以下述ふる所を此地圖と併せ見らるれば一層了解に便ならむ

比律賓は農業國であつて、是は其土地の面積(十一萬五千平方哩)と人口(千三十五萬人)との關係より云ふも、亦其經濟的發達の道程より見るも、亦自然力の強烈にして植物發育の容易迅速なる點より考ふるも、當然然るべきであつて、若し蘭領爪哇と同じ割合にすれば裕に七八千萬の人口を收容することが出来る譯である。勿論今日の爪哇人と比律賓人とは色々の點に於て相違があつて、殊に比律賓人は都會に居住する者は言ふ迄もなく、又田舎に住んで居る者も漸次生活の程度を昂めつゝあるので、單に農業國として爪哇と同じ割合に人口を收容することは無理であらうと思ふが、千九百十八年國勢調査の結果に依ると、比律賓の土地の總面積が二千九百六十二萬九千六百町步(一ヘクタアを一町步と換算して)であつて此中私有地となつて居るものが四百五十六萬三千七百二十

三町歩、而も耕作されて居るのは其中の約半分である所から見ても、將來人口増加の餘地のある事は言ふ迄もない。比律賓上院議員「ゲバラ」と云ふ人は比律賓繁榮策として人口を増加する必要から將來は比律賓に移住する者は夫婦者に限ると云ふ移民法を議會に提出すると言つて居る位である。斯くの如き次第であるから、農業の方法も大體より見れば所謂エキステンシブ、カルチベーションであつて、椰子栽培の如き土地を要すること大なる農業が盛んであると同時に、米作の如きも一町歩よりの收穫高平均二十貫俵として十五俵位と云ふ如きものである。

主なる農産物は如何なるものなりやと云ふに、食料品としては第一米であるが、米の耕作面積は約百三十萬八千町歩であつて、是が收穫高は粃百五十三萬餘噸、即ち二十貫俵として約二千五十萬俵である。比律賓人一人平均一ヶ年に粃二俵半づゝを食するとすれば千三十五萬人に對し二千五六百萬俵の粃を要する譯であるが、産額は二千五十萬俵で、約五百萬俵の不足を來して居る。是は主として佛領印度支那即ち西貢からの輸入で補充して居るのである。比律賓は我國などゝ違つて人口に比し土地が多いことであるから、主食料たる米を外國から輸入するが如きは一見甚だ奇體なる譯であつて、千九百十八九年の如き印度米作不作と戦争とのめ、蘭貢は勿論西貢に於ても輸出を禁

止し又は制限した時の如きは、比律賓でも米不足の爲め非常なる困難を生じた等の事があつて、米の生産増加を叫ぶの聲が昂まつたのであるが、元來比律賓に米の耕作が今日まで尙一層廣く行はれて居らなかつた一の理由は、他の耕作物例へば麻に比較して米の耕作は収入が少い、數年前或人の調査した所に依る同一の勞働者が麻畑に働くのと米田に働くのとは、其収入に於て一と一半の相違がある。即ち麻畑に働く方が五割方収入が多いと云ふことであつた。此數字は米と麻の價格の變動に依つて常に變つて來る譯であつて一定しては居らぬが、大體に於て斯くの如き關係があることは事實である。併ながら比律賓に於て米の産額を増加するには必しも耕作面積を増すには及ばない又勞働者を増さずとも、種子の改良並に植付方法を改良すれば現在の儘でも二割位の増收を得るのは困難でない。而して二割増收すれば殆ど消費額と生産額と同數量になるのである。

次に砂糖は、餘程昔から比律賓に産出せられ、西班牙時代に於ては赤糖の産額相當の量に上つたのであるが、分蜜糖工場の設立されたのは米國占領後であつて目下運轉して居るもの並に建設中のもの、其甘蔗消費能力は次頁の表で之れを知る事が出来る。

一箇年の生産額は千九百十八年の國勢調査の數字は少しく多きに失する嫌があるので農務局の調査

した數字に依ると、千九百十八年の産額約四十萬噸で、主として原料糖として米國に輸出さるゝのである。日本にも多少輸入せらるゝが、馬尼刺附近の工場で造る砂糖の中で色が少し白きに過ぎるものがあつて、日本の關稅法に依る和蘭標本に較べると色が白い爲めに高率の關稅を課せられたと云ふやうな事があつたと聽いて居るから、輸入者は此點に注意をする必要がある。尤も「イロイロ」地方の物は此處がないとのことである。今砂糖會社の場所及び其能力を示せば第一表の通りである。

（次頁參照）

纖維科の植物としてマニラ麻と云ふ主要なるものがあるが、是は比律賓の特産物と稱して差支ないものであつて、比賓賓の經濟界で云つて見ると先づ我國の生絲に相當する位のものである、のみならず是が栽培に於ては我が資本も比較的多く投せられて居る、又我が勞働者も多數従業して居ることであるから、是は別章に於て詳論することゝし、此處には唯千九百十八年度耕作面積、收穫數量等の數字を掲げるに止める。

耕作面積	五十一萬二千五百町步
收穫數量	十六萬六千八百噸

第 一 表
Factories Under Operation

Name of factory	Where located	When built	Capacity Tons cane Per day
Calamba Sugar Estate	Canlubang, Laguna	1913	1,800
San Jose Milling Co.	San Jose, Mindoro	1910	1,000
San Carlos Milling Co.	San Carlos, Negros Occidental	1914	800
North Negros Sugar Co.	Manapla, Negros Occidental	1918	600
Bearing Central	Cabancalan, Negros Occidental	1914	500
Philippine Sugar Development Co.	Calamba, Laguna	1914	300
De La Rama Sugar Central	Bago Negros Occidental	1913	300
Guanco Central	Hinigaran, Negros Occidental	1913	300
San Isidro Central	Cabancalan, Negros Occidental	1917	250
Carmen Central	Calatagan, Batangas	1914	200
Palma Central	Ilog, Negros Occidental	1916	200
San Antonio Central	La Carlota, Negros Occidental	1913	150
Dinalupihan Factory	Dinalupihan, Bataan	1913	125
Talisay Central	Talisay, Negros Occidental	1913	125
Canlaon Factory	Canlaon, Negros Occidental	1913	125
Muntinlupa Factory	Muntinlupa, Rizal	1912	100
Saint Louis Oriental Factory	Manaog, Pangasinan	1912	90

**Factories Under Construction or Projects Definitely
Planned for Immediate Development**

Hawaiian-Philippine Co.	Silay, Negros Occidental	1,500
Pampanga Sugar Central	Floridablanca, Pampanga	1,500
Mao Sugar Central	Mao, Negros Occidental	1,500
Bais Sugar Central	Bais, Negros Oriental	1,000
La Carlota Sugar Central	La Carlota, Negros Occidental	1,000
Talisay-Silay sugar Central	Talisay, Negros Occidental	1,000
Bacolod-Murcia Sugar Central	Bacolod, Negros Occidental	1,000
Isabela Sugar Central	Isabela, Negros Occidental	600

**Small Factories Using Open Train Evaporators
and Vacuum Pans**

Pampanga Sugar Factory	Floridablanca, Pampanga	1916	100
Bernia Factory	Dinalupihan, Bataan	1918	90
Kennedy Factory	Isabela, Negros Occidental	1918	90
De la Vina Factory	Vallehermosa, Negros Oriental	1918	90
Tubigan Sugar Factory	Tubigan, Bohol	1917	90



一町歩平均收穫量

三百二十六基瓦

總 價 格

九千二百五十萬ペソ

此以外に纖維科植物としてはマデーと稱し、墨西哥のヘネケン又はサイザルと同様の物が產出せらるゝが、其數量はマニラ麻に比して約十分の一である。尙此以外カボックと稱する木綿及普通の綿なども多少產するが、特に之を擧げる程の數に達して居らぬ。

油脂科の植物にあつては椰子が第一であつて、椰子にも種類が多いが比律賓にあるのは主としてコ、椰子である。此椰子は其實を取り其中にある肉を乾燥してコブラと稱するものとなし、之を機械に掛けて含有する所の脂分を取るのであるが、此脂は食料として又石鹼などの原料として其用途が甚だ廣い。此椰子に付ても比律賓に於ける主要なる產物であるのと又麻と共に栽培することが利益であるので、別章麻の事を論ずる場合に更に之を詳論することゝし、唯此處には左の數字を掲げるに止める

椰子植付面積

三十三萬五千町歩

椰子實收穫數

十五億萬個

一町步收穫

四萬四千九十個

總價格

五千六百五十萬ペソ

此以外主要なる農産物としては煙草である、世界一般の人に對しては馬尼刺は煙草に依りて知られて居る位に著名なる産物であるが、其品質に於ても亦數量に於ても、呂宋の北端イサベラ、カガヤンの二州殊に前者が主なる産地であつて、之に次ぐのは同く呂宋の北部バンガシナン、ラウニオンの二州である。千九百十八年の總收穫量は六萬一千餘噸であつて、輸出金額シガーとして千四百萬ペソ、葉煙草其他として千三百萬ペソ、合計二千七百萬ペソ位である。

前にも述べた通り比律賓は農業國であつて、工業の如きは甚だ幼稚である。比律賓政府商工局發行の報告に見ても、千九百十八年現在工場労働者數が十八萬餘人であつて、此中には家庭的工業従業者をも含んで居るのである。比律賓で先づ工場と云つても宜いものは煙草工場、椰子油工場及製糖工場位のものであつて、此以外に地方に製米所は澤山あるが、是とても西貢の附近のシエロンに在るものや又は盤谷の河邊にあるものと較べると甚だ小仕掛のものである。煙草工場は主として馬尼刺市に在る。製油工場は馬尼刺及セブーに主なるものが在る。製糖工場に至つては農業の事を述

べた時に各工場の位置並に其能力の表を掲げてあるから此處には之を省略する。

工業の進んで居らない證據として最も明白なるものは石炭の消費量並に是が用途であるが、馬尼刺の石炭試験所長ヒックス氏の調査に依るに、石炭の消費高約六十萬噸の中、米國陸海軍並に比律賓政廳で十八萬噸、鐵道が九萬噸、電燈電車が八萬八千噸、内外汽船小蒸汽船が十二萬噸、製糖工場一萬一千噸、製油工場一萬噸、製氷所が約一萬噸、麥酒其他の酒類釀造所が一萬四千噸、家庭用が一萬噸、煙草會社六七千噸と云ふやうな有様で、政府と鐵道と電燈と内外汽船とで全消費量の八割を占めて居るのを見ても、如何に工業の幼稚なるかを知るに足るのである。

次に鑛業は如何にと云ふに、一口に言へば比律賓の鑛物は火山の影響を受けてブロークンアップして居ると云ふことが出来ると思ふ。例へば最も明かなる例としては石炭であるが、今日まで多少とも稼行した炭山たるボタン炭坑、セブーの附近に在る數箇所の炭坑、又最近の發見に係るミンダナオ島マランガス炭坑の如き、何れも斷層が多い。斯くの如く所謂ブロークンアップして居るから何の鑛物にしても一箇所に連續的に多量あるものが少い。石炭にしても金にしてもマンガンにしても（マンガンは何處でも多くデポジットであると云ふことであるが）銅にしても餘りに大仕掛にし

て大資本を投ずる程のものが無いと言つても差支ないと思ふ。今日まで稼行したもの、中銅は呂宋北方中央部マンキャンに稍々大なる鑛脈があつて、是は獨逸の技師及日本の技師が調査したが、曾て西班牙の時代に採易き部分は取つた事があつて、今残つて居る部分は採鑛困難なる部分であつて、且海岸まで搬出するに相當の設備を要する爲めそれだけ資本を投じてやる程の鑛量があるや否や疑問である。勿論銅の値段が今日の如く安くては問題にならぬのである。金は鑛石より採るものと砂金と兩方あるが、今日までの所成功して居るものはマสบアテ島に在るコロラド鑛業會社及呂宋島の北部に在るベンゲット、コンソリデーテッド會社（何れも鑛石より採取するもの）が主なるものであるやうに聞いて居る。石炭はセブー島にあるコンバステラ、ウリン等の炭坑は西班牙時代に採掘した事があつたが其後其儘になつて居つた。千九百八年頃呂宋島の最南端に近き東バタン島にバタン炭坑會社が起り、年々二三萬噸づゝ出炭したが、第一其品質がリグナイトの如きものであつて熱量も低い、且貯炭すると自然發火を起すと云ふやうな缺點があるのみならず、炭層の具合が良くない爲め採掘費用が多く、結局引合はなくなつて休止するに至つた。其後最近米人の手で再び採掘を開始して相當の數量を出して居るが、前述の缺點があるので果して旨く行き得るや否や疑しい。ミンダ

ナオ島のマランガスの炭坑は比律賓政府の事業として既に三百萬ペソ以上の資金を投じて居るが、炭層に斷層が多く、炭質は半無煙炭であつて熱量は高いが、比律賓の工場などでは火付が悪い爲めに使用を嫌ふと云ふのと、其他色々の理由に依つて旨く行かない所へ、此世界的不景氣は比律賓政府の歳入にまで影響をして、今の所此炭鑛業に投資する金が政府にない爲め事業は立往生の有様である。セブーには政府事業のものも個人事業のものもあつて、何れも少しづゝ出炭して居るが、未だものになつて居るものはない。

鐵は呂宋島の南部太平洋に面して居るバラカレ地方に海岸に近く相當の數量があつて、十年許り前に我が農商務省の技師が調査をして報告したことがある、又其後戰爭中久原鑛業會社が之を採掘して我國に積出したことがあつたが、餘り成功を見ずして中止するに至つた。其他馬尼刺の北方ブラカン州アンガット地方の鑛山より鐵鑛を採掘して居るが、是は内地である爲めに積出が不便である。今の所では土人が小仕掛に木炭鐵を造り農具などを製作して居るに止まる。マンガンは主として呂宋の最北端支那海に面したるバンギイ地方にあつて品質も餘り粗惡でなく、我が枝光製鐵所などの使用に適するのみならず、海岸に近く且我國と比律賓との間を往復する汽船の航路から僅に數

哩の場所であるので、我國から比律賓に石炭を積來つた船が、復航の荷物として頗る適當の品であつて、著者が曾て戰爭中枝光製鐵所に約三千噸を賣つた事があるが、鑛所の設備不完全の爲めに洗鑛搬出積出等が十分に行かないので、一回きりで中止し其後鑛區所有者が死亡し、著者も亦一時新嘉坡に去つたので、其後如何なる有様になつて居るか知らない。尙此附近にはアスペストスをも産し上中下各種の品質のものがあつて、既に多少採鑛して馬尼刺に搬出しアスペストスの板を造り、マニラホテル最上層の客室の天井杯に用ひて居るが少しく資本を注入する人があつたら物にならぬことはないと思ふ。

此以外重要な鑛物としてレーテ島にアスファルトの山がある。是は二三人の米國人が所有して居るが、資金がない爲め事業を發展させることが出来ない。所で或る日本人が是が日本一手販賣權を得るを條件として十萬圓許りの投資をすることにしたと云ふことである。我國都市に於てはベトナムにアスファルトの需要が多々あるのであるから、是は良い思付であると思ふ。併ながら色々地方的事情が日本などは違つて居ることであるから、愈々日本に積出して十分の利益を得るまでは尙幾多の困難があることを覺悟せねばならぬ。石油は呂宋の最南端ボンドック半島及ミンダ

ナオ島ラナオ地方に産出するべき見込がある。殊にボンドック半島にはリツチモンド石油會社が技師を派して却々大仕掛のボーリングをやつて居るが、未だ石油噴出のことを聽かない。

比律賓政府の科學局で調べた所に依ると千九百十九年度の主なる鑛産は左の通りである。

	數	量	價	格
金	百九十七萬六千五百五十一瓦		二百六十一萬九千四百四十九ペソ	
銀	二十六萬一千五百五十八瓦		一萬八千八百二十八ペソ	
鐵	一萬八千五百九十八噸		九萬二千九百九十ペソ	
アスベスト	三百七十五噸		三萬七千五百ペソ	
石	炭	三萬二千八百九十二噸	八十二萬二千三百ペソ	

比律賓全體の面積二千九百萬町歩、中森林の面積は千八百七十萬町歩、即ち約三分の二であつて、此中二百萬町歩は商業的價値の無い山林又は草原で、残りの千六百萬町歩が何れも商業的價値ある森林である。而して此森林には如何なる木材があるかと云ふに、比律賓政府は木材を分つて四種となし、一等材料二等材料三等材料及四等材料と云ふが、是は主として價格に依つて分つたもので、木の硬さに依つて等級を付したものと見ることも出来る。一等材料は家具建築の柱材、鐵道枕木等に使用す

るのであつて、其名稱はヤカール、イビル、モラベ、ナラ、ティンダロ、アクレ、等である。二等材として最も普通に使用されるのはギホ。三等材はアビトン、タンギリ。四等材はラワンと云ふやうな木材であつて、一箇年産出の數量は千九百十八年に於て一等材五萬七千立方メートル、二等材三萬三千立方メートル、三等材九萬五千立方メートル、四等材十九萬五千立方メートル、總計三十八萬立方メートルである。製材所は各島到る處にあるが、馬尼刺附近に一箇所、ネグロス島に一箇所大なるものがある。詳細は附録の經濟地圖に載せてある。比律賓木材は將來我國に輸入し得るものであつて、且日本人も此事業に従事することが出来るのであるから十分に研究する必要があると思ふ。去りながら之をやるに就て特に注意研究すべき點は、元來比律賓の森林は天然森林であつて、植林でないから、種々の樹が雜然として生繁つて居つて其中重要なものゝみを採伐することは費用が多く掛るから、全體又は大部分を伐出す積りて、森林中成べく需要ある樹の多く生長して居る場所を選ぶ必要がある。之に加ふるに運搬の便不便は此事業の根本を爲すものであるから、此點に付ては十分の研究をする必要がある。因に比律賓の森林は主として官有地であつて、一年以上二十年の採許可を得ることになつて居る。而して料金は一等材千尺べに付て十ペソ、二等材六ペ

ソ、三等材四ペソ、四等材二ペソの割である。此外森林副産物としては籐、コバルガム、ルンバン等があつて、籐は細工用とし、コバルガムはワニスの原料として、又ルンバンは是より油が取れる。

比律賓は我國と同様に四面環海であるから水産の豊富であることは言ふまでもない事であるが、今日の所甚だ發達して居らぬ。其中眞珠採取業は主として日本人の經營する所であつて、歐洲大戰前は眞珠貝の需要が多く、隨て値段も高かつたので、三百噸位の輸出があつて其價格も三十五萬ペソ位に達して居つたが、戰爭中及戰爭後需要も減じ價格も遞落したので採取量も減少した。序ながら説明して置くが、比律賓に産する眞珠貝は英語で云ふマザー、オブ、パール貝であつて、日本の眞珠貝などに比して頗る大きい。隨て其貝殻の使用用途は上等のボタン類は勿論小刀の柄とか其他の工藝品美術品の材料となり、其大きい貝を以て眞珠の玉を養殖したら比較的短時に玉を造ることが出来る。是は我國の或る研究家が試験的に比律賓の南方でやつたことがあつて、結果は豫期の通りであつたが、他に困難な事情があつて結局セレベス島附近でやることになつた。尙此外ボタン材料として高瀬貝も二三十萬ペソ輸出せられて居る。生魚は到る處豊富であつて、我國のものと同一又は似寄の魚が多く、馬尼刺灣の漁業に従事して居る日本人だけでも三百人以上ある。朝早く入港す

る汽船に乗つて馬尼刺灣に入つて來ると打瀬網を流しながら數十艘の日本漁船が彼處此處に出沒する光景を見て、瀬戸内海を航行して居るのではないかと云ふ感が起る。漁夫は多く尾の道の附近、田島、百島の者と宮島の對岸地御前邊の者である。

運輸交通狀態の大要を言へば電信郵便は何れも政府事業であつて（外國電信は此限にあらず）電信は海底のものと無縁として各島を聯絡して居る。道路は前々總督フォーブス氏其他の最も力を盡した所で、大體比律賓の產物は原料品が多いので、價格の割合に嵩が多く運搬費を要することが大なる爲めに、生産者の收入が少く、隨て産業が振はないのである。と云ふ理由で先づ道路改良を行ひ今日に於ては比律賓群島内に一等道路が二千九百哩、二等道路が千三百哩、三等道路が二千哩位あつて一等道路は總てマカダム式で橋梁も多くは混凝土で、一年中自動車の通行に差支がない。二等道路は一等道路より幅員狭く且大雨の折などは自動車の通行に稍々困難を來すこともあるが、多くの場合には差支がない。三等道路は二等道路より更に劣り、自動車の通行には困難である。

〔一〕鐵道は馬尼刺を中心として南北に合計六百二十哩あつて、是は元英國の會社が所有經營して居つたものであつたが、千九百十七年比律賓政府に於て其株式全部を買收し、經營は矢張元の通り會社

第 二 表

Philippine Coastwise Steamers

FERNANDEZ HERMANOS109 Juan Luna.
	tons
s/s "Cebu"	(823) Cebu
"Fernandez Hermanos"	(482) Surigao-Davao, Manila and Southern ports.
"Islas Filipinas"	(578) Jolo, Zamboanga, Dumaguete, Cebu, Masbate.
"Luzon"	(1341) Iloilo, Zamboanga, Davao.
"Belgica"	(536) Cebu.
"Romulus"	(534) Iloilo.
"N. S. del Carmen"	(167) Romblon, Capiz and New Washington.
"Albay"	(574) Zamboanga and Davao.
"Neil Macleod"	(638) Cebu, Zamboanga, Cotabato, Davao and Matti.
"Euzkadi"	(647) Rio Guinobatan, Masbate, Calbayog, Catbalogan, Carigara and Tacloban.
"Samal"	() Surigao.
THE VNCHAUSTI S.S. CO.	() 829-831 M. de Binondo.
s/s "Venus"	(608) Iloilo.
"Sorsogon"	(812) Legaspi, Tabaco and Virac.
"L. R. Yanco"	(170) Romblon, Capiz, New Washington.
"Paz"	(1007) Currimao and Aparri.
"Yizcaya"	(779) Iloilo.
"Montanes"	(210) Masbate, Bulan, Sorsogon, Donsol, Casiguran, Magallanes & Dact.
COMPANIA GENERAL DE TABACOS DE FILIPINAS..212 M. de Comillas.	
s/s "Mauban"	(970) Tacloban, Guinan and Borongan.
"Cia de Filipinas"	(445) Vigan, Currimao and Aparri.
"Isidoro Pons"	(552) Vigan, Currimao and Aparri.
SIV CONG BIENG & CO.122 Juan Luna.
s/s "Chat-Yek"	(747) Vigan, Currimao and Aparri.
"Ban-Yek"	(329) Laong, Dact, Nato & Naga.
"Tong-Yek"	(242) Bulan, Magallanes, Sorsogon & Casiguran
GUTIERREZ HERMANOS116 Beaterio.
s/s "Magallanes"	(832) Legaspi, Tabaco, Iloilo, Lagonoy, Nato & Virac.
"Dos Hermanos"	(540) Casiguran, Bulan & Gubat.
YU BIAO SONTUA209 Dasmariñas.
s/s "Y. Sontua"	(585) Masbate, Cebu, Cagayan de Misamis, Surigao, Tacloban and Carigara.
"San Nicolas"	(223) Masbate, Bulan, Calbayog, Catbalogan, Carigara and Tacloban.
GAVINO BARRETO & CO.303 Nueva.
s/s "Churrucá"	(486) Tacloban, Borongan, Guinan.
"Rupera"	(786) Davao, Zamboanga, Dumaguete and Cebu.
"Andres"	(283) Cebu, Surigao & Tacloban.
ORTIGA HERMANOS214 Dasmariñas.
s/s "Ortiga Hermanos"	(259) Calbayog, Carigara, Tacloban.
"Panglima"	(244) Cebu, Dumaguete, Zamboanga and Jolo.
J. M. POIZAT5 Plaza Moraga.
s/s "Gabrielle Poizat"	(525) Legaspi and Tabaco.
INSULAR LUMBER CO.769 Echague.
s/s "W. P. Clark"	(187) Sagay.
I. FECUNDO513 San Fernando.
s/s "Tamaraw"	(86) Catanaun, Hingoso, Macalelon, Sta. Cruz Boac.
FINDLAY RICHARDSON & CO., LTD.Chaco Building.
s/s "San Pedro"	(320) Iloilo.
J. & M. TIVASON235 Barcelona.
s/s "Dna. Paula"	(99) Sorsogon, Magallanes, Donsol, Bulan, Aroroy, and Masbate.
DUYANDIN & CO.821 San Fernando.
s/s "Peking"	(77) Gasan, Boac, Calapan.
CHUA GOC PEN & CO.1032 Comercio.
s/s "Kin-Kiat"	(66) Pihogo, Macalelon, Catanaun and Sta. Cruz.
GENATO & CO.12 Escolla.
s/s "Antipolo"	(87) Capiz, New Washington, Ithay and Romblon.
SMITH, BELL & CO.35 Juan Luna.
s/s "Taming"	(1355) Cebu & Iloilo.
s/s "Perla"	(180) Naga, Dact.
AGENT TO BE FOUND ON BOARD.	
s/s "Sta. Maria de Ripol"	(101) Puerto Princesa and Culion.

組織であるが、事實は官營として運轉して居る。千九百十八年の主なる貨物運搬數量は米が三十一萬噸、砂糖が十二萬六千噸、コブラが十二萬噸、其他の物を合せて合計百八萬五千噸であつて、乘客の數は六百八十五萬人である。此外セブー及イロイロに比律賓鐵道會社の線路があつて、其哩數兩者を合して百三十五哩である。

比律賓は三千有餘の島嶼から成立つて居つて、其中大なるものゝみにても十二三あるのであるから、交通は海に依ることが比較的に多い。而して各島を連絡するは多く小型の小蒸汽船であつて、千噸積のものは最も大なるものである。總計噸數が二萬餘噸であつて、今主なる汽船會社と其航路を示せば左表の通りである。(第二表參照)

沿岸航路は外國船の入るを許さず、又比律賓の法人にても其株主の大多數が比律賓人又は米國人にあらざれば沿岸航路に従事する船舶を所有することが出来ないことになつて居るので、外國人は此事業に投資することが出来ないと言つて差支ない。

最後に商業は之を國內商業と外國貿易の二つに分つことが出来る。先づ外國貿易に付て見るに。輸出品は主として農產物であつて、マニラ麻、椰子並に椰子油、砂糖及煙草の四品が全輸出品の九

割以上を占めて居る、隨て輸出貿易に従事して居る主なる商店は必ず此四種の商品全部又は其中の或物を取扱つて居る。西班牙時代並に米國領有の初期に於ては、英國商店が是等商品の主なる輸出者であつて、スミス、ベル、スチブンソン、マクレオッド等五六の英商が殆ど全權を握つて居つたのである。英商が斯く他國の領地にあつて其商權を獨占するに至つた理由を調べて見ると、色々ある。即ち其當時に於ける主なる金融機關は香上銀行渣打銀行の二つであつて、其他の銀行としては西班牙銀行が一つあつた許りである。又船舶は其當時は無論のことであるが、最近に於ても尙左の通りである。

輸出入品價格並に之を運搬せる船舶國籍

年次	總額	英國船	米國船	日本船
千九百九年	一三〇、〇〇〇 <small>千比</small>	九六、四八〇 <small>千比</small>	四、二五三 <small>千比</small>	二、八九七 <small>千比</small>
千九百十年	一八〇、六九五	一二二、九四一	一四、八五九	六、四七二
千九百十一年	一八五、七二三	一二一、〇四三	一二、一一〇	八、四九五
千九百十二年	二三三、一八二	一四九、一四一	一四、〇二四	一四、五九七

千九百十三年	二〇二、一七一	一二五、〇九〇	一六、八八五	一七、二四六
千九百十四年	一九四、五五六	一二五、六七四	二〇、四三四	一四、六〇九
千九百十五年	二〇六、二五〇	一三六、〇七七	二〇、九八七	三〇、八七八
千九百十六年	二三〇、八六七	一二九、〇六六	一四、一四八	四八、九四六
千九百十七年	三二二、八〇二	一〇九、五三七	七四、八〇〇	八七、二八五
千九百十八年	四六七、五八七	一二〇、九九九	一六二、八六一	一〇七、六九八

歐洲大戰中にあつても英國は尙且第一位を占め、千九百十八年に至つて初めて米國船に第一位を譲つたのである。現今に於ては米國船舶會社では太平洋汽船會社、アドミラルライン、ダラー汽船會社、ウオーターハウス、等が盛んに船を送るので。此點に於て米國が頗る優勢となつたのである。又金融機關としてもインターナショナル銀行、亞細亞銀行及比律賓國立銀行等が出来て金融機關が整つて來た。又千九百九年以來比律賓と米國との間には關稅互惠制度が實行されて居つて、相互無稅輸入を許すことであるから、米國に於て需要せらるゝ比律賓產物は他國の同一產物に比し米國市場に於て有利の地位を占むること、又比律賓に輸入せらるゝ米國製品は他國の國より輸入せらるゝ同一商品に比し關稅だけ有利であるので、米比間の貿易は漸次に他を凌駕するに至つた、隨つて米國

商店は輸出輸入共に勢力を増加し來り、一般輸出入業者としてはバシフィック、コンマーシャル、コシパニの如き又マニラ麻輸出商としてはハンソソウオース社、コロンビヤローブ會社の如き、殊にインターナショナル、ハーヴェスター會社の如きは英商マクレオッド社を買収し盛に麻の輸出をやつて居る。

我國は其地理上の關係より見ても、比律賓との貿易は盛んであるべき筈であつて、戰時中には輸出入合計四千萬ペソ以上に上つたのであるが、昨今はそれ以下に下つたことと思ふ。日本より輸入する商品は石炭を除いては主として綿製品及雜貨類であつて、是は合計すると相當の金額に上るのであるが、一々其商品を調べて見ると其種類が頗る多く、一の品物で多額の金額に上る物は殆どなく、隨て大資本を有し大組織を有する日本の會社、例へば三井物産會社の如き所て扱ふには不適當の商品であつて、多くは小資本でやつて居る小會社又は個人の取扱に限るものである。比律賓に輸入せらるゝ主なる商品を調べて見ると、綿絲布並に綿製品が全輸入の約三割、鐵類が一割二三分、米が八分、自動車類が三分、麥粉が三分と云つたやうな具合で、此中日本から入つて居るものは綿絲布並に綿製品であつて、綿絲大番手のもの及莫大小製品、縮類である。綿布は關稅の關係上

底米國品と競争が出来ぬ、戦時中は船舶の拂底と運賃の高率と及米國より運輸する時間が多く掛る爲め、平時にあつては米國品であつたものが日本品で代用した例も澤山あつたが、今日に於ては是等の品は元の米國品に戻つたのである。之を要するに比律賓に對する我が輸出貿易（是は比律賓に對してのみではないが）は戦時中尠からざる發展を見たが、戦後に於て退嬰の狀態に陥つた事は、之を貿易に従事して居る者の罪に歸することは無理であつて、寧ろ我國の工業上の進歩が未だ歐米諸國に及ばざるに依る所であらうと考へる。

比律賓より我國に輸入する商品は何かと云ふと、主として麻及砂糖であつて、殊に麻は近來其主要用途たる麻綱の原料としてのみならず製紙原料として輸入せらるゝ數量が多額に上つて、米國英國に次では日本が主なる買手であるが、何と云つても我國は市場が小さい爲めに漸く麻の全輸出額の約一二割位を消化するに止まり、米國の如き約五割も消費するものと比較が出来ぬ。尤も近頃米國の需要が一時的に減退した爲めに麻の價格空前の低落を來した結果我國に於て製紙原料として麻を使用することとなり、全産額の二割を我國に於て消費することになつたが、是は果して何時までも此割合を保つて居ることが出来るか疑問である。大資本大組織を有する日本の貿易商は

今日に於ては對日本の貿易のみに従事して居る時ではなく、進んで對外國の貿易に従事すべき時であつて、我が貿易進化の道程より見るも、初めは横濱神戸等の外人居留地に於て我國の貿易は行はれ、其後日本對外國の貿易は漸次日本人の手に歸し、以前萬能であつた居留地外商は全く其勢力を失ふに至つたのであるが、今は更に一步を進めて出先の商賣に侵入すべきである、

次に比律賓國內商業は如何なる狀態に在るかと云ふに、是は大部分支那人又は支那人系統の商人の手にあると言つて差支ない。商業會議所などの調べに依るも全國内商業の八九割は是等の人々がやつて居ると云ふことである。支那人は主なる都市は勿論所謂津々浦々まで入込んで居つて、殆ど如何なる田舎の寒村に於ても支那人の萬屋式小賣屋があつて、馬尼刺の間屋が輸入商から買つた輸入品は之を各都市の支那人商人に送る、是が又其附近の町村に居る支那人に分配すると云ふやうなる段々の聯絡が付いて居つて、又田舎の產物は逆に村の支那人から町の支那人と順次彼等の手を経て遂に大市場たる馬尼刺、セブー又はイロイロ等に出て来る。斯くの如く往復共に同様の人々の手を経て來ることであるから、彼等の間には自から爲替の決濟が出来て、銀行の手を借りずに收支の決算が出来る。又田舎に於ては現金で品物を賣る代りに土地の產物と交換をする。是は支那人のこ

とてあるから頗る上手にやつて、賣買兩方共儲けることが出来る。著者が嘗て新嘉坡に居つた時に馬來半島の内地で支那人と日本人の小賣店の商賣の模様を見たが、支那人は自己の商品に對し土人が持つて來る護謨を取つて遣る、所が日本人は現金に非ざれば商品を賣らぬ爲めに支那人の商店の方が多く商賣が出来る。何故日本人は支那人同様に賣つた商品に對して護謨を取らぬかと云ふと、元來自己の商品は新嘉坡の日本商店等から送つて貰ふが、是は現金とか又は銀行爲替であるから、此商品を賣つて現金を取らなければ買付先と決済が出来ぬ。然るに支那人は相當長期の掛で買つて而も新嘉坡に護謨を送つて其各買付品の決済を新嘉坡ですることが出来ると云ふ聯絡を有つて居る爲めである。比律賓に於ても支那人は是と同様の方法を行つて居る、支那人が如何に比律賓國內商業を獨占して居るかを證明する最も好い實例がある。曾て千九百十二年著者が初めて馬尼刺に行つた時に、日露間に滿蒙に關する協約をしたとか云ふことで支那人が非常に騒出し、遂に日貨抵制を行つたことがある。其當時著者は關係ある支那人に向つて、支那に於てポイコットを行ふは宜いとしても消費者が比律賓人であつて、其者は日本品に對してポイコットをする意志のない處で、其中間には於て口錢を取つて生活をして居る支那人が日本品をポイコットするのは如何にも莫迦らしき事て

あつて、永くボイコットをすれば他の者が支那人に代つて日本品の取扱をやり初め遂には支那仲買を要さなくなるに至るではないかと言つたが、彼等是一向平氣であつて、日本商品は漸次賣行が止り。彼等がボイコットを止めるまでは日本商品の賣行殆ど杜絶するの苦境に陥つたのを見ても如何に彼等が内地に商業網を張詰めて居るかを知ることが出来る。

以上簡單ながら比律賓産業の大體を記したが、扱將來日本人が比律賓に於て爲すべき事業の方面は何れにありやと云ふに、鑛業運輸業の二者は法律上種々制限があつて不便である。商業は國內商業は支那人に十分の地盤を占められて居つて、是と競争して勝を制することは頗る困難である。水産業は今日の所大資本を投じてやる程の事はない。然らば残る所は農業工業林業の三種である。農業は日本人の最も優れたる所であつて、例へば北米殊にカリフォルニアの如きて排日の盛んになつたのは、農業上に於て日本人が成功し漸次他の競争者を驅逐する形勢になつたのが一大原因である。比律賓に於ても本書の中に記載して居る如く、ダバオ地方の開発は殆ど全く日本の農夫の手に依つて爲されたのであるから、此業は日本人に取つて最も有望である。唯一の障礙は新土地法發布以來官有地拂下又は租借は米國人比律賓人若くは米國又は比律賓の法人にして株式の六割一分以上が米

國人又は比律賓人の所有に係るものでなければ出来ないことになつたので、從來の如く自由に日本人のみで比律賓法人を作り官有地拂下又は租借をすることが出来なくなつたが、私有地は賣買自由であつて、元來人口に比して土地の多い所であるから價格も安く、又ダバオ地方に於ては日本人所有地又は租借地の中未開墾地が尙幾萬町歩と云ふ程あることであるから、當分の中は之を開墾するだけでも多數の日本人の仕事はある。然らば農業の中如何なる生産物が最も有利であるかと云ふ事は、他の章に於て之を詳論してあるから此處には之を省略する。工業は前掲の如く甚だ進歩して居らぬからやるべき事は澤山ある、併ながら燃料が不廉で熟練せる職工が不足して居る所であるから、何か比律賓が他に比して特に利益ある種類の工業でなければ成功が六ヶしい。是が故に先づ第一に興つたのは椰子油會社と云ふが如き原料並に製品販賣上特別に利益ある工業であつた。煙草會社は既に澤山ある。砂糖會社も既に相當出來て居る。然るに麻を原料とする工業は未だ殆どない。ローブ製造は必ずしも比律賓でやる方が有利であるとは言はれぬが、例へば麻を原料として製紙業を初めると云ふやうなことは大に研究の餘地があると思ふ。殊に比律賓政府は此事業の興るのを希望して居つて年六分位の補給をすることになつて居るから尙更専門家の一考を煩したい。

比律賓には森林が多く日本に於ては木材の需要が多いのであるから將來比律賓に於て山林業に従事し、其製材は之を日本に輸出するやうなことにしたらば一舉兩得の策であるが、前にも記載した通り算盤の上に於て種々注意すべき點があるので、之に着手する前に十分に研究を要する。

終りに臨んで比律賓に投資するに於て最も安全なる方法は先づ既に着手せられて居る邦人事業中優良なるもので擴張の餘地あるものに資金を投ずることである。兎角日本人は海外に於て何か事業をやるのに先づ邦人の先着者がやつて居る事業に眼を着け、之を聽合せ而して有利と判明した時には直に是と同一事業を起し、是と競争する、其結果兩方俱に不利益を被ることが往々にしてある。ダバオの如き其一例である。五指の代るく彈かんより一拳に如くなして、一の鞏固なる會社を造るのは十のヘナヘナ會社を造るより、算盤の上から見ても、我民族發展の上から論ずるも有効且利益である。

第五章 マニラ麻並椰子栽培事業

附　ダバオ其他に於ける邦人事業

マニラ麻に關する著書は澤山あつて何れも大同小異である。本章に於ては詳細に之を論ずる餘地がないから唯其大略を記するに止めるが、主として前比律賓政府農務局纖維課長サリービー氏の所論に依り著者自身の觀察上より得たる知識を之に附加したものである。

マニラ麻は製網用として他に比類なき性質を有するものであつて、アバカと稱する芭蕉屬の植物學名は (*Musa textilis*) の樹幹を組成する葉軸より抽出せる纖維であつて比重軽く破斷力強く且耐久力あるものである。殊に是が特性として他の纖維に優る點は水に對して抵抗力強き事であつて是が爲めに船舶用麻綱として天下一品である。アバカは比律賓の特産であるから古き昔から之を用したものだと思ふが記録に存するものは最初千六百八十六年ミンダナオ島に住居せし英人ダムピヤなる人がバナナテキストリヤと稱し其果實は食用となり且纖維を抽出し得る植物あることを記した、是れ恐らくバナ、樹とアバカ樹と一見殆ど相違なき爲め兩者を混同したるものと思はれる。アバ

カは十九世紀の初めより多少は産したが、千八百五十年頃まで何等主要なる地位を占むるに至らなかった、千八百二十年に米國海軍士官ホワイと云ふ人がマサチュセツツ洲セーラム市に麻見本を持つて來て以來漸次ボストン附近に於ては之を使ふやうになつた。千八百十八年には全輸出量四十一噸であつたが、千八百四十年には八千五百噸となつた。千八百六十年には三萬餘噸に増加し、千九百年には約九萬噸に増し、千九百十八年に遂に十六萬九千噸に達して比津賓輸出品中の第一位を占むるに至つた。

アバカは比津賓群島中各地に產出するが溫度の關係上北 十五度以北即ち馬尼刺市より北方は餘り良くない、又千米突以上の高地も氣溫の關係上宜しくない、是は溫度が相當に高くなければ木の發育隨て纖維の發生に適しないからである。是と同じ理由で地味が惡いか、又は雨重が少いか或は不平均の所も宜くない。殊にアバカは一度植付ければ十年乃至二十年位其儘植替を要さないから土壤の肥料分を吸收することが甚しいが爲めに、最も地味肥沃なる所を必要とする。又雨量は十分なければならぬが、さればと云つて水の溜るやうな濕地では宜くないから、水吐けの良い緩傾斜地が宜い。尙もう一つアバカは一見芭蕉と異ならざる植物であつて、葉の大きな樹の幹の軟いものであ

るから大風のある地方では損害を被ることがある。斯様に段々條件を付けて見ると比律賓群島中ミシダオ島殊にダバオ灣及其裏側アグサン地方が最も是等各種條件を具備して居る所なのである。アバカの樹は芭蕉と同じ形を爲して居つて、樹幹は幾枚もの厚い皮が段々に重り合つて出来て居るもので、切口を見ると里芋のずいゝの切口の如くなつて居る、此皮を一枚づゝ放し内側の軟き部分には繊維がないから外側の方だけ放し、麻引機に掛けるのである、麻の樹は種類及産地に依つて高さに種々差等があるが先づ十五尺乃至三十尺であつてそれは葉の先まで計つたもので、其中麻として抽出し得る繊維は六尺乃至十五尺位である。麻引機と云へば甚だ大さうであるが、從來一般に使用して居るものは最も簡単な仕掛で何れも手製である。先づ一本の横木を臺の上に置き、是と併行して庖丁を裝置し、其庖丁は竹又は木の仕掛けて横木にびつたり齒が付くやうになつて居るので、愈々麻を引く時には前に記した麻の皮を横木と庖丁との間にに入れて引張ると庖丁の力で皮の滓は庖丁の向側に残り、繊維だけ引手に残る、之を竿に掛けて乾せば即ち製品となるのである。誰が見ても餘りに原始的であつて一驚を喫すると同時に何か適當の機械が出来さうなものであると考へる、是は萬人一様の考であつて、既に機械を發明した人が幾人もあるが、實際にやつて見ると何處かに

缺點があつて實用に適しない。最近ダバオ開發の先驅者太田興業會社の人々が發明したものは從來のものと略々同じで、唯抽く力を人力に依らずして水車又は發動機に依ることにしたから、人力の製産に比して約四五倍の能率を發揮したので同地方の日本人は大に是が恩恵に浴して居る。又それより後に米國人フランクと云ふ人が發明した機械は從來發明したものゝ中で最も實用に適するもので、且耕地内各所に運搬し得るのと、木炭を燃しそれより發する瓦斯を原動力とするので費用も少く且生産力も太田會社の機械よりは大きく至極有益なる發明であるが、唯一つ注意すべきは、太田會社の機械も亦手引も纖維の一尺乃至二尺位の長さに對し抽出す力が及ぼすのに反し、フランクの機械は纖維の全體に對して終りまで抽く力が及ぼされるので、之を試験すると其纖維に切れ掛けた所が多く、ロープにした時に破彈力が弱くはないかと云ふ疑がある。是は未だ實驗をしたのではないから何れとも斷言は出來ぬ。

手引労働者の賃錢は如何なる標準で仕拂はれるかと云ふに、比律賓一般の慣習として地主と引手と生産物を二等分し各其半ばを取るのであるが、日本人一人一箇月の製産高は四擔乃至五擔位であるから、若し麻の値段が一擔二十圓とすれば四十圓乃至五十圓の收入となる。又値段が三十圓とな

れば六十圓乃至七十五圓となる譯である。麻が一擔二十圓とか三十圓とか云ふのは如何なる麻を云ふのか、又麻は皆品質が一定して居るのであるかと云ふに決して然らず、現今比律賓に於て麻は一々政府の檢定を経て各種の等級に區別せらるゝのであつて、其等級が頗る多い。例へばエー、ビー、シー、デー、イー、エフ及エス一、エス二、エス三の如きは上等品中の各等級であつて普通値段の標準となるものは其中のエフ級である。或場合にはデー級を標準とする場合があるが、前述二十圓とか三十圓とか云ふのは此エフ級を標準としたものである。其以下デー、エツチ、アイ、ジェー、ケー、エル、エムの如きは下級品中の等級である。此外デーエル、オーオー、テイ、ワイの如き等外のものもある。又近頃は餘り需要がないが眞田用麻として特別上等の品物エーエー、ビービー等の品もある。

上級品とは如何なるものと言ふかと云ふに先づ第一に纖維が一本づゝ別れて居つて、二本の纖維がくつついて一本となつて居ると云ふことがなく、又所謂滓が附着して居らぬと云ふことが必要條件であつて、纖維の長さ色澤等に依り上級品中の各等級を定めるので、之に反して下級品は纖維に多少の滓が附着して居つて且所謂くつつきが多く、隨て色合も褐色である。其他等外の品は紐麻即

ち耕地に於て麻を縛る爲めに用ひたもの又は水濡れ等の爲めに損害を被つたものであつて是は所謂正品ではない。

之を要するに麻の等級は主として纖維抽出の方法に依りて定まるものであつて、第一麻引に用ひる庖丁の齒の具合、庖丁を横木に押付ける力の強弱の程度及乾燥の具合に依つて定まるものである即ち庖丁の刃が粗かつたり或は鋸の齒のやうになつて居つたり、若くは庖丁を横木に押付ける力が弱かつたりする場合には滓が十分に取れずして纖維に附着して居る爲めに上等の品物とすることが出来ない。又抽出したる纖維を直に日光に晒し十分に水分を蒸發せしめればせしむるだけ良くなり、且保存上にも有効である。併ながら庖丁の刃が滑らかで且横木に押付ける力が強い場合には之を抽くに庖丁の刃が粗く且押付ける力が弱い場合に比して力を要すること多く、且滓が纖維に残らざる爲め、目方に於て製品の量が少い、又十分に乾燥すれば量目は隨て輕くなる。前陳の通り麻引人夫は出來た製品の半額に相當する賃錢を得る一種の請負的賃錢であるから、若し上級品と下級品との値段の差が餘り甚しくない場合には比較的骨の折れざる方法で且多量に製産し得る下級品を造らんとする傾きがある。然るに此下級品は滓の附着し居る爲め少し長く貯藏する場合は變質することが

あつて爲めに破斷力微弱となり船舶用麻綱の原料に適せざるに至ることがある。近年倫敦製綱業者間に此種の苦情を聞くこと頗る多きに至りたるを以て、比律賓政府は一大英斷を施し千九百二十一年九月一日よりジエー、ケー、エル、エム等の下級品生産を禁止した。此禁止に付ては賛否の聲囂々起つて却々の問題であつたが、之を要するに比律賓の特産品にして最も重要商品たるマニラ麻の一般品質を高め名聲を恢復するに於ては頗る適當なる處置で、一時的には多少の困難なきに非ざるも永き將來に於ては結局比律賓の利益たることを疑はない。反對論者の中で最も有力と認むべきものは、之に依つて生産が減少するゝと云ふことゝ、元來ジエー、ケー、エル等の下級品は殆ど總て英國製綱業者の手で消費さるゝものであつて、若し此種の品を製産せざるに至らば他の代用品を使用し其範圍に於てマニラ麻の需要が減少することになるであらうと云ふ二つの要點である。前にも言つた通りて下級品を製産するは上級品を製産するより容易であつて且同一時間に比較的多量の製産を爲し得るのであるから、下級品の製産を禁じて上級品のみ製産するとすれば、全産額に於て幾分の減少を見るのは當然であるが、比律賓全體に於て製産せらるゝ下級品の數量は全産額の四割に相當し、同一勞働單位を以て下級品と上級品とを製産すれば其製産高は六と四の割合となると云ふこ

とは實驗上現れた數字であるから、比律賓群島に於ける一箇年全額平均百萬俵乃至百二十萬俵（一俵は二擔）とし、是が四割は下級品とすれば下級品の全產額約四十五萬俵前後となる、下級品の製産を廢し上級品を製産するとせば約三分の一の產額を減少する事となるが故に結局此禁止令に依り製産の減少すべき數量は約十五萬俵内外と見て大差はないと思ふ。即ち麻引事業に従事する労働者の數に變化がなきものとすれば是だけの產額が減少する譯である。目下麻の値段は殆ど未曾有の安値であるから、此際多少產額の減少を見るのは麻の値段に好影響を及ぼし結局之に従事して居る者の爲めに利益である。若しも亦將來に於て麻の相場が昇騰する場合には麻引労働者の受くべき賃金は隨て昇騰し他の事業に従事するよりは利益あるに至らば労働者の數も増加し、生産も亦隨て増加することになるから、此禁止令に依り一時十五萬俵の製産減少は多く憂ふるに足らざるのみならず目下の狀態に於ては却て有益の結果を齎すと言つて差支ないと思ふ。尙又英國の製造家が下級品禁止の爲めに他の代用品を使用するに至るべしとの反對論は要するにマニラ麻の特質を忘却したる議論であつて、マデー、サイザル、ヘネケンの如き纖維は從來とても麻下級品よりも値段安かりしにも拘らず英國製綱業者は比較的高價のマニラ麻を使用して居つたのは、要するに船舶用製綱としては

他のものをもつて代用することか出来ない爲めてあつたので、前掲の如く上級品と下級品と値段が非常に接近して居る時に於ては下級品の產出禁止せらるればとて上級品を使用すれば何等の困難がないと思ふ。値段の上の多少の相違は目減の多少及破斷力の強弱等に依つて償ふことが出来るので英國が今日まで下級品を主として使用して居つたのは、英國人一流の習慣にとらはれて居つたのである。

麻栽培事業は熱帶事業中最も有利なるものゝ一であつて、他の農產物に比し有利なる點の主なるものを舉ぐれば

一、收穫期に達すること早し、マニラ麻は植付後二十箇月にして收穫あり三十六箇月になれば最大收穫量に達し、植替等をせずして十年乃至二十年間絶えず收穫することが出来る。護謨の如き椰子の如きは孰れも收穫を始むるは植付後六七年を要し、最大收穫量に達するには少くとも滿十箇年を要するに較ぶれば收穫期に達すること頻る早し

二、比律賓の特產品にして他に代用品なし、此事は屢繰返した所であつて、サイザル、マゲイ等或意味に於て代用品と看做し得ざるに非ざるも、破斷力の強きこと、水に浸潤するも腐蝕するの

憂少く彈力に富むこと等の點に於てはロープ原料として到庭他の纖維の之に代ることを許さず。又數十年來東印度方面ボルネオ、フロリダ、アンダマン等に試作されたけれども品質其他の點で好結果を得ず、今日に至るまで商品として生産せられたるものは比律賓以外殆どなし

三、需要の恒久なること、マニラ麻は全需要の六割五分乃至七割五分までは所謂ロープの原料としてあつて、近來船舶にはワイヤロープを使用することが増加したが、是は或る特別の用途に使用するのみであつて、一般船舶用綱としてはマニラロープを廢することは出来ない。世界の船舶は將來減少すべきに非ず必ず増加すべきものなれば、マニラ麻に對する大部分の需要は之を恒久的と看做し得べし。尙ロープ以外の原料としてはバインダーツワイン、トロローツワイン、タロープ等あり、殊に近來製紙用原料として使用せらるゝもの尠からず、我國のみにても此用途に使用せらるゝ數量今日に於て一箇年數萬俵を下らず

四、製産過多の虞なきこと、比律賓に於て産する麻の大部分は所謂専門的農業でなく、農民が他の農業の傍ら少し許りの麻畑を耕作するに止まるのであるから、耕作面積の増加甚だ少い。麻の市價低落する時は是が耕作を止め、空しく荒廢に委するもの少からず、需給の調節を圖ること頗

る容易である。

是等の理由に依り麻栽培の事業は最も安全なる南洋投資事業の一であつて、比律賓の南端ダバオ灣内に多數の邦人が此事業に従事して居るのは誠に當然の事である。目下各種產物の市價低落し麻の如きも其例に洩れず、是が従事者は悲境に呻吟して居るが、而も是は利益少なしと云ふに止まり。例へば一時の護謨の如く製產費四十錢以上を要するに拘らす市價二、五錢と云ふが如き損失を被つて居る譯ではない。

元來熱帶農業に於ては單純農業よりは複雑農業の方が安全でもあり有利でもあると云ふことは今更云ふに及ばざる所であつて、麻は前にも述べた如く收穫期に入るとは他に比して早い、收穫期間の長いことは椰子等に比べて及ばない。又椰子は收穫期間は長いと同時に、收穫期に達するまで比較的長い時間を要する。此間徒に待つて居ることは假令氣永の農業としても頗る待遠しく感ずるのは當然である。此麻椰子兩業の缺點を去り美點のみを採る方法として麻椰子混栽の方法が頗る良いと思ふ。麻の事は大體之を述べたが、椰子に就ては未だ何も述べて居らぬから今麻椰子混栽の農園を造るとすれば椰子に就ても少しく述ぶる必要がある。

椰子には種類が澤山あつて其用途もそれ／＼あるが、是も有用であつて又最も廣く耕作せられて居るのはココ椰子 (*Cocos nucifera*) であつて普通椰子と云へば之を指すのである。椰子は熱帶地方何れにも生育するのであつて、何れの地方が特に良いと云ふことは言ひ兼ねるかも知れないが、大體から論じて比律賓の南部からセレベス島の北部の邊が氣候地味其他の點に於て他の場所に優つて居るかと思はれる。ダバオ灣の南方でメナドの北方にあるサンギル群島の如きは最も椰子の發育が良く、結實するまでの年限が短く、結實の數が多く且平均して大きいと云ふことは事實である。比律賓だけに就て言つても比律賓では普通椰子の實千個から三擔半のコブラが出来ると言つて居るが、ダバオ灣内の農園では大抵二百個で一擔出来る、即ち一千個で五擔のコブラが得られるのである。又結實の數も一本に付一年に五十乃至百位であつて他の地方に比し五割以上多いのである。即ちダバオ灣附近は單に麻許りてなく椰子にも適するのであるから、麻椰子混栽を實行するには此地方が適して居ると言つて差支ない。椰子の用途は何であるかと云ふと。椰子は麻と違つて樹幹を伐倒すのではなく、其實を採集するのであつて、實の外部は棕櫚の皮の如き纖維であるので、是より繩を作ることが出来るのみならず、マット、たわし等の原料とすることが出来、其次の堅い皮はコ

ブラを製する時の焚料となり、又家庭用の家具道具を造ることが出来る。歐洲大戰に際し獨逸が毒瓦斯を以て聯合軍を苦しめた時に當り、之を防ぐにマスクを用ひたが、其マスクの中に此椰子の堅い皮から出來た炭の精製したものを入れたら非常に効能があつたとのことである。皮は斯くの如く各種の目的に使用せらるゝのであるが、椰子の最も有用なる部分は實の中にある肉であつて、是は植物性の脂を多分に含有するので脂の原料として需要がある。此中にある肉でコブラを造る。先づ椰子の實を取り、外部の纖維のある皮を取去り、鉋を以て堅き皮を二つに割り之を焚火又は天日にて少しく乾燥すると、外部の堅い皮は收縮しないが内の肉は收縮して自然に堅い皮と離れる、其離れた肉を更に焚火又は天日にて十分に乾燥すると是が即ちコブラと云ふのである。此コブラは其六割乃至八割位までは植物性の脂であつて、一割五分乃至二割位の脂を含有するに止まる大豆などに較ぶれば脂の原料としては適當の品物である。脂を取つた後の殘滓は之をコブラケーキと稱し家畜の飼料又は肥料として使用し、必要があれば焚料ともなるのである。脂は他の植物性脂と同様食料とも石鹼の原料ともなり、其他各種の用途に供せらるゝのである。戰爭中は是等の用途の外にグリセリンを取る爲め盛んに使用せられ價格も騰貴したので比律賓に於ても製油會社の利益が莫大であ

つたので盛んに製油工場が出来、遂には比律賓内で出来るコブラだけでは原料に不足を來し、セレベス島のマカツサ邊から輸入をするに至つた、併ながら今日に於ては需要が減少し製油會社の内製造を中止して居るものが多い。今比律賓に於ける製油會社と其一日のコブラの消費量とを擧ぐれば左の通りである。(第三表)

椰子園の設計に就ては色々注意すべき事があるが、其中最も重要な點は、餘りに密植をしないことである。椰子は生長するに隨て大きな葉を四方に張り之に太陽の光線を受けて地中の成分を吸收し發育するものであるから、初めから十分生長した時の事を考へ、樹間を成べく廣く植付ける必要がある。今日其道の人の言ふ所に依れば、樹間は十米突を必要とするとのことであるから、普通に植付ければ一町歩に約百本と云ふことになるが、本書の計畫は麻との混栽であるから之を八十一本とした。又椰子園の困難な點は前にも述べた通りだが收入を得るまでに年月を要することが永いのと及除草の費用が多く掛ることである。十分に成長した後は葉の爲め蔭が出来て草も餘り甚しくは生えぬが、五年位までは雜草が非常に繁茂し、植付後一二年の椰子園に行つて見ると、殆ど椰子が見えずに草許りである。殊に比律賓に於てはコゴンと稱する薄の如き草が一面に生茂る。著者が

第 三 表

Oil Mills Operating and Built in the Philippines

Operating name	Daily Capacity		Equipment	
	Piculs	Expellers	Presses	
Cristobal Oil Co.	120	20	24	
Compania Tabacalera	60	10	10	
Copra Products, Inc.	85	18	10	
Eastern Oil Co.	35	7	..	
Magallanes Oil Mills	60	12	2	
Manila Coconut Oil Co.	85	15	8	
Oriental Coconut Oil Co., Inc.	60	8	8	
Philippine Manufacturing Co.	65	12	8	
Philippine National Oil	20	6	..	
Phil. Refining Co.	100	15	12	
Phil. Veg. Oil Co.	160	21	..	
Rizal Refining Corporation	
Santa Ana Oil Mills, Inc.	40	7	8	
San Pablo Oil Mills, Ltd.	20	4	..	
Warner, Barnes & Co., Ltd.	10	2	2	
Not operating	Daily Capacity		Equipment	
	Piculs	Expellers	Presses	
American Refining Corporation	10	2	..	
Central Oil Corp.	40	8	..	
Cebu Oil Mills, Madrigal & Co.	100	6	24	
Fabrica de Aceites de Filipinas	42	7	11	
Fabrica de Aceites de Manila	60	12	..	
France Phil. Oil Co.	50	5	9	
General Oil Co.	30	6	..	
Hispano Filipino Oil Co.	20	4	..	
International Oil Co.	28	4	32	
Iloilo Oil Works	20	4	..	
Insular Phil. Oil Co.	10	2	..	
Luzon Oil Refining Co.	10	2	..	
Laguna Coconut Oil Co.	30	6	..	
Manila Products Co.	15	2	4	
National Oil Co.	15	2	4	
Norton & Harrison Oil Mills	20	4	..	
Oil Mfg. Co.	55	11	1	
Palanca Choy Oil Mills	30	5	5	
Phil. American Oil Co.	40	8	..	
Phil. Oil Products Co.	50	9	6	
Taker Shaku Kaisha, Inc.	10	2	..	
Visayan Refining Co.	150	15	24	
Poizat Veg. Oil Mills	40	8	..	
Santa Mesa Oil Mills, Inc.	35	7	..	
Zamboanga Oil Mills Co.	20	4	..	
Manila Refining and by Products Co.	30	6	..	

嘗てダバオの或椰子園に行つた時、是が椰子園だと言はれるまではコゴン原かと思つたので取敢へず

コゴン原椰子の若葉も二つ三つ

とやつたら園主からひどいことを言ふ、と言はれたが全く實況である。此コゴン草を生やさぬ爲めにパタニ豆を蒔くとか其他少しく樹が大きくなつたら牛を放牧するとか、色々の方法があるが、何れにしても除草は椰子園に於ける一番の問題である。麻は早く大きくなるから最初の一年間位除草すれば、それから後は餘り生えぬ、唯椰子の樹の周圍だけ除草すれば宜いのであるから、此點からも混栽は利益である。尤も麻の根が張る爲めに椰子の樹の發育が多少遅れると云ふことはあるかも知れぬ。又麻を十年植えて置く爲めに地味を悪くし、十年後麻を取除いた後椰子の發育結實等に影響を及ぼす恐れはないかと云ふこともあるから、此混栽をするには十分地味の良し所を選ぶ事は必要である。ダバオには之に適當した土地は澤山ある。

以上に依り讀者は麻と椰子に就き大體の知識を得たのであるから、以下に麻椰子混栽農園の豫算を參考として掲げる。

椰子麻混植栽培豫算書

初年度支出

一金 貳 千 比	一金 貳 萬 四 千 比	一金 四 千 五 百 比	一金 二 千 七 百 七 拾 二 比	一金 四 百 五 拾 比	一金 二 千 三 百 三 十 二 比 八 十 仙	一金 二 千 九 百 十 六 比	一金 五 千 七 百 〇 二 比 四 十 仙
----------	--------------	--------------	--------------------	--------------	--------------------------	------------------	------------------------

土地面積壹千町步

一ヶ年三百町步宛開墾植付面積九百町步

一町步植付 麻五百七十六株 椰子八十一本 別紙 (植付設計書の通り)

測量費 一町步貳比

開墾費三百町步 一町步八拾比

道路費三百町步 一町步拾五比

垣柵費三百町步 (五千米突) 六千米突(角) 周圍二萬二千米突

針金代 針金七段張十五萬四千米突

一米突一錢八厘 (五百米突卷九圓)

垣柵費 柱一萬五千本 (一米突半毎に一本の割)

柱及針金張賃 柱木代 二仙 張賃 一仙

椰子種苗費 二萬九千六百六十個

但し植付數 二四、〇〇〇 一個 八仙

補植豫備二割 四、八六〇

植付費二萬四千三百個 (穴堀十仙) 十二仙

麻苗費 十九萬八十個 三仙

植付十七萬二千八百個

補植豫備一割一萬七千二百八十個

一金三千四百五十六比

麻苗植付料 十七萬二千八百個 二仙

小計

金四萬八千貳拾九比貳拾仙 開墾より植付迄費用

一金九千七百二十比

椰子手入料 二萬四千三百本 四十仙

年四回一回一本十仙宛

一金一萬五千五百五十二比

本年度植付麻 十七萬二千八百株手入料 九仙

小計

金貳萬五千貳百七拾貳比 手入費用

一金一千八百五十比

役牛馬費 (水牛七頭 二百比 一千四百比
馬三頭 百五十比 四百五十比)

一金一千五百比

農具及什器、荷車其他

一金六千比

家屋費

支配人及事務員住宅一棟 (三十坪) 坪一〇〇比 三千比

常備農夫住宅一棟廿五坪 坪四〇比一千比 床下農具倉庫とす

勞働者住宅二棟各五十坪 二千比

小計

金壹萬〇參百五拾比 家屋什器役牛馬費

一金九千三百六十比

給料

支配人一名 月 二〇〇比 二千四百比

事務員二名 月 一〇〇比宛 二千四百比

常備農夫四名 月 七五比宛 三千六百比

平一イ一名 月 三五比

賄夫一名 月 四五比

一金一千二百比

醫藥費 百分分 月額一人一比 十二比

一金	一千六百比	土人勞働者募集費	四十名	四十比
一金	六十七比五十仙	所有物稅	家屋六〇〇比	
一金	五百比	土地租借料	一町步年五十仙	
一金	三百比	豫備費		

小計 金壹萬三千〇二拾七比五拾仙 給料及諸經費
合計 金九萬五千七百七拾八比七拾仙也

第二年度支出

一金	四萬六千六百廿九比廿仙
一金	九千七百二十比
一金	七千二百九十比
一金	一萬五千五百五十二比
一金	七千七百七十六比
一金	一千百五十比
一金	一千比
一金	四比

第二期開墾植付三百町步經費	初年度の通り
本年度椰子手入料	初年度の通り
初年度植付椰子二萬四千三百本第二期手入料	
年三回	一本一回 十仙宛 三十仙
本年度植付麻十七萬二千八百株手入料	
初年度植付麻十七萬二千八百株第二期手入料	
年三回	一株一回 一仙五厘 四仙五厘
役牛馬本年度増加	水牛五頭 二〇〇比 千比
馬	一頭 百五十比
農具費	本年度開墾増加
家屋費	麻收納倉庫一棟五十坪 坪四十比 二千比
勞働者住舎二棟五十坪	坪二十比 二千比

一金七千五百比

麻挽機械十五臺 一臺五百比

一金一萬二千三百六十比

給料 支配人以下八名初年度通り 九千三百六十比
(割機械生産力一臺月額廿五擔とし年額三百擔とす)

事務員一名 千二百比
常備農夫二名 千八百比 増加 三千比

一金二千四百比

醫藥費 二百名 一名年額 十二比

一金三千二百比

土人勞働者募集費八十名 四十比

一金百十二比五十仙

所有物稅家屋一萬比

一金五百比

土地租借料 五十仙

一金五百比

豫備費

合計 金拾壹萬九千百八拾九比七拾仙也

第三年度支出

一金四萬六千百廿九比二十仙

第三期開墾植付三百町步經費

一金九千七百二十比

本年度椰子手入料

一金七千二百九十比

初年度植付椰子第三期手入費

一金七千二百九十比

第二年度植付椰子第二期手入料

一金一萬五千五百五十二比

本年度植付麻手入費(初年度植付は手入を要せず)

一金七千七百七十六比

第二年度植付麻手入費

一金一千百五十比

役牛馬費 本年度開墾増加

水牛五頭 千五百比
馬一頭 五十比

一金一 千 比
 一金二 千 比
 一金七 千 五百 比
 一金一萬四 千 百 六十 比

農具費 同上
 家屋費 勞働者住舎二棟
 麻挽機械十五臺
 給料 支配人以下十一名第三年度通り
 一萬二千三百六十比

常備農夫二名 月七五比宛 年九〇〇比 千八百比

一金三 千 六 百 比

醫藥費 三百名分

一金四 千 比

土人勞働者募集費百名

一金四 百 七十二 比 五十 仙

所有物税金

三百町步

公定評價百比

三萬比
 一萬二千比

一金五 百 比

土地租借料

一金六 百 比

豫備費

合計 金拾貳萬八千七百參拾九比七拾仙也

第四年度支出

一金一萬八 千 二百 二十五 比

椰子手入料

初年度植付第四期三回

三・六四五、〇〇

二年度 第三期三回

七・二九〇、〇〇

三年度 第二期三回

七・二九〇、〇〇

三年度植付麻手入費

一金七 千 七 百 七 十 六 比

麻挽機械拾五臺

道 路 一三・五〇〇比 五分 六七五、〇〇

一金四千二百九十比

一金一萬五千〇六十比

一金三千二百比

一金八百十比

一金五百比

合計

金六萬〇九百六拾壹比

第五年度支出

一金一萬四千五百八十比

一金四千二百九十比

農具 三・五〇〇比 一割 三五〇・〇〇

補修費役牛馬 四・一五〇比 一割 四一五・〇〇

家屋 一二・〇〇〇比 五分 六〇〇・〇〇

麻挽機械 二二・五〇〇比 一割二、二五〇・〇〇

給料 支配人以下十三名前年度通り

一萬四千六百六十比

增加一人麻挽部七五比年九〇〇比

醫藥費 二百五十人分 一人年額十二比

土人勞働者募集費八十名 土地六百町步 公定評價百比

所有物税金 家屋 六萬比 一萬二千比

租借料

豫備費

椰子手入料

初年度 第五期 手入料一回五仙三回 三、六四五、〇〇

二年度 第四期 三、六四五、〇〇

三年度 第三期 七、二九〇、〇〇

補修費 前年の通り

一金一萬五千九百六十比

給料支配人以下十四名前年度通り

一五、〇六〇比

増加一名麻挽部月七五比 年九〇〇比

一金三千二百比

醫藥費

一金一千四百七十七比五十仙

土人勞働者募集費

一金五百比

所有物税金

土地九百町步 公定評價百比

九萬比 一萬二千比

一金六百比

土地租借料

一金六比

豫備費

合計

金四萬參千貳百七拾七比五拾仙也

第六年度支出

一金八千五百四十比

椰子手入費

初年度六期 五仙一回 一、二一五、〇〇

二年度五期 五仙三回 三、六四五、〇〇

三年度四期 五仙三回 三、六四五、〇〇

一金四千二百九十比

補修費

前年度通り

一金一萬五千九百六拾比

給料

支配人以下十五名給料

一金二千七百比

醫藥費

二百廿五人

一金二千比

土人勞働者募集費

五十名

一金一千四百四十七比五十仙

所有物税金

土地九百町步 一町步百比

九萬比 一萬二千比

一金五百比

土地租借料

一金六百比

豫備費

合 計

金參萬五千七百參拾七比五拾仙

第七年度支出

一金六千一百十比	椰子手入費	初年度七期	一・二一五、〇〇
一金四千二百九十比	補修費	二年度六期	一・二一五、〇〇
一金一萬五千九百六十比	給料	三年度五期	三・六四五、〇〇
一金二千四百比	醫藥費	前年度通り	
一金一千六百比	土人勞働者募集費	前年度通り	
一金一千四百七十七比五十仙	所有物税金	四十名分	
一金五百比	土地租借料	土地	九百町步
一金六百比	豫備費	家屋	百比
合 計			九萬二千比
	金參萬貳千六百〇七比五拾仙也		

第八年度支出

一金三千六百四十五比	椰子手入料	初年度第八期	一・二一五、〇〇
一金一萬五千九百六十比	給料	二年度第七期	一・二一五、〇〇
		三年度第六期	一・二一五、〇〇
	前年度通り		

第五章 マニラ麻並椰子栽培事業

一金四千二百九十比	補修費		
一金二千四百比	醫藥費	二百名分	
一金一千六百比	土人勞働者募集費	四十名分	
一金一千四百七十七比五十仙	所有物税金	土地九百町步	九萬比
一金五百比	土地租借料	家屋	一萬二千比
一金六百比	豫備費		
合計	金參萬〇百四拾貳比五拾仙也		

第九年度支出

一金三千六百四十五比	椰子手入費	初年度第九期	一・二一五、〇〇
一金四千二百九十比	補修費	二年度第八期	一・二一五、〇〇
一金一萬五千九百六十比	給料	三年度第七期	一・二一五、〇〇
一金二千四百比	醫藥費	前年度通り	
一金一千六百比	土人勞働者募集費	二百名分	
一金五百比	土地租借料	土人勞働者募集費四十名分	
一金一千一百四十七比五十仙	所有物税金	土地	九百町步
一金六百比	豫備費	家屋	九萬比
合計	金參萬〇百四拾貳比五拾仙也		一萬二千比

第十年度支出

一金三千六百四十五比	椰子手入費	七萬二千九百本	一本五仙
一金一千比	役牛馬費	水牛五頭代	一頭二〇〇比
一金一千比	什器	コブラ乾燥箱二百個	一個五比
一金一千比	家屋費	コブラ收納小屋百坪一棟	坪拾比
一金四千五百九十比	補修費	役牛馬費千比の一割百比	
		前年度へ更に	家屋費同上
		農具費	同上
一金一萬五千九百六十比	給料	前年度通り	百比
一金二千七百比	醫藥費	二百廿五名分	一名十二比
一金四比	土人勞働者募集費	百名分	一名四十比
一金一千五百八十七十五仙	所有物税金	麻山	九百町步
一金五百比	土地租借料	家屋	九萬三千比
一金六百比	豫備費		
合計		金參萬六千五百五拾參比七拾五仙也	

第十一年度支出

一金三千六百四十五比	椰子手入料	七萬二千九百本	一本五仙
一金一千比	役牛馬費	水牛五頭	一頭二〇〇比

第五章 マニラ麻並椰子栽培事業

一三八

一金二	千	比	什器費	コブラ乾燥箱四百個	一個五比
一金二	千	比	家屋費	コブラ收納小屋二棟 (百坪)	坪拾比
一金七千四百九十比			補修費	道路費	一三、五〇〇比
				農具費	六、五〇〇比
一金一萬五千九百六十比				家屋費	一五、〇〇〇比
一金二千七百比				役牛馬	六、一五〇比
一金四	千	比		麻挽機械	二二、五〇〇比
一金二千二百十比六十三仙					の二割五分 三・三七五比
一金五	百	比	給料	前年度通り	
一金六	百	比	醫藥費	前年度通り	
合計			土人勞働者募集費	前年度通り	
				麻山 公定評價	一〇〇比
			所有物稅	椰子 同	一本五比
				家屋	十二萬千五百比
			土地租借料		一萬五千比
			豫備費		
			金四萬貳千百〇五比六拾參仙也		
第十二年度支出			椰子手入費	前年度通り	
一金三千六百四十五比			什器費	コブラ乾燥箱六百個	一個五比
一金三	千	比			

一金三千比

家屋費
コブラ
收納小屋三棟（百坪）
坪拾比

一金八千〇九十比

補修費
前年度へ更に
農具費三千比
の一割六百比増加
家屋費三千比

一金一萬五千九百六十比

給料
前年度通り

一金二千七百比

醫藥費
前年度通り

一金四千比

土人勞働者募集費

一金二千五百九十比三十一仙

所有物税金
麻山 三百町步 百比 三萬比
椰子 四百五十町步 十八萬二千二百五十比
家屋 一萬八千比

一金五百比

土地租借料

一金六百比

豫備費

合計

金四萬四千〇八拾五比參拾壹仙也

第十三年度支出

一金三千六百四十五比

椰子手入費
前年度通り

一金四千七百十五比

補修費
道路 一三・五〇〇比
役牛馬 六・一五〇比
農具 九・五〇〇比
家屋 一八・〇〇〇比
四七・二五〇比の一割

一金一萬五千九百六十比

給料
前年度通り

一金二千四百比

醫藥費
二百名分

一金三	千	二百	比	土人労働者募集費	八十名分
一金四	千	三百	〇	所有物税金	椰子山九百町歩
一金五	百	比		土地租借料	三十六萬四千五百比
一金六	百	比		豫備費	一萬八千比

合 計

金參萬五千參百貳拾參比拾參仙也

▲第十四年度以降

金參萬五千參百貳拾參比拾參仙也

諸經費前年度通り

▲收 入

第三年度

金壹萬七千貳百八拾比

初年度植付麻三百町歩

十七萬二千八百株

麻纖維產出四千三百廿擔

(一千株に付廿五擔の割)

マニラ價格拾八比

經費十四比とす。純益四比

(麻直段一擔十八比は現今不況時の相場にして普通二十比乃至二十五比を下らず)

第四年度

金參萬四千五百六拾比

初年度。二年度植付麻六百町歩

卅四萬五千六百株

麻纖維產出八千六百四十擔

第五年度

金五萬壹千八百四拾比

初年。二年。三年度植付麻九百町歩

五十一萬八千四百株

麻纖維產出一萬二千九百六十擔

第六年度

金五萬壹千八百四拾比

同上

前年度通り

第七年度 金五萬壹千八百四拾比 同上
 第八年度 金五萬壹千八百四拾比 同上
 第九年度 金五萬壹千八百四拾比 同上
 第十年度 金五萬壹千八百四拾比
 初年。二年。三年度植付麻九百町步 五十一萬八千四百株
 麻纖維產出一萬二千九百六十擔

金貳萬〇貳百五拾比

コブラ四千〇五十擔

賣價七比五十仙。製造費貳比五十仙 純益五比

但し初年度植付椰子三百町步二萬四千三百本

一本結實四十個(初年度結實半額とす)椰子實九十七萬二千個二百四十個を以てコブラ一擔とす

合計 金七萬貳千九百比

第拾壹年度 金參萬參千五百六拾比

二。三年度植付麻卅四萬五千六百株 麻纖維八千六百四十擔

金六萬〇七百五拾比

コブラ一萬二千五百五十個

初年度植付椰子二萬四千三百本 (結實八十個)果實百九十四萬四千個

二年度 同 (結實四十個)同 九十七萬二千個

計 二百九十一萬六千個

合計 金九萬四千參百拾比

第五章 マニラ麻並椰子栽培事業

第拾貳年度

金壹萬七千貳百八拾比

三年度植付麻十七萬二千八百株

麻纖維四千三百廿擔

金拾萬壹千貳百五拾比

コブラ二萬〇二百五十擔

初。二年度植付四萬八千六百本(結實八十個)果實三百八十八萬八千個

三年度植付二萬四千三百本(四十個) 同九十七萬二千個

計

果 實

四百八十六萬個

合計

金拾壹萬八千五百參拾比

第拾參年度

金拾貳萬壹千五百比

コブラ二萬四千三百擔

椰子七萬二千九百本(一本結實八十個)五百八十三萬二千個

▲第拾參年度以降前同斷

壹千町步椰子麻混植栽培豫算表

目 費	一 年	二 年	三 年	四 年	五 年	六 年	七 年	八 年	九 年	十 年	十一年	十二年	十三年
測 量 費	2,000.00												
開 墾 費	24,000.00	24,000.00	24,000.00										
道 路 費	4,500.00	4,500.00	4,500.00										
垣 柵 費 針 金	2,772.00	2,772.00	2,772.00										
同 張 賃	450.00	450.00	450.00										
椰 子 種 苗 費	2,332.80	2,332.80	2,332.80										
同 植 付 費	2,916.00	2,916.00	2,916.00										
麻 苗 費	5,702.40	5,702.40	5,702.40										
同 植 付 費	3,456.00	3,456.00	3,456.00										
椰 子 手 入 料	9,720.00	17,010.00	24,300.00	18,225.00	14,580.00	8,540.00	6,110.00	3,645.00	3,645.00	3,645.00	3,645.00	3,645.00	3,645.00
麻 手 入 料	15,952.00	23,328.00	23,328.00	7,776.00									
役 牛 馬 費	1,850.00	1,150.00	1,150.00							1,000.00	1,000.00		
農 具 及 什 器 費	1,500.00	1,000.00	1,000.00							1,000.00	2,000.00	3,000.00	
家 屋 費	6,000.00	4,000.00	2,000.00							1,000.00	2,000.00	3,000.00	
麻 挽 機 械 費		7,500.00	7,500.00	7,500.00									
給 料	9,360.00	12,360.00	14,160.00	15,060.00	15,960.00	15,960.00	15,960.00	15,960.00	15,960.00	15,960.00	15,960.00	15,960.00	15,960.00
醫 藥 費	1,200.00	2,400.00	3,600.00	3,000.00	3,000.00	2,700.00	2,400.00	2,400.00	2,400.00	2,700.00	2,700.00	2,700.00	2,400.00
土人勞働者募集費	1,600.00	3,200.00	4,000.00	3,200.00	3,200.00	2,000.00	1,600.00	1,600.00	1,600.00	4,000.00	4,000.00	4,000.00	3,200.00
土 地 租 借 料	500.00	500.00	500.00	500.00	500.00	500.00	500.00	500.00	500.00	500.00	500.00	500.00	500.00
豫 備 費	300.00	500.00	600.00	600.00	600.00	600.00	600.00	600.00	600.00	600.00	600.00	600.00	600.00
所 有 物 稅 金	67.50	112.50	472.50	810.00	1,145.50	1,145.50	1,145.50	1,145.50	1,145.50	1,158.75	2,210.63	2,590.31	4,303.13
補 修 費				4,290.00	4,290.00	4,290.00	4,290.00	4,290.00	4,290.00	4,590.00	7,490.00	8,090.00	4,715.00
	95,778.70	119,189.70	128,739.70	60,961.00	43,277.50	35,737.50	32,607.50	30,142.50	30,142.50	36,153.75	42,105.63	44,085.31	35,323.13

麻 產 出

椰子初回產出 椰子初年全收 初年全收 椰子全收
 第一麻終了 二年度¹/₂ 二年全收
 第二麻終了 第三麻終了



千町步椰子麻混植栽培收支豫算表

年 度	收 入	支 出	超	
			收	過 支
一 年		95,778.70		95,778.70
二 年		119,189.70		119,189.70
三 年	17,280.00	128,739.70		111,459.70
四 年	34,560.00	60,961.00		26,401.00
五 年	51,840.00	43,277.50	8,562.50	
六 年	51,840.00	37,737.50	16,102.50	
七 年	51,840.00	32,607.50	19,232.50	
八 年	51,840.00	30,142.50	21,697.50	
九 年	51,840.00	30,142.50	21,697.50	
十 年	72,900.00	36,153.75	36,746.25	
十 一 年	94,310.00	42,105.63	52,204.37	
十 二 年	118,530.00	44,085.31	74,444.69	
十 三 年	121,500.00	35,323.13	86,176.87	
合 計	718,280.00	734,244.42	336,864.68	352,019.10

以上の豫算書は大體に於て實地に行ふ事を得可きものなりと信ずれども種々地方的事情を異にする事であるから直ちに之れを以て實際の事業計畫とする事が出来ないのは勿論である。比律賓前農科大學長コーブランド氏は此理由に依り其著「椰子栽培」中に椰子農園收支豫算書を掲げる事を避けた位である。著者が本書に此豫算書を掲げたのは麻椰子農園に關する知識のない人々が大體のアイデヤを與へると云ふ事が其主なる目的である。

ダバオ其他邦人事業概況

南洋各地に於て一箇所に最も多數の邦人が集つて居るは比律賓の南端ダバオである。如何にしてダバオに斯く多數に邦人が集つたかと云ふに、初めより何等計畫のあつた譯でもなく、寧ろ偶然の出來事の爲めに元を開き、漸次今日の盛況に達したのである。千九百三年比律賓に大饑饉があつて困難をする人が多かつたので、亞米利加の議會では是が救済金として四百萬比を與へた。是は比律賓が米國々庫から金を貰つた唯一の例であつて亞米利加占領以來陸海軍の費用を除いては比律賓は亞米利加から財政上何等の保護を受けて居らぬのである。此饑饉收恤金四百萬比を如何に使用したら最も効果を奏するかと云ふことに付て議論の結果、今日有名なるバギオに通ずるベンゲット道路築造の爲めに人夫を使用し其人夫に賃錢として仕拂つたならば、唯徒に分配するよりは宜からうと云ふことに決して、ベンゲット道路築造を始めた。然るに工事の困難なると及之に従事することを希望する比律賓人の數が少かつた爲めに、日本から移民を呼寄せ大部分是等の移民の力に依つてベンゲット道路は出來たのである。然るに千九百五年に至り道路一先づ完成したに就て之に従事して居

つた日本移民が職を失ふに至つたので、何か他に職業はないものかと収入の途を求めつゝあつた際に、故太田恭三郎氏が仲介となつてダバオ灣内に耕地を持つて居つた西班牙人某の耕地に初めて日本人を約百五十人入れた事が日本人のダバオに發展する元であつたのである。太田氏は同年ダバオに行き商店を開き日用品の販賣土産物取扱業を開始し、次て千九百七年同氏及外數人に依り初めて太田興業株式會社が組織され麻及椰子の栽培を始めたのである。同氏が初めて開墾に着手するや未開の地の事もあり且同氏は何等資金を有ぜざりし爲め種々の困難續發したが屈せず撓まず開墾に従事したる爲め太田興業會社今日の大を爲すに至つたのである今邦人農業會社の設立數及其年次を擧ぐれば左の通りである。

千九百七年	設立ノモノ	一社
千九百十一年	同	三
千九百十三年	同	一
千九百十四年	同	五
千九百十五年	同	七

又邦人農業會社の耕地通計面積を舉ぐれば

千九百十六年

同

四

千九百十七年

同

十九

千九百十八年

同

四

合 計

四十四

官有地買入

三千六百六町步

私有地買入

千四百九十七町步

官有地租借

二萬五千四百九十九町步

合 計

三萬六百二町步

其内開墾地

一萬一千二百七十二町步

内 譯

椰 子

千四百二十四町步

麻

九千八百四十八町步

産額コブラ年産額 六千擔

麻年産額 十一萬五千擔

在留邦人數 千九百十八年

一萬人

千九百二十年(十月國勢調査の時)

五千八百三十人

内 譯

男

五千三百八十九人

女

四百四十一人

千九百二十一年

約四千五百人

在留労働者の數は斯くの如く漸次減少して居るが、是は最近麻の値段が異常に安い爲め十分の賃錢が取れず、之に反して日本内地の労働賃銀騰貴したる爲め歸國したる者多き多き爲めであつて、近來日本の景氣漸次沈滞すると同時に麻の値段も稍恢復の徴あれば移民數も漸次再び増加するならん。一般より言へばダバオに於ける邦人耕地は何れも他の比律賓の耕地に比し優良なもので、殊に太田興業會社の耕地の如きは其最も優れたるものであつて、比律賓農務局報告千九百二十年第三號

の如きは太田興業會社耕地に就き左の通り言つて居る。

是等農園の中タロモ及ミントタルに於ける太田興業會社農園は其最も大なるものにして且組織經營最も宜しきを得たるものなり。ミントタル耕地に於ては灌漑工事を施し本線三哩支線七十哩を以て同耕地に灌漑を施せり、タロモは本社所在地にして私有棧橋及大倉庫を有す、ミントタルには病院あり、又水力を利用して電氣並に製氷を爲し、以て病院並に患者に供給す。農園は麻及椰子を植付け其發育狀態並に經營最も宜しきを得、其面積より云ふも其他の設備より云ふも是が創立者及經營者の用意周到なるを窺ふに足り、最も進歩せる熱帶農業の經營法に依る模範的麻及椰子園を見んとする者の一覽に値するものなり。

ダバオ灣内に於ける邦人耕地及び植付明細並に社名及び其位置は左の通りである。

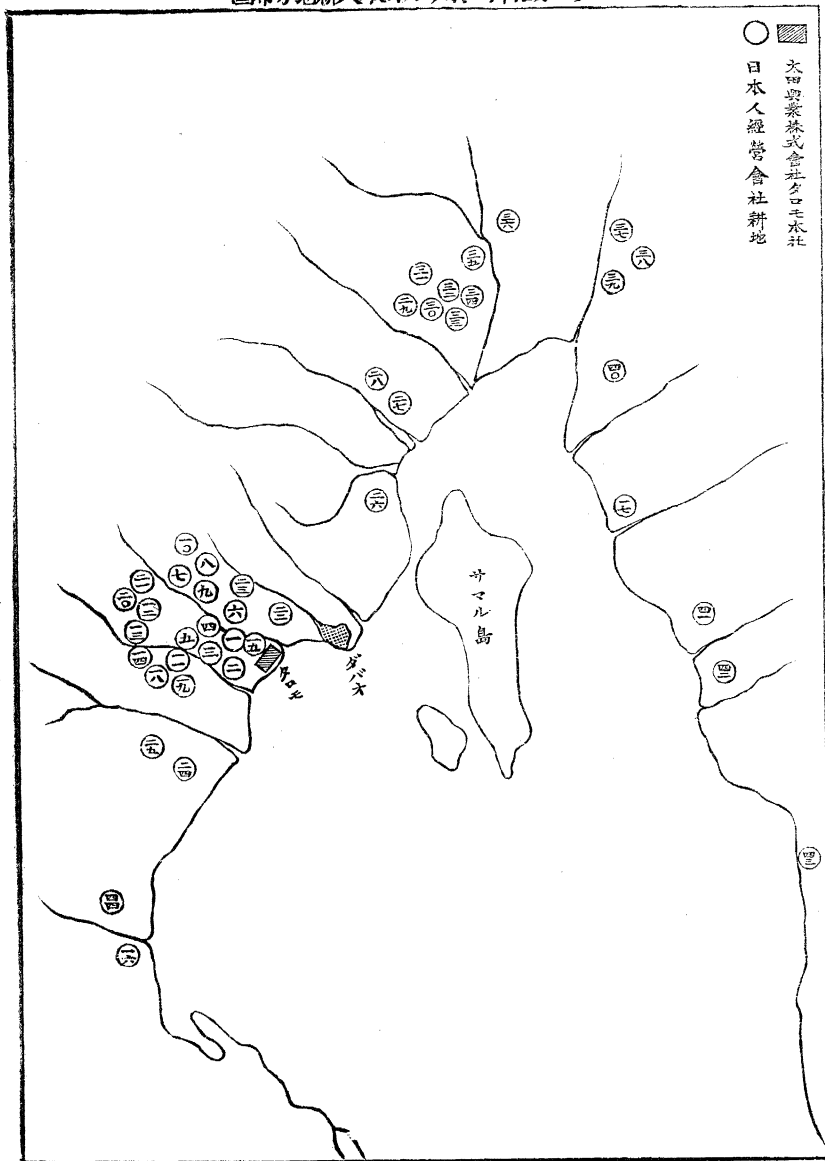
LIST OF JAPANESE CORPORATIONS IN THE PROVINCE OF DAVAO

Sept. 25th, 1921

1. Ohta Development Company
2. Mindnao Agricultural & Commercial Co.
3. Mananbulan Development Co.
4. South Mindanao Development Co.
5. Tween River Plantation Company
6. Mintal Plantation Co.
7. Biao Plantation Company
8. Guianga Plantation Company
9. Riverside Plantation Company
10. Talomo River Agricultural Co.
11. Mulig Agricultural & Trading Co.
12. Daliao Plantation Co.
13. Mindanao Reclamation Co.
14. Tagurano River Plantation Co.
15. North Talmo Plantation Co.
16. Guihing Plantation Co.
17. Lahi River Plantation Co.
18. Bayabas Plantation Co.
19. Bato Plantation Company
20. Manuel Development Co.
21. South Mindanao Agricultural Co.
22. Catalunan Agricultural Co.
23. Tacunan Plantation Co.
24. Furukawa Plantation Co.
25. Sirawan Plantation Co.

26. Kato Plautation Co.
27. Akamine Brothers Plantation Co.
28. Takagi Farming Co.
29. Bunawan Plantation Co.
30. Lasang Plautation Co.
31. Nanyo Plantntion Co.
32. Southern Davao Agricultural Co.
33. Matsuoka Development Co.
34. Panavo Plantation Co.
35. Tuganay Plantation Co.
36. Tagum Plantation Co.
37. Doman Plantatian Co.
38. Panguit Plantation Co.
39. Hijo Plantation Co.
40. Pindasan Plantation Co.
41. Southern Cross Plantation Co.
42. Piso Coconut & Cattle Ranch Co.
43. Davao Farming & Trading Co.
44. Nampi Plantation Co.

バダオ沿岸ニ於ケル日本人耕作地分布圖



社 名	創立年月日	面 積	開墾面積	椰子	麻
Panavo Plant. Co.	12/1 1917	411 租借地 32	10		10
Tagurano River Plant. Co.	9/11 „	592 租借地	30		30
Tuganay Plant. Co.	12/7 „	1,024 租借地	75		75
Tagum Plant. Co.	1/25 „	920 租借地	250		250
Takagi Farming Co.	11/27 „	624 租借地	85		85
Talomo River Agr. Co.	12/27 „	811 租借地			
Daliao Plant. Co.	„ „	400 租借地	44		44
Davao Farming & Trading Co.	12/23 „	182 官有地 965 借入	380	300	80
Mulig Agr. & Trading Co.	4/8 1918	433 租借地	400		400
Manuel Dev. Co.	7/20 „	900 租借地	230		230
Takunan Plant. Co.	6/25 „	472 租借地	150		150
Southern Cross Plantation Co.	8/5 „	1,015 租借地	450		450
合 計		30,602	11,272	1,424	9,848

社 名	創立年月日	面 積	開墾面積	椰子	麻
Tween River Plant. Co.	12/2 1915	320 租借地	170		170
Sirawan Plant. Co.	11/ „	176 租借地	100		100
Kato Plant. Co.	8/3 „	75 租借地	60	10	50
Bayabas Plant. Co.	2/21 1916	834 租借地	400		400
Hijo Plant. Co.	2/28 „	950 租借地	80		80
Pendason Plant. Co.	10/31 „	654 租借地	300		300
Panguit Plant. Co.	12/18 „	624 租借地	60		60
Akamine Bros. Co.	1/18 1918	600 租借地	300		300
Doman Plant. Co.	7/30	600 租借地	60		60
Guihing Plant. Co.	11/25 „	957 租借地	52	49	3
Guianga Plant. Co.	7/12 „	323 租借地	87		87
Lahi River Plant. Co.	10/12 „	332 租借地	118	75	43
Mindanao Reclamation Co.	6/21 „	400 租借地	180		180
Nanyo Plant. Co.	9/ „	800 租借地	200		200
North Talomo Plant. Co.	7/ „	150 租借地	100		100
Mindanao Plant. Co. (Nanyo Shokusan)	6/9 „	990 租借地	350		350
South Mindanao Agr. Co.	8/6 „	216 租借地	130		130
Southern River Dev. Co.	3/1 „	1,017 租借地	10		10

ダバオ邦人農業會社一覽表

單位町步

社 名	創立年月日	面 積	開墾面積	椰子	麻
Ohta Shoten.	1905	204 私有地買入	204		
Ohta Dev. Co.	5/3 1907	1,015 官有地買入	1,015	200	815
Mindanao Agr. & Com. Co.	6/10 1911	528 租借地	415	20	395
South Mindanao Dev. Co.	6/10 „	780 租借地	500		500
Catalunan Agr. Co.	9/10 „	127 私有地買入 111	210		201
Piso Coconut & Cattle Ranch	9/8 1913	1,024 官有地買入	600	600	
Bato Plantation Co.	3/12 1914	928 租借地	340		340
Bunawan Plant. Co.	9/14 „	656 租借地	252		250
Furukawa Plant. Co.	12/28 „	1,000 私有地買入	800		800
Mintal Plant. Co.	7/17 „	1,007 官有地買入	795		795
Mananbulan Plant. Co.	9/14 „	730 租借地	390		390
Biao Plant Co.	3/5 1915	448 租借地 560	87		87
Lasang Plant. Co.	3/22 „	761 租借地	300		300
Matsuoka Dev. Co.	8/28 „	997 租借地	305	170	135
River Side Plant. Co.	7/17 „	367 官有地買入 560	200		300

尙此以外に邦人の事業としては、ミンダナオ島サンボアンガと云ふ處にメリセデス椰子園がある、之れは目下太田會社の同所支店が監理して居る。又其對岸バシラン島には大阪の脇阪君がサンボアンガ、デヴェロープメントと云ふのを立て、バラクタサン、マロン等の地に數百町歩の椰子園を經營し、又山村樸次郎氏も同志を聯合し同じくバシラン島アトンアトンと云ふ處に二三萬本の椰子を植付け令息一郎氏及び元明治大學野球選手であつた高瀬君等が直接事業に當り、其地方のモロ族を懷柔し宛然モロの酋長の如く威勢を揮つて居る。

尙一つ邦人事業で一言なかる可からざるは比律賓の避暑地バギオに於ける蔬菜農業まである、之れは同地に雜貨店を開いて居る早川君杯が始めたのであるが、今日に於ては六十名斗りの邦人が數十町歩の地に莓玉菜セロリー豆類等を作り日本人得意の集約的方法でもつて盛んにやつて居る。産物は自動車及び鐵道の便に依り毎日マニラの市場に送り出して居るが總賣上高は一ヶ年二十萬圓にも上ると云ふ事である。バンゲット道路築造の爲め渡航した邦人移民が一方ダバオに行つて盛んに馬尼刺麻の栽培に従事して居ると同時に跡に残つたものは同處に此仕事を興したのである。

第六章 比律賓土地問題

茲に所謂土地問題とは千九百十九年比律賓議會を通過した新土地法に依り、同島に於ける邦人農業會社の蒙むる可き損害及び之れに對する善後策である。元來比律賓には外國人に對し私有地賣買の場合何等の制限なく、唯官有地拂下又は租借に關して一定の制限があつたので、舊土地法に依れば官有地は比律賓人米國人又は米國及比律賓の法律に依り設立せられたる法人に對し、最大面積一千二十四町歩を限り租借又は拂下を許した、我邦人は千九百七年頃から比律賓群島の南端ダバオ灣内に馬尼刺麻栽培を始め、何れも比律賓の法律に據る法人を組織し、拂下又は租借の方法に依り是が栽培に従事して居つたのである、麻の好況に連れ、漸次其數が増加し、千九百十八年に於ては會社の數四十以上を算するに至り、隨つて農業移民を内地から呼寄せ、その數數千に達するに至つたのである、ダバオ地方には日本人栽培業者以外に米國人比律賓人の當業者もあるが、日本人の勢力漸次増大し、事業に於ても着々成功するに至つた爲め、カリフォルニヤに於ける日本農夫の成功に對し、同州人の間に恐日的態度を惹起したと同様、比律賓に於ても日本人多大の發展に對し何等かの

制限を設くる事が、比律賓自衛上必要と考ふるに至つた。

茲に於て千九百十八年新土地法を議會に提出し、兩院を通過して之れが裁可を米國大統領に仰ぐに至つた。然るに其時は恰度歐洲戰爭中であつて、米國も日本も共に聯合國側に參加し共同の敵に當つて居つた際であつた爲め、比律賓の土地問題杯の爲め日米間に多少でも紛議を生ずるが如きは甚だ面白からずとの大統領の意見に依り（我國に於ては時の米國大使石井子爵の手を経て抗議を申込みたるやに聞く）該法律は一時撤回する事となつた。然るに其當時我國の經濟事情は所謂成金全盛時代であつて、企業旺んに、且南洋方面投資熱も亦盛んであつて、爪哇、スマトラ、馬來半島等の各地に幾多の投資を爲したと同時に、ダバオ方面に向つても亦投資を爲す者續出したのである。其投資者の中には所謂成金氣分を發揮し、多少共不謹慎なる方法を採つた者もなかつたでもない。是等の理由に依り一旦握潰されて居つた土地法も捲土重來の勢を以て比律賓議會を通過し、其時は歐洲戰爭も既に終つた後であるので、米國大統領も遂に千九百十九年十一月二十九日之を裁可するに至つたのである。

今新土地法の骨子とも云ふ可き點を舉げれば左の通である。

一、法律施行期日

千九百十九年十一月二十九日（第二百二十九條）

二、新法の適用さる可き土地

山林、鑛山及びフライヤー、ランド、を除きたる總ての官有地（第二條）

註、フライヤー、ランド、と云ふは、西班牙時代舊教徒寺院の所有せし土地にて、米國領有後比律賓政府にて買上げたる土地、是等除外された土地は特別法で規定されて居る。

三、此法律に依り官有地を拂下げ得可き有資格者

(1) 比律賓人 (2) 米國人 (3) 比律賓又は米國の法人にて其株式の六割一分以上が比律賓人又は米國人の手にあるもの。（第二十三條）

但し無資格者にても左の各項に當る場合は此限りに非ず。

(1) 住宅地又は工業用地拂下

但し此場合は十町歩以内を限り之れを許し且其土地が住宅地又は工業用地に使用せらるゝ間のみ有効なり（第五十一條）

(2)比律賓人に對し同様官有地拂下の權利を與ふる諸外國人には、立法部の特許に依り、一人に付百町歩を超へざる範圍に於て農業地拂下を爲す事を得（第二十三條）

但し其外國に於て比律賓人に此權利を與へざるに至る時は比律賓に於ても之れを取消す可し註、官有地は比律賓人又は米國人と雖も一人に付百町歩以上拂下を爲さず。

(3)米國が締結せる外國との條約中反對の條項ある場合。（第二百二十三條）

(4)此法律施行當時既に拂下を爲したる者（第二十四條）

註、法律施行の當時既に拂下の手續を了し地券を下附せられたるものは勿論にして地券は下附せられざるも拂下の契約を締結したるものも亦同じ、但し單に拂下の申請のみなしたるものは此内に入らず

四、此法律に依り官有地を租借し得る資格者は拂下の場合と同じ（第三十四條）

尙此以外租借の場合に限り無資格者と雖も立法部の特許に依り之れを爲す事を得

但し租借の場合は租借せんとする土地に先住者又は占有者ありたる場合は、之れが承認を得るか又は法律上彼等に權利なき事が證據立てらるゝに非れば、之れを許可せず。尙ほ出願者の事業遂

行上必要と認められたるものなる事を要す。

五、土地所有權又は租借權の移轉

此法律に依りて取消したる土地は、此法律に定めたる有資格者以外に譲渡又は質入等を爲すを得ず、租借地の場合も亦同じ（第三十七條第二百十條）

如何なる土地と雖も元來官有地なりしものか又は官有地なりし事を推定し得可きものは、如何なる時如何なる名義にて拂下げられたるものと雖も有資格者以外に之が所有權の移轉を禁ず（第二百十一條）

實際に於てダバオ地方の邦人農業會社は如何なる順序に依り開墾に着手するかと云ふに、租借若しくは拂下の出願を爲してより之れが許可を受くる迄には、調査測量入札手續其他の爲め尠からざる時日を要するので其間ボンヤリ待つて居る譯には行かぬから、先づ出願地が森林地帯に非る事が認められたならば、開墾許可書なるものの下附を受け、之れに依りて伐木開墾に着手するものであつて當時邦人土地會社數約六十中法律發布に當り既に拂下契約若しくは租借契約を締結したる者は其半にも達せず、残余は孰れも前記の開墾許可證のみにて開墾に着手したものである。之れが初め新

土地法に依れば是等の諸會社は株主の性質を全然變更しない限り、租借拂下共に許可せられざる事となり、既に開墾したるものでも之れを放棄せざる可からざるの窮境に陥つたのである。是に於て來栖總領事は極力比賓政府と交渉し、次期議會に於て千九百十八年二月八日以前に出願した租借に限り、他に法律上不都合のない諸會社に對しては之れを許可する旨の法律を得たのである。乍併邦人農業會社に就き一々其事情を研究する時は種々の事情があつて、單に千九百十八年二月八日以前出願の者は之れを許可すると云ふ事丈では、尙足らざる所があつて、隨つて尙種々の問題が残つて居つた。序に一言して置くが、此千九百十八年二月八日と云ふ日は、大統領ウキルソンに握潰された第一回の土地法が兩院を通過した日である。

著者が一昨年比賓律に行つた時は、恰も此際であつたので、親しくダバオに行き、約一ヶ月同地に滞在し、各會社の内容に就き取調べたる結果、比賓律政府に左の提議をした。

一、官有地拂下は原則として許可せざる事、

二、新土地法は私有地と雖も其土地が以前官有なりし事を推定し得るものは之れを外國人に譲渡す

や疑なきに非ずと雖も（其後に至り比律賓大審院は此條項の無効なる事を判決せり）少くとも新土地法發布以前の賣買は之れを有効と看做さざる可からず

三、租借の場合

(1) 千九百十八年二月八日以前の出願に限り之れを許可する事明かなれども、邦人會社中在ダバオ土地局出張所に同日迄に出願したるも、便船の都合に依り馬尼刺土地局には二月八日以後に到着せるものあり、此場合土地局に於ては之れを二月八日以後受付のものとして許可せざる事とせるも舊法律に依れば土地局出張所ある場合は其地出張所に届出を爲すを以て有効とするの規定ありダバオ土地局出張所の如き果して法律上土地局出張所なるや否や明かならざれども、爾來願書を受理し來りたる慣習上之れを土地局出張所と見做すを妥當とするが故に、二月八日以前にダバオ土地局出張所に出願せるものは之れを有効とす可し。

(2) 千九百十八年二月八日以前に租借の出願を爲せるも其後之れを取消し拂下出願に變更したるものは、此拂下を取消し最初の租借出願を復活せしめ之れて許可を與ふる事。

(3) 千九百十八年二月八日以後の出願に係るものは原則として之れを却下する事勿論なるも、新土

地法の發布以前既に開墾植付を爲せるものに對しては、其開墾面積に對し租借を與ふるか、若しくは其事不可能の場合は之れに對し相當の期限を與ふる事、例へば椰子は二十年麻は十年と云ふが如し。

四、租借權讓渡若しくは地上物賣買の場合若し之れが新法律發布以前に行はれたる場合之れを有効と認む可きは勿論なれども、若し其以後に爲されたる場合は前記(3)の場合と同様に取扱ふ可し。以上の提案を以て上院議長ケソン氏下院議長オスメニヤ氏及び農務長官アバシブレ氏と協議を重ね諸氏の賛成を得來栖總領事は又總督に對し同様の交渉をした結果、孰れも承諾を得千九百二十一年二月七日修正案が兩院を通過するに至つた

其主なる點は、千九百十九年十一月二十九日以前の出願に係る租借は之れを許可し、拂下出願は許可せざるも之れを租借に變更すれば許可すると云ふのであつて著者の提案より尙一層邦人の爲め利益ある解決を見たのである。上院議長ケソン氏は二月十五日附で著者に一書を送つて、斯く日本人の爲め都合よき修正が出来たのは誠に喜ばしい、殊に比律賓人が日本人に對して持つて居る感情は此修正案提出の理由書に依りて最も明白に表明せられてあるから理由書を添へて送ると、云つて來

た。(此理由書は本書第一章の末段に譯して載せてあるから茲には之れを略す)

我國は面積の上から云ふも人口の上から論ずるも、將又食料問題等の點から考ふるも一方の活路は海外に發展するにある事は今更論ずる迄もない事であつて海外に商權を擴張するも亦一方法で、海外に航路を擴張するも亦一方法であるが、我資本と勞働者を提げて海外に於ける未開の富源を開發し、一は世界に原料品を供給し、一は我民族の發展を計るは、海外に商權を樹立するより將又航路を擴張するよりも、尙ほ一層緊要で且有効の事業である。然るにカリフォルニア問題と云ひ、又比律賓土地問題と云ひ、孰れも邦人の發展に障害を來す事あるは吾人の憂慮措く能はざる處であつて比律賓の如きは米大陸と異り、其間人種的の偏見若しくは憎惡と云ふ事がないので問題は比較的簡單である、新土地法に依るも比律賓人に同様の權利を與ふる諸外國々人には比島に於ても之れと同様の權利を與ふる旨を規定して居る所から考ふるも、我國に於て外人に土地所有權を許すの法律が實施されて居ないのは甚だ遺憾の次第であつて、其理由が何れにありや。大隈伯條約改正の當時に於ける我國人の考の如く、眞逆に外國人の大々的土地買収を恐れての爲でもあるまいと思ふ。元來我國の遣り方は頗る自分勝手であつて、土地所有に關しても自からは之れを與へずして他をし

て之れを與へしめんとするのである。又沿岸貿易の如きも米國が比律賓を沿岸貿易の中に包含しやうとするに對しては囂々の聲を擧げながら臺灣と日本、大連と日本の間は之れを日本船の獨占として居るではないか。取らんとすれば先づ與へよて、今日外人に土地所有權を與ふればとて何等の危険があるでもなく、又沿岸貿易を外國船に許したとて我船舶が競争に堪へざる如き事なきは今更證明を要せざる事であつて、大に他に發展せんとする國民は須らく大度量を示す可してある。

第七章 比律賓の愛國者リサール

土屋元作氏稿

南眼子大正五年濠洲新西蘭を視六年比律賓を廻り、七年比律賓、海峽殖民地、スマトラ、ジャバ、セレベス、ボルネオに遊び略南洋の趣を知得たり、日本には尙世間知らず多く南洋と云へば海にクロコデロ（鰐）シャーク（鱈）など泳ぎ廻り、陸には裸體の蠻人投槍を待ちて駆け廻るところのやうに思へども事實は正反對にてマニラの町は人口二十七萬にして五千臺の自働車を有し、パタビヤ、スラバヤに到りては人口十五六萬にして同じく五千臺位の自働車を有しセレベスのメナドは世界の片田舎なれど、其百姓家は日本の農家より體裁美なり、椰子の森、ゴムの林、麻珈琲砂糖の畑見渡す限り蒼々として生氣人に迫り、紅き白き黄なる紫なる花、其間に點綴し、蝶鳥の舞ひ轉ぶる景色、我國とは趣きを異にして亦自ら行客の眼を喜ばしむ、唯閉口なるは氣候常夏にして四時の變無く浴衣にて庭園に出て、螢の飛ぶを見ること一二月も六七月に異ならず、長く居れば其單一に飽きて還らんこと

を思ふの情己み難しと云ふ、夏瘦する南眼子の思ひ切つてゴム屋とならざりし一原因は此に在り。
濠洲新西蘭は南洋に異なり、濠洲の一部を除けば、四季あること我國に異ならず、就中新西蘭は赤道の南に在るばかり、地形も位置も略日本に同じく、其土人マオリも頗る我國人の祖先に似たところあり、彼等の高天原たるハワイキより持渡れる寶物コロタンギ(石彫の鳥)の製作、何處やら日本品らしきも不思議なり。南眼子は此南洋を廻る内、いろ／＼異りたる事物を目撃し、歴史なども少しは聞かざりたれば、未だ其地に遊ばざる人の爲めに、追々にこれを語らんとする次第なるが、第一に説出すは、比律賓の愛國者リサールの傳なり、近來日本に、現在の國狀に満足せず、改造を主張する英雄輩出するは、祝すべき事なるも、其多くは燧石に鐵甲を着せたる如き癩癪持にて、朝から晩までガン／＼四角張つて議論ばかりする様子なれば、未だ以て眞の英雄と稱し難し、御一新前後を見ても、眞の英雄は喧嘩腰ならず、言ふべきことを大人しく言ひ、行ふべきことを正しく行ひて従容迫らざる人品を有せり、熟らリサールの人柄を見るに、橋本左内に鶴峰戊申の學問を加へたる如く、外溫柔にして内實に毅然たり、亞米利加の駈付今一足早かりせば、バグンバヤンの悲劇は行はれず、新比律賓の指導者として偉大の功績を樹つべかりしものを、惜むべき哉／＼、然れども梅花狂風に散りても香の残る如くリサールの流風餘韻尙比律賓に存在して、國人の思想品性を陶

治しつゝあり、外客南眼子の如きも、亦其餘香を掬して、自己の修養に資せんとすものにこそ。

比 律 賓 の 土 人

ホセ・リサールの事蹟は、比律賓大學教授クレグ博士が、比律賓政府の命を受けて仔細に調査し、一部の書となつて發行されて居る、記者はクレグ博士から其翻譯を公にする許しを得て居るが、之を全部譯することになれば、數十回に亘らなければならぬから此處には只概略だけを申述べる事と致します。僭リサールの事を語る前に、先づ比律賓島の事を少しお話する必要があります。比律賓は日本の隣國で、長崎から直航の船に乗れば、僅に二晝夜若くは三晝夜で、其首府マニラに到達するのでありますが、近頃まで同島との交通が極めて疎遠であつた爲に邦人は比律賓をよく知らぬ、マニラと云へば年中惡疫が流行つて居つて、日々生命が危いやうに思ふ人さへもあります。現在の比律賓は所謂蠻煙瘴霧の土地ではありません。米國領有以來其政改善せられ、總督の下に土人を長官とする所の各省があり、立法部は上下兩院に分れ、其議員は悉く比律賓人、其上下兩院議長は日本に來たケソン、オスメニヤの兩氏で、政黨も二つ立つて居ります。文明の度合から言へば日本に及ばざること遠しと雖も、土人の性質は進歩的で、立派な將來を有するものゝ如く見える、

比律賓人は朝鮮支那以上と自信して居ます。

比律賓の土地は呂宋ミンダナオの二大島が南北に横たはつて居つて、其間にセブ、ミンドロ以下大小三千有餘の島が群を爲して居る、面積から申せば日本の三分の二位なものであるが、平坦な土地は日本の島々よりも却て幾分か多い。而して熱帶のことであるから植物がよく繁茂して森林に富み、且又頗る物産に富んで居る。住民はタガログ、ビサヤンと云ふ兩大民族の外に、數十の小種族が雜居して居るのである。中には未だ臺灣の生蕃同様の文化にしか達しない者もあるけれども、タガログ、ビサヤン兩人種の文化の程度は、維新前の日本の農民に比して、甚しく遜色があるやうにも見えない。殊に其人民は馬來人に屬して日本人と見分け難きほどの兄弟分て頗る伶俐活潑のところへ支那人との混血者が多く西班牙人との合の子も随分澤山居るから教育を施せば種々の方面に發達すべき天稟を有つて居る。日本の古い歴史には比律賓との交通があつたことが臆ろげに見える、中世になつて、足利の末年から豊太閤時代にかけて、唐渡りと稱し澤山の日本人がマニラまでも渡つた其時代マニラの市は回教を奉ずる所の土人約三萬ばかりの都會であつて、支那からも商人がやつて來るし、暹羅安南呂宋邊からも商人が時々やつて來て貿易が行はるゝので、恰度今日の香港の如き位置にあつたのである。呂宋助左衛門以後の朱印船は此貿易に従事した。マニラの外にも南方

のセブー島などは、やはり一の貿易場であつて、暹羅安南邊からの船が來て居つたのである。其の状況を今日より想像すれば、歐洲人渡來以前のマレー半島、ジャバなどと同じやうに支那の外域とも謂ふべき有様であつたらしい。

西班牙人の渡來

如何にして此島を西班牙人が領有するに至つたかと云ふに、即ち彼の世界一週の元祖マゼランが西班牙王の命により印度方面より東進する葡萄牙の向ふを張らんが爲、西の方より亞米利加を廻つて香料諸島、即ちモルッカ邊に赴かんとして、亞米利加の南端を廻りて、マーシャル群島を経、南下せんとする際偶然にもセブーの島に到着したのが其初まりである。マゼランはセブーで土人と闘つて命を落したもので、其後暫くは續いて來る者がなかつたが亞米利加大陸に第二の根據を据えた西班牙は、西進の政策を抛棄するものでなく、其後數十年を経て再び西班牙の船が兵士と僧侶とを載せて此島に到着して、若干の戰の後に、遂にマニラを征服して、茲に亞細亞に於ける西班牙の根據を定めたのである。それが千五百七十一年で西班牙人が此島を領有して居た年數は三百三十三年になる。其間にタガログ、ビサヤンの二大民族を始として、呂宋島に居る數種の土人は頗る開明の途

に進んで、尙南方ミンダナオ等までも西班牙の文化が擴つて居つたのである。然るに西班牙の國家がフィリッブ二世の英國襲撃に失敗以後漸次下り坂となつて、世界第一の強國からして第二等國に落つるやうになつた爲に、東洋に於ける其勢力も此島以外に一步も發展しなかつた。加之此地方が全然本國及び外國と隔絶して居た爲に、政治が腐敗し僧侶と官吏とが思ふが儘の勝手を行つて、土人を虐げ且つ土人の智識を進めることをしなかつた、其有様は先年私が公にした比律賓跋渉と云ふ書物の中に略記載してあるから、就て一讀せられむことを望むのであるが之を搔摘んで申せば、最初此の島に送られた西班牙官吏は、土民に對して頗る高壓的手段を執つて、其弱さに乗じて無理非道を行つた、而して之を救済して土民の驕心を得たのは舊敎の僧侶であつて、最初彼等は比律賓に地上の天國を齎したかの如く見えたのであるが、後には僧侶が權勢を得ることになつて官吏よりも更に一層の惡政が行はるゝことゝなつた。而して或時は又僧侶が官吏と一所になつて人民を虐げ或時は僧侶が官吏をそゝのかして人民を苦めると云ふ如き状態であつた。

寺 院 の 跋 扈

マニラに上陸する者は皆其の舊城内に魏々堂々たる大寺院が軒を並べて建てられて居るのを見

て、一驚を喫するのであるが、それ等の寺院に劣らざるやうな大寺院は、比律賓諸島到る處に建てられて居るのである。比律賓は暑いところであるから土人の住居は竹の柱に萱の屋根であつて、其の周圍に芭蕉若くは麻の類を植えて、誠に簡單至極なものであるのに、寺院ばかりは歐羅巴風の建築であるのみならず、其内部に入つて見れば、大理石を以て床が敷き詰められて居るやうな壯大なものである。而して其大理石の如きも比律賓で採取したものでなくして、船に依つて遙々墨西哥若くは本國から取寄せたものであると云ふことである。斯の如く寺院は到る處に設けられてあるけれども、舊時の學校といふものは一も其の影を見ることが出来ない、西班牙時代にはマニラ以外の比律賓人は皆僅に此僧侶の手によつて基督教の教を聞き、若干の間答書の如きものを課せらるゝのみであつて、何等の教育をも施されぬ。唯マニラ市には百餘年前からサント・トーマスと云ふ寺立大學が有り、又ゼシユイット教の學校も存在しては居つたけれども、是等の學校に於ては西班牙語の書籍を用ひず、教科書は皆拉典語であつて、大學を卒業した者と雖も、西班牙の書物を読むことが出来ないやうな仕掛になつて居る。であるから日本人の眼から見れば餘程文化の程度が遅れて居つて、無學なる者は維新以前の百姓の如く目に一丁字なく、其の學識ある者は土語を語り、拉典語の書を読むと云ふ珍現象を生じたのである。斯う云ふ仕方では人民には少しも西班牙の本國の出來事を知ら

せず、西班牙人の情實を窺ひ知ることが出来ないやうにして、暗闇の中に僧侶と官吏とが惡事を働いた。随つて其産業の如きも少しも進歩せず、古く記録を讀んで近頃の比律賓に比較して見ると却て西班牙人渡來以前の方が諸般の事物が進歩して居つたかの如く見へる、誠に氣の毒な次第であつた。

變化外より促がさる

然るに此狀況が漸次變化して比律賓の土人が世界の大勢を知り、西班牙政府に對抗して反亂を起すと云ふことに立至つたのは、第一が南米に於ける西班牙領の獨立、第二が蘇士運河の開通、第三が西英人の亞細亞經略である。南米に於ける西班牙領と云ふは巴西を除く全部、墨西哥も其中に含まれる、是が盡く本國から獨立したが爲に、比律賓群島を管轄する政治の本部が無くなつて、西班牙政府は喜望峰を経て直接に比律賓と交通しなければならぬやうになつた。ところに暫くして蘇士運河が開通し、即ち喜望峰廻りの航路が無くなつて、西班牙との距離が餘程短くなつた。次に英人の東洋經略が段々歩を進めて、支那の各處に港が出來、商賣が段々盛になつて來たので西班牙政府も舊套を墨守することが出來ずして、次第にマニラを解放して、他の國々の商船を入れると云ふことに

なつて來た。而して内に於ては此の時勢に順應せざれば西班牙政府は比律賓島を經濟上に保持して居ることが出來ないと云ふ所からして、稍進歩的な總督等は産業開發政策を採つて、煙草、麻、木綿、砂糖等の事業を全島に起した。元來土地は豐饒であり氣候は熱いからして、少しの獎勵を加ふれば是等の物品は盛に產出せらるゝのであつて十九世紀の中頃から比律賓の商賣は著しく盛大になつて來た、商賣が盛大になつて來たのは即ち各島々に於ける産業の發達であつて、之に依つて衣食する所の農民は、前二百年間に見ることの出來ないやうな財産を次第に貯蓄するに至つた。人民に財産が出來れば自ら又氣力も生じて、世界の事物を知るの慾望も起り、段々西班牙人以外の商人等にも交を求める者も出來、又海外に出て新しき智識を得んとするの人物も生じて來た。然るに僧侶は是等の大勢の變化を理會することが出來ずして人民の財力の増加に乗じて益貪慾なる性質を發揮し、人民の財産を寺院に收めることばかりに腐心して居つた。僧侶は此の三百年間に澤山の寺領を各地方に所有するに至つたのであるが、尙其上にも人民と利益を争ふことが屢であつた。西班牙領有時代の僧侶の位置を日本に比較して見れば、恰も昔の藩政時代の殿様が、寺院の親玉を兼ねたやうなもので、之に抵抗する者は、此世で罰を受くるのみならず、未來に於て神の罰を蒙ると云ふ次第だから、大多數の人民は泣く／＼其暴虐を甘受して居つたのである、所が氣力ある少數の者は之に服

することが出來ずして屢々抵抗を試み、進んでは叛亂の形を呈するやうなこともあつた、然し人民の手に兵器が無い爲に、いつも西班牙人から押へられて、少しも頭を擡げることが出來なかつた。

西班牙時代の惡政

米人領有後に、西班牙の惡政を數へた項目を見ると、第一に官吏監督の不行届、即ち政府の下級官吏が上官の意思を無視して、有ゆる不届な事を行ふこと。第二には裁判の腐敗で、人民は裁判所に訴へても、何時も敗者の地位に立つたか、若くは稀に勝訴になつても、其裁判は實行せられずして、敗訴になつたと同じ形を存するのである。第三に官吏採用の無規則で、任用に關する法律がないから、上官は好むが儘に自分の下僚を採用して、其下僚は只自分の上官に諂ふのみ、民情には少しも通じない。第四には土地所有權の不確實で人民は先祖代々所有して居る土地でも、僧侶又は官吏からして不法に之を取上げられる。第五には政教の混同即ち政治と宗教が一所になつて居るからして或時は官吏と僧侶が一所になり或時は官吏と僧侶が意見を異にするがため、人民は常に苦痛を嘗めなければならぬ。第六は言論集會出版の自由がないからして、少しも其の不平を訴ふる途がない。

斯の如き壓制も、西班牙人が世界の耳目からして比律賓を遠ざけて居る間は自由に行ふことが出来たが、比律賓人の眼が世界に開けると同時に、世界の眼も比律賓に注ぐやうになつた所から其内情は次等に外界に知られて來て、第一に英吉利が注目し、第二には獨逸人が其の事を歐羅巴に公にしそれから最後には日本人も亦比律賓の内情を調べるやうな有様になつた。米國が此島を領有するに至つたのは偶然の出來事であつて、米人は學者の外比律賓の事情には何等の注意を拂つて居らなかつたのであるが、米人の比律賓に入るや、直ちに西班牙の惡政を擧げて之を世界に訴へたが爲に、世界は亞米利加人を義として、少しも西班牙に向つて氣の毒と思ふ者もないやうな次第である。即ち西班牙人が比律賓島を失つたのは自業自得、愚なる政策の結果であると謂ふべきであるが其犠牲になつたりサル其他の愛國者は佐倉宗五郎同様千歳に憫れまるべきものである。

菅沼貞風と三神八四郎

比律賓島を最初に日本人に紹介したのは、彼の大日本商業史の著者菅沼貞風氏である。而して最も最近に比律賓に向つて日本人の注意を惹かしたのは、テニスの上手藤田組の三神八四郎君が昨年ミンダナオ島のダバオに於て病歿した一事である。菅沼君は明治二十二年マニラに渡り虎列拉に罹つ

て死し、其の墓はマニラ郊外に建てられてある。甲州人の三神君は自ら遺言してダバオ灣の中に水葬されて、遺骸は信玄公を氣取り水底に沈んで居る。八四郎君の令兄敬長君は一昨年まで三井物産マニラ出張所長で、比律賓大學講師をも勤め太田恭三郎君と協力して、五年間日比の關係を親善ならしめんが爲に多大なる努力をなし、又貢獻を爲した人であるが、弟の八四郎君も書生時分から數回彼の地に渡り、比律賓と日本とを一層親善ならしめんとした人である。前後二人の青年が志を抱きつゝ比律賓島の南と北とに其遺骸を葬つたのは誠に悼むべき事である、併ながら日本との交情を温める上に於ては、是より優るべき記念碑はないと言はなければならぬ。

ルネタの記念碑

讀者の中に比律賓と書信を往復せらるゝ人は御存知であらうが、比律賓の郵便切手には若い比律賓人の顔が畫かれて居る、是れ即ちホセ・リサル博士の像である。又マニラに上陸してルネタ遊園に車を驅る人は其中央に屹立する所の大なる記念碑を仰ぎ見らるゝであらう、此記念碑は亦即ちリサル博士の記念碑である。それからマニラの町にはリサル通りと云ふのがあり西班牙の首府

マトリッドにもリサル町があり、比律賓の州名にもリサルと云ふのがあり、リサルの死んだ日は比律賓の國祭日となつて祭られて居るのである。斯くの如く國人の爲に渴仰せらるゝリサルと云ふ人は如何なる人であるかと云ふに、即ち前回に述べた西班牙の惡政僧侶の跋扈を嘆きて、穩かなる方法を以て之を改革せんと志し不幸にして其毒手に斃れた人である或る米國の政治家は彼れ生意氣なる文學者め、獅子の開いた口に頭を突込むから噛まれるのぢやなどと評したと云ふことであるが、リサルは決して好んで自ら生命を擲つたのではない、只比律賓人として同胞を救はんが爲に最善の努力をなしつゝあると同時に、西班牙に對しても忠誠を盡さんとして居つたが、讒者の爲に羅織せられて、思はぬ最後を遂げるやうになつたのである。其銃殺された刑場のバグンバヤンと云ふのが即ち今日のルネタ公園であつて、彼の死したる點に記念碑が屹立して居る。凡そ如何なる偉人傑士と雖も悲命に殞るゝことは免れ難い所であるが、リサルの如く從容として死に就き、聊かも恨み憤ることのなかつたのは今古東西の歴史に餘り其比を見ないのである、以て彼が如何に眞實の人であつたかと云ふことが分かる、リサルは殺される刑死の前夜「訣別の詩」を作り銃殺の前に政府の醫師が其脈搏を檢べたところ、少しも平生と異ならなかつたと云ふことである。彼は恐

らく其爲さんと欲する所を爲したのに満足し、運を天に委せて此世を去つたのであらう。其性情の美にして心事の高潔なること如何はかりぞや、此公園に屹立する所の記念碑は天を摩するの高塔であるかの如き感を吾々に與へるのである。

多 藝 多 能

リサールは誠に多藝多能な人で、第一に詩人であり、第二には文學者であり、第三には農學者であり、第四には博物學者であり、第五には醫學者であり、第六には哲學者であり、第七には畫家であり、第八には彫刻家であり、第九には外國語學者であつた。以上の如き天才は如何にして生じたるか、其系統を尋ねて見ると、多數國民の血が此人の一身に集つて居る。父方の先祖は支那人であつて、廣東附近の泉州と云ふ所から、明末の亂を避けてマニラに移住した一商人であるが、母方の方は頗る多種の血を交へて居る。即ち比律賓のタガロク・ピサヤンは素より、支那人、西班牙人、日本人までの血が多少づゝ流れ込んで居ると云ふことがあるが、リサールが遺したスケッチの書物を見れば日本の北齋風の繪などを畫いて居る物があつて、中々巧まい、如何にも日本人の血が混つて

居さうに思はれる。

幼時のリサール

彼の生れたのは一八六一年の六月十九日であつて、此時は其父母ともマニラの南なるバイと云ふ湖の畔カランバと云ふ村に住んで居つた。村とは言へ此處は少しく市街の形を成した處で、リサールの家も土人風と西班牙風とを交へて頗る立派なものであつた。父は先祖代々土地所有者で、農業を營んだ者であつたが、母はマニラの宗教學校の教育を受けて、西班牙語にも通じ拉典語も讀み、頗る才氣のあつた人で商業なども經營して居つた。兩人とも至つて信仰の深い人々で、朝夕禮拜を勤めたと云ふことであるが、幸にして彼の屬した寺の和尚が西班牙の僧侶には稀に見る善人であつたさうである。リサールは一人の姉と一人の妹とを有つて居つた、是等の人々も皆追々話頭に上る人である。リサールが初めて其の異常なる天才を父母に認められたのは僅三歳の時であつて其時分から彼は文字を讀むことを學びたいと願ふて頻りに父母にせがんだ、そして遂に其姉の書物を一所に教へて貰ふことになつて、彼は喜んで其書物を見て綴りを學ばうとして頻りに努力して居つたさうで

ある。それから彼は子供ながらも其頃頻りにお寺に行つて遊んで居つた、信仰の深いお母さんは大に喜んで、此子は大層信心深いと云ふことを人に話したら、リサールは直ちに答へて、イヤさうては無いいろ／＼な人がお寺に詣るから、それを見るのが樂みて行くのであると言ふたさうである。後年彼が繪を描き又は小説を書いて、種々なる人物を筆の先に活躍させたのは、實に此時から其萌しを現はして居る。それからリサールには三人の叔父さんがあつて、是が又幸にも各相當な人物であつた、一番小さい叔父は頻りに讀書を教え、それから次叔父はリサールに向つて體育を施した、一番上の叔父は又趣を異にして、リサールに向つて精神教育を施して、すべて何事も自ら勞力せざる物は取るべからずと云ふ主義を吹込んだのである。

天才を現はす

リサールが最も早く天才を現はしたのは繪畫であつて、鳥獸などを描くにも只靜止して居る場合を描くのみならず活動し若くは將に飛ばんとする所の姿を描く、それも一切手本に據らずして自ら考へて此小さい子供がさう云ふ鳥獸の圖を描いて見る人を驚かした。それから繪畫より移つて其才を

彫刻に及ぼして、最初は粘土、次に蠟を以て遊技の中にも種々な形を造り出して楽しんで居つたのであるが、其の造る物が頗るよく實物に似て居つたと云ふことである、以て其の觀察の如何に鋭かつたかと云ふことが分る。それから彼は是等の藝術を以て遊ぶ傍らに、又外に出て遊ぶことを好んで一匹の子馬と大きな犬を持つて居つて、繪畫彫刻に倦く時は馬に乗り若くは犬を伴れて遠方までも散歩に行き、同時に是等の獸類に對しては親愛の情を現はした。比律賓の村は日本の村と同じで畑などに藁小屋を拵へてあつて、其處に夜になると村人が煙草を吸ひながらいろいろの話をする習慣であるが、リサールは屢々此藁小屋の中に行つて、年老ひた村人から、比律賓の土人間に傳へるゝ昔話を澤山聽き覺えた。それから又此子供は手品が頗る上手であつて、何時誰から習ふとなくいろいろな手品を覺えて、大勢の人の集る時にはそれをやつて人を喜ばせ、更に又幻燈を扱ふことを覺えて、それも自分の拵へた畫題を映して慰みに人々に見せることも屢々であつた、若し幻燈のない場合には蠟燭を燈して、其火影に自分の手を翳して種々な形を壁などに映して遊び友達や老人を喜ばせた。斯の如く氣輕に面白い子供であつたけれども、併ながらどこまでもおとなしくして、何處やらに氣品があり何となく小さな子でなくして、一人前の大人であるが如き心持を有つて居つ

た。何か意見を述べる時などには、頗る物靜かに筋道を立て、話をして、聞く者をして自ら感服して頭を下げさせるやうな風であつた。

ロ　　ペ　　ス　　和　　尙

前に云ふた父母の參詣するお寺の和尚はロペスと云ふ人であつたが、此が誠に氣風の穩かなそして公平な考を有つた人であつて、頗るリサールを愛して常にリサールを自分の處に呼んでいろいろな事を教え、其の發達を見て喜んで居つた、リサールも亦此人に種々なる教えを受くることを喜んで屢々長時間傍らに座することがあつたが、其間に彼が發する質問が、他の大人の思ひ及ばざるやうな事が頗る多くしてロペスをして答に窮せしむることが少なくなつたさうである。リサールが比律賓人の苦痛に關して知り始めたのは即ち此坊さんとの談話に據るものであつて、心の中に同胞に對する哀憐の情を起し始めたのは既に此子供時分からであつた。そして彼は屢々其湖の畔に立つて遙かに對岸の村を眺めつゝ、あの對岸の村の人々も吾々の村の人の如く、常に困難し苦痛を感じて居るものであらふと思ふて、立ちも去らず思案して居つたことが屢々であつたと云ふことである。

此湖は私も二三回通過したことがあるが、誠に景色の好い處で、唯其湖底の淺くして泥の浮むが爲めに水の色が常に赤色を帯びて居ることが不快であるが、周圍の山々の有様などは漫ろに日本を偲ばしむるやうな處であつて、呂宋に於ても勝景の地と稱せられて居る。而してリサールが遙に眺め入つて冥想に耽つた處が、今は其リサールの名を以て州名とするに至つたのは、誠に奇遇と言はざるを得ぬ。

愚なる蝶の話

前にも言ふた如く、西班牙人の政策は比律賓人をして西班牙語を知らしめざるにあるけれども、それは學校に於て教へざる事であつて、多年西班牙人の治下にある比律賓人は、自ら西班牙語を知つて居る者が少くない道理であつて、リサールの母親の如きも即ち其一人であるからして、リサールは又幼時より西班牙の書物を讀むことを教へられて居つた。傳ふる所によれば彼が最初に讀んだ西班牙語の書物は『愚なる蝶の話』と云ふお伽話であつて、彼は母親の所から其書物取出して、一人で讀まんと試みて居つたが讀むこと能はずして苦んで居つた、それを見た母親は其書物を取上げて

流暢なる西班牙語で讀んで聽かせた後に尙タガログ話に翻譯して聽かせた。其話の大意は、愚なる蝶が其父母の誠を肯かずして、蠟燭の火に飛込んで己の身を果すと云ふ話であつた。リサール傳の著者クレীগ博士は、リサールの最期が恰も此の蝶の如く、知らず識らず火焰の中に其身を投ずるやうになつたのも、一つ不思議であるとして書いて居られるが、誠に小説のやうな話である。

アンチポロ寺參詣

リサール四歳の時に其姉を喪つて初めて骨肉に別るゝの悲みを實驗した、さうして七歳の時に初めて父母に連れられてアンチポロと云ふ處まで旅をした、アンチポロはマニラの東北であつて、有名な聖母マリヤの像を本尊とするお寺があつて、毎年祭日には四方から人々が群集するのである。其時にリサールが買ふて持歸つた本尊の繪が最後まで彼の手帳に貼付けられてあつたさうで、物を大切にする性であつたことは、之を以て證することが出来る。リサールの母はお寺詣りをよくする所の善女であるのみならず、又頗る讀書を好んで、古い有名な書物を澤山讀んで居つて、さうして其話の大意を暇ある毎にリサールに話して聞かせた、是が後年リサールをして其文藝の才を發揮せ

しむる所の好き材料となつたものと思はれる。そこでリサールは母から受けた教育に依つて、初からして文學に興味を有つて、創作を試みやうとしたが、此時分には西班牙語を以て充分に思ふことを書くことが出来ない爲に、最初はタガログ語に依つて一の脚本を書いた、其脚本が圖らず近隣の或村長の眼に止つて、誠によく出来たと云ふて褒美の金を贈られたことがある、是はまだリサールが八歳位の時であつて彼が九歳になつて初めてカランバを出て、ビニアンと云ふ所の學校に入つた

先生 の 閉 口

此學校の先生は非常にやかましい人で鞭を以て生徒を叩いて、書物の文字を血液の中に浸み込ませると云ふやうな評判の人であつたが、リサールは入校後僅か數ヶ月にして此先生は逆も教えることは出来ぬ、自分の智識は皆此子供が吸ひ取つてしまつたと言ふて、リサールをマニラに送らんことを勧めた、父は之を信じなかつたが、其教師から頻りに言はれて、それならばと云ふので思ひ切つて此の小さき小供をマニラに送ることにした、恰度此時リサールの叔父のホセ・アルベルトと云ふ人がマニラに住して居つたから、此叔父に頼んでマニラの學校に入れることになつた。叔父のホ

セー・アルベルトはカルカッタの商業學校に入つて教育を受けた人で、英語を話す所から英人にも知己があつて、香港の太守サー・ジョン・ポーリングが比律賓に來た時は此叔父アルベルトの家に泊つて、其事を著書の中に書いて居る。サー・ジョン・ポーリングと云ふ人は、世界に於ても有名な言語學者であつて、世界各國各種の國語から面白い詩を英語に翻譯して居ると云ふやうな人であつた。此のジョン・ポーリングのアルベルトを訪ねたことがリサールに感化を及ぼして、彼はどうかして文明國のすべての國語に通じたいと云ふ念を起すやうになつた。そののみならずリサールは此ポーリングから、西班牙人のモルガと云ふ人が、書き遺した比律賓の歴史のあることを聽いて、大に之に興味を有つて、後年遂に其書物を再び刊行して世に擴めることになつた。是は比律賓の文書中最も貴重な物であつて今も比律賓研究者は皆之を讀むことになつて居る。

當　　時　　の　　不　　平

リサールが學校に入る時分の比律賓の状態は、恰度デラトール總督の寛大なる政治が行はれて居つた時で、種々進歩的な事もあつた。併ながら比律賓人の新思想にかぶれて不穩なる書信を往復せん

ことを恐れて、或人々に對しては書信の往復を許さず、又其内容を檢閲した後でなければ配達しないと云ふやうなことであつた。それから又農民と僧侶との土地に關する争は所々に起つて、農民の勢力が次第に増加するに従つて、其指導者絶滅は甚だむづかしかつたが爲に、或時には其攪亂の巨魁を懷柔して之を憲兵隊長に登用したことなどもある。併ながら暫くして又其人間を罰すると云ふやうな事があつたので、不平黨も常に不安の情に捉はれて居つた。それから又ジエシユイット宗は新たに布教を許されて入込んで來たが、其ジエシユイット僧侶の歸つたが爲に、在來の他の僧侶が有つて居る説教區を失つた者は、其の償を比律賓人の僧侶から取つて、比律賓僧侶の預つて居る所の説教區を奪ひ取る、之が爲に比律賓人の僧侶の中に甚しき不平が起つて來た。而して其ジエシユイットの學校に於ては比律賓人と西班牙人とを同様に取扱ふと云ふので一面頗る公平であるが他の一面に於ては兩人種の生活狀態を保存すると云ふ名の下に比律賓人には床の上に坐して手で食物を喰べさせる規則であつた、其時比律賓人は最早大分生活狀態が變つて居つて、椅子に坐し匙で物を喰ふ者も澤山あつた、殊に學校などに子弟を送る者は皆左様な習慣であつたが、學校に行つて居る子弟が斯の如く従前の野卑な風習を守らせられるので、是亦大なる不平の原因となつた。そこで學

ブ リ オ ス 刑 死

校に於ては屢々生徒が怒つて、西班牙人の方でも其繁雜に堪えずして、遂に學校だけは改革を行つて、比律賓人の僧侶ブリオスと云ふ人を含監の如きに任命して權力を與へ比律賓生徒を取扱はせた

此ブリオスと云ふ人はなか／＼熱心なる愛國者であつて、金を募つて『比律賓人の聲』と云ふ新聞を發行して、大に比律賓人の位置を上げ、進歩的な思想を養成する爲に闘つた。然るにブリオスは遂に之が爲に僧侶から非常に憎まれて、他の二人の僧侶と共にバグンバンで刑せられた、其罪狀の主なるものは叛亂を企つと云ふにあるが其實は新聞紙を維持する爲に金を集めるに當つて、金のこととを彈藥と書いた、其彈藥の文字によつて羅織せられて刑せられたのである。尤も其時分にカビテに於て比律賓土人兵が暴動を起したことはあるけれども、それはブリオスには何等の關係もなかつたのである。リサールの兄のバシアノと云ふ人は此ブリオスの最も愛した弟子で、其家に同居して學校に通學し居つたけれども、此人も愛國心に刺戟せられて屢々不穩なる言動をなすと云ふので度々落第させられた。そこで遂に家に歸つて農業に従事して多分今尙生存して居る筈であるが、是は

或米人の説によればリサールにも優る人物であると云ふことである。

英 米 と 比 律 賓

而して恰度此ブリオスの騒ぎのあつた以前からして香港の新聞は頗る比律賓に注意を拂つて、屢々記事論説を掲げそれから英國の自由なることが、次第に比律賓人の頭に分つて來て、頗る英國に憧憬する傾を生じて來た。更に又た米國は當時比律賓島の一なるスル―島のソルタンと條約を結んで、北ボルネオの一部を借受けて、北ボルネオ會社と云ふものを作つて開墾をすることになつた爲に、是亦比律賓人よりして尠からざる注意を拂はれた。それから又上海近傍に叛亂が起つた時分に支那政府の囑託によつて米國のウォード將軍が之を鎮壓したが、其ウォード將軍の常勝軍と云ふ名を取つた部下には比律賓人が混つて居つて、なか／＼勇敢に戦つたのである。是等のことから米國も亦比律賓人の注意するところとなつて其自由なる制度を比律賓島にも布いて貰ひたいと云ふやうな希望が段々盛になつた。斯の如き際にリサールはマニラに來ることを企てたのであるが、測らずも母の災難の爲に其留學は少しく延びた。其母の災難はリサールをして一層改革に熱中せしむる原因

となつたものであるから、其概略を述べる必要がある。

慈母の災難

リサールの家はカランバーに於て最大素封家であるが爲に、いろ／＼な役人なども來て泊る、恰度日本の田舎のやうに宿屋と云ふものがないから役人は素封家の家に泊るのである。或時一人の憲兵中尉がやつて來たが生憎其馬に與へる飼葉が無かつた、憲兵中尉は主人に向つて何故予の馬に飼葉を與へぬかと言ふた所がリサールの父は答へて私の馬に與へる飼葉はあるけれども私の馬を飢えさしてお客の馬に與へる譯には行かぬと言つた、そこで憲兵中尉はこれは不届な奴であると言ふて大に怒つた。そこに又裁判官でリサールの家に泊つた者も何かの原因で大に含む所があつたと云ふことであるが、是等の人々が一所になつてリサールの母を虐めたのである。

前に言ふたリサールの叔父のアルベルトは従弟同士に當る女を娶つたのであるが、夫婦仲が悪くして屢々喧嘩をする、リサールの母が之を仲裁するが爲に屢々其家に出入するのを附込んで、彼の憲兵中尉は此母がアルベルトとアルベルトの妹を毒殺して細君を助けやうと云ふ惡計をしたと云ふこ

とを捏造して裁判所に訴へた。母は直ちに拘引されてマニラに送られたのであるが、普通なら車に載せべき所を車にも載せずして、湖水の畔の遠い道を歩かせたそして途中のサンタクルースと云ふ町に到着した時に、其親族の人々が氣の毒に思ふて其家に泊らせて食事などを與へた所が中尉は大に怒つて其拘引しつゝある巡査を鞭打つて、何故罪人に左様な勝手なことをさせるかと云ふて非常に怒り、又リサールの母にも罵言を浴せ掛けた。所が素より何等形跡のない申立てであるから裁判所では無罪になつた。所が今度は裁判官の一人が彼は裁判所に對して甚だ失禮な女であると云つて裁判所侮蔑罪を訴へた、そこで高等裁判所に移されて取調べられたが、其結果は有罪であるけれども拘留の間が長かつたら放免すると云ふことで漸く家に歸ることが出來た。所が更に又アルベルトの悪い代言人から告訴されて復た再び法廷に立たなければならぬことになつた。

再　三　の　厄　難

リサールの母が三度裁判所に引出された事件は金に關することである、何でも彼のアルベルトが一萬六千ペソの現金を穴藏に仕舞つて有つたのが、紛失したと云ふので裁判所で搜索して居る中、ア

ルベルトは代言人某に一切の權能を代理せしむと云ふ委任狀を渡したが、此代言人が惡い男で、リサールの母を罪に落し、賠償でもさせようと云ふ企をしたと見えて其金はリサール夫人が横領したのだと訴へた。母は砂糖の賣買などを内職として居たところから、時々大金を出し入れることが有るので、疑へば疑はしくなる、其所で裁判所ていろ／＼調べられたが素より潔白、何の證據も無い、さうすると右の代言人先生委任狀に一切の權能とあるのを種に、勝手にアルベルトに代り證據人にならんことを申立てた。裁判官も是には呆れて、其申立は却下したが事件は中々濟まぬ。

其所へ恰度面白い事が出来た、時の總督デラトールで有つたらう地方巡回、民情視察の途中、カランバに来てリサールの家に一泊した。徒然の御娛めと云ふのでリサールの妹サチュリナの踊を御覽に入れたところ、大層氣に入つて、何なりと褒美を望めとの御言葉、娘は嬉さに胸を躍らせながら母の冤罪を赦して戴きたいと願ふた、總督は大に感心し歸任の上事情を調べて直に母を放免させたリサールは慈母が再三惡人に苦しめらるゝのを見て、人間の信じ難きを始めて悟つたと言うて居る

リサールは漸く千八百七十二年二月にマニラに行くことが出来、六月にジュシイットの教校なる學校に入つた。其後暫くして一度カラバンパに歸つたが、其時に恰度お祭があつて、アノ邊はいろ／＼繪を描いた幡を立てる風習であるが旗に繪を描く者がなくて困つて居つた、其所へリサールが恰度歸つて來たので畫をかくことを頼んだらリサール何の苦も無く其旗に立派な繪を描いた、何でも出来る賢い子だと云ふので忽ち其名が高くなつたと云ふ事である。其頃リサールは親類の人が煉瓦工場を持つて居る所から、粘土を貰つて來て頻りに人形を造つて彫刻の下稽古をした。

政 治 教 育

前に述べたアルベルトは此時マニラに住し、リサールは最初これをたよつて町に出た。此人は前に言ふたやうに教育のある人で、西班牙の役人等との交際もあり、リサールに政事上の精神教育を施した、アルベルトの最も心易かつたのは後に西班牙の攝政となり暗殺された、プリム大將であつた。大將は自由を愛する人で「昨日よりは今日今日よりは明日一層自由なるべし」と言ふ文句を以て座右の銘として居つたが西班牙人が輕躁で自由の眞意義を解せず、十分の準備無くして共和政體を行

はんとするを見て慨嘆し、佛蘭西第一革命の覆轍を踏むであらうと言つて居たが不幸にして暴客の凶刃に殞れた。其殺された時アルベルトはマドリッドに居て、日夕親しく大將と往來しつゝあつたと云ふ事である。攝政は生前アルベルトにカルロ三世のナイトと云ふ勳章を贈つたが、其次に國王となつたアメデオは更に上等のナイトコムマンダー勳章に昇叙した。ところが此アメデオ王の時民心いよ／＼共和に傾いたので、王は人民に向つて其危険を忠告するの詔を下し、自から位を退いて彼等の爲すがまゝに任せた。其所で共和黨は志を得て政體を變更し、米國の眞似をしたが空中樓閣で政治は無茶苦茶、王政時代にも見ざる惡政を行ひ、キューバでは大虐殺をやつて折角共和國を承認した米國に大なる惡感を抱かせた。

王 黨 の 人 々

西班牙人中の保守黨はエリザベス女王の子カルロを戴いて騒動を起したが、事敗れて有志四方に奔竄して、其内若干の人は比律賓に逃げて來て守舊家に歡迎せられた。アルベルトは勿論其歡迎者の一人である。右の有志の中バサと云ふ人は後に香港に永住し、レギドールは倫敦に、タベラは巴里

に居を定め、比律賓青年の訪ね來る者に溫情を灑ぎ大に其便利を圖つた。比律賓の青年は西班牙よりも英佛等に行く方が優れたる教育を受けられると信じて居たから續々是等の人々を頼つて香港、倫敦、巴里に出掛けることになつた。

初めて讀める小説

此時分リサールは翻譯により外國の小説を讀み始めたが、其最初の書物はデユマのモンテリクスト即ち日本で黒岩氏の譯した巖窟王であるが、デフ別莊の囚人とリサールの母の境遇が相似て居るのて深い興味をもつて此書物を讀んだ。それから次に獨逸人ヤゴの比律賓の旅行記を讀んだ。此旅行記はなかなかよく出來たもので、今も行はれて居るが、其中に後來米國が西班牙に代つて此島を文明に導くであらうと云ふやうな説が書いてある。是亦リサールが大に注意して讀んだ所のものがある。それから此アテネオと云ふ學校に在學中リサールはクリストの心臓と云ふ像を木で拵えたことがあるが、それが久しく其學校の壁に安置してあつた。後年リサールの處刑せらるゝ時に或老僧が此神像を持つてリサールに逢ひに來た。是も亦小説的の奇なる因縁の像である。それから又「バ

シツグ河畔」と云ふ一幕物の芝居を書いた。學校生徒は之れを脚本として演劇の眞似をして大に楽しんで。

コンコルデアの女學生

リサールがマニラに來た後に、妹のサチユリナもやはりマニラに來て、コンコルデアと云ふ女學校に入つて、リサールは此妹に會ふのを樂みにして、暇さへあれば其女學校に行つて遊んだ。さうして左の如き歌を作つて女學生等をからかつた。

コンコルデアの女學生、今流行の派手姿、

智識と鼻は高けれど、笑無き顔の寂しさよ。

此コンコルデアには可なり大勢比律賓の娘達が居つた。其の中の或娘さんとリサールは仲好しになつた。娘さんはリサールより年長で、姉さん氣取りでリサールを可愛がつて居つたが、暫くして其の學校を出て他へ嫁入つた。リサールは此娘が盛裝して家を出て車を走らせて行く後影を見て、何故か胸が一杯になるやうな氣がしたと自記して居る。恐らく是は彼が婦人に對して愛情を有つたこ

とを自覺した初めてであらう。

盡く懸賞に當選

リサールはアテネオの學校に二年間居つたが、其間に懸賞があれば必らずリサールが取つた。さうして二年の後にバチエラー・オブ・アーツの學位を得た。そこで更に進んでサントトーマスの大學校に這入つた。サントトーマスでは初年に哲學をやり、二年目に醫學に轉じた。其頃リサールの相談相手として居る先輩の僧侶があつたが、其人に大學で何を學ぶべきかと相談をしたところが農學をやれと云ふ返事が來た。其返事が坊さんの旅行中であつた爲間に合はず哲學を始めたが、其勸告も棄難しとして後に農學をも兼修し遂に農學及測量の免狀を得た。然るに其年齢が成規の年に達しなかつた爲に、廿一歳になるのを待つて始めて免狀を下附されたと云ふことであつた、以て如何に其天才の各方面に卓越して居るかと云ふことが分る。

「比律賓の青年へ」

其頃からリサールは又西班牙の詩を學びソリーラなる人の作を愛して其人の作風に倣はんことを勉めた跡がある。千八百七十七年に學校の文學會が懸賞し詩を募つた、之に應じて第一等の賞與を得たのは即ちリサールであつた、其詩は「比律賓の青年へ」と云ふ題であつて、比律賓の青年は大に奮發して精神上に向上しなければならぬと云ふ意味を麗はしき文句で書いたのである。暫くして又次に第二の競争があつて、此時もリサールは「神の集ひ」と云ふ詩を作つて第一等となつた、然るに發表された所を見ると西班牙人が一等になつて、リサールは二等に落されて居つた、是は審判者が細工をしたものである、斯の如き事も西班牙人が如何に我儘を働いたかと云ふ一の證據として見られる。

カランバの危難

其頃リサールは危く生命を失はんとしたことがある、それは或時故郷のカランバに歸つて、夜中町を歩いて居ると暗闇から一人の大男が現はれて、何氣なく近づく、彼の母に苦痛を與へた憲兵中尉であつたが、突如劍を抜いてリサールに飛蒐つた、リサールは素早く身を轉じて之を避けたけれ

ども、脊中を斬られて負傷した。そこで裁判所に訴へて加害者を刑罰に處せんことを求めたが、是も亦遂に西班牙人の爲に揉み消されて、加害者は何等の刑罰に處せられなかつた。

斯の如き事が重なつて誠に不愉快であるが爲に、リサルは遂に歐羅巴に行くことを決心して、さうして學校はまだ卒業しないけれども、密に渡航の用意をして千八百八十二年マニラを出發した、其時兄の手によつて七百ペソの金が旅費として調へられた、それから姉は自分の持つて居るダイヤモンドの指環を抜いてリサルに學費として送つた、此金とダイヤモンドを持つて密にマニラの町を遁ぐるが如く出發した其出發の前夜妹を連れて市中を見物して、約五時間ほどマニラ市に名残を惜んだが、其間に馬車の馬を一度取換へたと云ふから、随分周到綿密に市中を乗廻したものであらうと思ふ。

歐 洲 遊 學

斯の如くにしてマニラを出て英吉利船に乗つて新嘉坡に行き、それより更に佛蘭西の船に乗換へて歐羅巴に向つたリサルは在學中佛蘭西語を學んで、佛蘭西語で詩を作る位な學力を有して居つた

けれども、會話を學ばざりしが爲に船中で話が出來ない、そこでどうしたかと云ふと佛蘭西語と拉典語を交へて話し、尙言語で意を盡すことの出來ない所は繪を描いて目的を達したと云ふことである。リサールの遺物の中に此時の手帳があるが、それにはマニラ出發の時から新嘉坡アデン、蘇士ネーブルスに至るまで諸所のスケッチが奇麗に綿密に描かれてある。扱此佛蘭西船は先づ伊太利のネーブルスに着き、それから佛蘭西の馬耳塞に着いた、リサール馬耳塞から上陸し、それから陸上を鐵道でビレネー山脈を越えて西班牙に行つて、最初先づバーセロナに着いた。

學生の歡迎

バーセロナには比律賓の學生も少しく留學して居るので、リサールの爲に直ぐに會合を催した、さうして西班牙に先着して居る人々は、西班牙並にバーセロナの事情を話して聞かせ、リサールは比律賓の模様を話したが、此時リサールの語つた所は頗る悲觀的であつたと申すことである。其後リサールはマニラのタガログ語新聞に「故郷の愛」と云ふ標題で一文を寄せた。

此バーセロナは有名なカルセージの大將ハンニバルの建造した町で、其後には有名な羅馬人が澤山住み、又彼のコロンブスが亞米利加から土人其他珍しい物を持つて歸つて西班牙人を驚かした古跡であるから、リサルに取つては誠に面白く、彼は多大の興味をもつて市中を見物した。此バーセロナのあるカタロニア洲は西班牙中で最も進歩的な所で共和黨全盛の町である、官吏が町を通行すれば惡口を言ふと云ふ位に共和主義の向上した處であつて、新聞紙の如きも無遠慮に政府を攻撃するリサルの比律賓に在る時は餘程な無理無法を西班牙人から仕掛けられても之を言語文章に發表することが出来ないやうな窮屈な有様であつたから、此カタロニアに來て言論の極端に自由なのを見て、非常に驚いたと云ふことで有る。

大學で八宗兼學

リサルはカタロニアの大學には入らずして首府馬德里に行つて其處の大學に入つた、さうして第一に醫學をやり、第二に文學をやり、第三に哲學をやつた、其傍ら又他の學校に行つて彫刻と繪畫を學んだ。それから有名な語學者ヒュースと云ふ英人に就て諸國の語學を學んだ。前にも言ふた如

くリサールの用意金は七百ペソとダイヤモンドの指環であるから、長くは續かない。其所で學資は矢張り父の手から從弟リベラなるマニラ商人の手を経て内々で毎月送金をして來た。而して一方マニラの大學は尙在學の體にして月謝を拂ひそれから先は時々リサールは何處へ行つたらうかと云ふやうな顔をして、學校に尋ねに行くと云ふやうな手段で、出来るだけサントトマス大學の僧侶等に西班牙に居ると云ふことを隠して其怒を和らげんと工風した。リサールは國から送つて來る金をどう云ふ風に使つたかと云ふに、書物を買ひ芝居を見、假面舞踏を見、富籤を買ふことにキチンくと費した。富籤は若し當れば數ヶ年間の學資が得られるから、毎月缺かさず買つて居た様子である。其の少い金の中から出来るだけ書物を買ふたが、其最も先に買つたのは米國大統領の傳記であつた。是は餘程上等な書物で革表紙天金總金の書物を買うてある。さうして後に至つて更に續編をも買ひ足して居る所を見ると、彼が米國に就て多大の興味を有つて居つたことが分る。其次に買ふたのは英國政變史である。それから段々に種々な書物を買ふたが、其書物はすべて今日のマニラの比律賓圖書館にリサール遺物として保存されて居る。

比島青年を避く

馬德里には比律賓の青年が大分居つて此等が一の青年會を組織して、いろ／＼改造論をやつて居たが、青年輩が餘りに過激なことや餘りに放縱な舉動を爲すところから、少し年を取つた眞面目な者共は皆追々に退會して、遂に其青年會は永續しないことになつた。初めはリサールも是等青年の會合に出席して、比律賓の事情を歐羅巴に早く知らせるが宜い、それには比律賓人の手を以て比律賓の現状を書き、さうして比律賓人の畫工の手に依つて其中に挿畫を入れなければいかぬと云ふ事を主張したが、其説は全部容れられなかつたけれども、何か比律賓人の手を以て書かうと云ふことになつた。而して其題目を協議する場合になると、すべての青年が皆自分「比律賓の婦人」と云ふ問題で書くと云ひ出し、相争うて果しが付かない。斯う云ふ不誠實な有様を見て、リサールは大に嘆息して、爾來餘り青年の中には顔を出さずして一生懸命に勉強することになつた。

無宿の猶太人

「馬德里滯在中リサールは不圖佛人ユージン・スーの書いた『無宿の猶太人』と題する小説の古本を手に入れた。此『無宿の猶太人』は亞米利加で南北戰爭を起したとさへ言はるゝ『アングルトムス・キャビン』にも比すべきもので、十九世紀末の佛蘭西を一變したとも言はるゝ位な名著である。リサルは之れを讀んで小説の人心を感ずることの偉大なるを知つて、自分も一番全力を揮つて小説を書き比律賓の事情を歐洲文明國に訴へようと思ひ付いた。是が即ちリサールの生命を奪つた『ノリメタンゲレ』と云ふ小説の作られた動機である。此頃リサールは西班牙の事情を研究することに力を盡して居つたが、叔父の友人の紹介でフリーメイソンの仲間に入つた。此メイソンは後に西班牙人と比律賓人の組織したメイソンとは違つて、智識あり信用ある人が澤山に入つて居つて、リサルは其人々と交つて西班牙の有識者階級の事情を探知した。

英 佛 獨 伊 語 の 學 習

千八百八十四年リサールは英語を習ひ始め、傍ら又佛蘭西語を更に深く研究し獨逸語をも殆んど同時に學び始めた、それから又ゼノアに博覽會のあつたのを機會として伊太利語をも學んだが、此伊

太利語を學ぶには多く西班牙の翻譯書に依つて研究したさうである。リサールの多藝なることは前にも述べたが、彼は又將棋の名人であつて、將棋の俱樂部や何かにも出入して勝負を爭つたが、其最も好敵手として居つたのは、元の西班牙大統領であつたピー・イマルガルで此の人は英國風の自由を愛する人であつた。此頃リサルは勉めて西班牙の社會に出入し、ルナ、ヒダルゴと云ふ二人の比律賓畫家がマトリッドの博覽會で賞牌を取つた時西班牙人と比律賓學生の開催した名譽表彰會に出席して演説した事がある。

大學を卒業す

リサルは此年大學を卒業し文學士兼醫學士となつた。卒業後の静養に田舎を旅行して、風俗人情を探つたが、セルバンテスやドンキホーテの小説に現はれるやうな田舎の光景は頗る彼の氣に入つた。

翌千八百八十五年にリサルは巴里に行つた。此處では眼科を専門に研究した。それは比律賓に残してあるが明を失つたと云ふことであつたので、母の眼病を癒したいと云ふ考から眼科を研究しド

クトル・ドヴエツケールと云ふ有名な佛蘭西の眼科醫（世界の眼科醫がオーソリチーとする書物を著した名醫）の弟子になつて、大層其醫者から愛せられたと云ふことである。巴里には前に述べたタベラと云ふ西班牙の亡命者が住つて居て、此と最も心易く交際し、それから又昨年博覽會で賞を受けた畫家のルナが巴里に來て居つたので、此れとも最も親しく往來した。

フ　ワ　ン　・　ル　ナ　の　天　才

此ルナと云ふ男は狂に近い天才で、巴里に於ても畫家として立派に認められた人であつたが、比律賓から同伴した若い妻が或男と訝しな仲になつたと云ふので、其妻を殺し母親を傷けたことがある。それで佛蘭西の裁判所に引出されて審問を受けたが、奇拔な佛蘭西人はルナを愛し、美術家は皆ルナを助けようとして非常に奔走し、辯護士は斯の如き大天才は普通人の如く取扱ふべからずと何とか辯護をして、遂に處刑を免れしめた。此ルナの兄弟が後にアギナルドと一所に義軍を起して西班牙人と戦つたルナ將軍である。

歐　洲　の　學　者　に　交　る

リサールは巴里から歐羅巴に旅行を思ひ立つて、先づ獨逸のハイデルベルヒに行つた。恰度其時はハイデルベルヒ大學創立五百年祭のあつた時で、種々な學者が各地から集つて盛んなことであつた。リサールは此處でも入學する積りであつたが、證明書を持つて居らなかつた爲に入學が出来ず、唯聽講生として暫く大學に通ひ、其傍ら將棋の會に加入して獨逸人と交際した。次に彼はライプツヒに行つて新心理學の比較民性論を研究した。後に米國に行つて大學教授となつた彼の有名なミュンスタルベルヒは、此時分リサールの同學生であつたさうである。ライプツヒから伯林に行つて前に述べた比律賓旅行記を著したヤゴーに面會した。さうして種々比律賓のことに付き智識を交換した後、ヤゴーの紹介でもつてドクトル・ルードルフ・ウイルヒヨウと云ふ考古學の大家と心安くなつて其ウイルヒヨウの紹介で伯林の心理學會に加入した。それで伯林大學に極く近い下宿屋に居つて、大學に通ふ傍ら昨年來書き續けつゝありし小説ノリ、メ、タングレを書いて、それを其處で完成した。此本は西班牙語であるが獨逸は印刷の安い處だから、其處で印刷に附した。所が待受けた金が國元から到着せず、大に困つて居る所へ、恰度比律賓人のドクトル・ビオラと云ふ人が來て不圖懇意になり、持合せの金を立替へてくれたので、やう／＼印刷が出来上つて其本を比律賓に送つ

た。それから又此ビオラと同行してドレスデンに行つて索遜人類學校の校長であるドクトル・メーヤーに會うた。此のメーヤー氏は曾て比律賓に旅行したことがあつて能く其事情を知つて居り、而も其研究した所によれば比律賓人は將來を有する者であると云ふことであつて、リサールも其説を聽いて更に一層愛郷心を高め且希望を生じたドレスデンは有名な美術館のある處であるが此美術館でリサールは『縛られたるポロメシユース』と云ふ彫刻を見て大に之を愛し、巴里にある同題の彫刻の記憶を混合して自ら別のポロメシユースを彫刻した。それから彼はドレスデンを去つて奧太利に入り、先づ大人類學者ブルメントリットを訪問した。ブルメントリットは足未だ東洋の地を踏まずしてよく比律賓の人類を談ずる人である。此滞在中或時リサールは記憶からブルメント博士の肖像をスケッチしたが極めてよく博士に似て居る。博士はリサールの奇才に驚き一層之と心安くした。それからリサールは奧太利の都維也納に行つて、ブルメントリット博士の紹介を以て有名な小説家ノルデンフェルを訪ねた。此小説家は西班牙通でリサールを對手に西班牙文明を細論したと言ふとて有る。

斯の如く、リサールは歐洲の大都を廻り、大家に交つて自分の智識を大に養つて後に、伊太利に渡

り、羅馬に行つて古代の文明を視、再び佛蘭西に入つて、馬耳塞から佛船に乗り柴棍まで歸り柴棍から米穀輸送船に乗つてマニラに歸つた。

神 醫 と な つ て 歸 國

リサルがマニラに歸つたのは七年振りであるが、其市街は依然として舊態を變じない。道を歩きながら此處には石の凹んだ所があると思へば正に凹んだ所がある如く、少しも趣を異にして居なかつた。それからリサルは直ちにカランバの故郷に歸つて久し振りに父母の喜ぶ顔を見たが、母は二重内障眼で盲目になつてゐた。先づ之を治療せんとして手術を施したが、運よく再び物が見えるやうになつた。所が遠近此事を聞傳へリサルの賢い息子が盲目を癒す眼科醫になつたと云ふので患者が押掛け、僅かの療治代が積もり積もりて七ヶ月の間に五千ペソ(圓)の金を得た。

小 説 で 怨 を 買 ふ

リサールの小説ノリ・メ・タンゲレは公に賣出したのではなく、只其の知人間に配布した位のもので

あつたが段々に其書物の評判が高くリサールの歸國によつて一層讀人が多くなつた。

其趣向は一人の青年が久しく西班牙に留學して國へ歸り、或僧の娘と相愛する、僧は此青年を危険人物なりとして娘を他に嫁し、青年の企てた學校の建設を妨害する、青年は種々迫害を蒙つた後、親友の義侠により身を以て比律賓を立去ると云ふのであるが、其中の人物は當時マニラに活躍しつゝ、ありし男女をモデルに取つて、比律賓人もあれば西班牙人もあり、僧侶もあれば官吏もあり、商人もあれば學生もあつて、其小説を讀むと恰も自分の醜い有様を書いたかと思はれそれを氣にする人が澤山ある。さうして其小説の中に西班牙人の政治の悪い事、僧侶の跋扈することなどが巧みに織込んである爲に官吏及僧侶は非常に憤つてリサールが若し歸つて來たらば只ては置かないと云ふ勢であつた。其時の總督はトレルロと云つて、頗る寛大な人であつたと見えて、態々リサールを招いて、お前は小説の爲に大變恨を買つて居るから要心をするが宜しい、當方からも保護してやると云ふので、アンドラードと云ふ若者を特にリサール保護者として附けてくれた。此アンドラードは文學趣味のあつた男で、頗るリサールに敬服し、且リサールを愛して非常に仲よくなつた。それで此二人が或日カランバの近傍にあるマキリン山と云ふ山に遊び、其山頂に登つて標として一本の旗を

立てた。さうするとリサールの敵は、彼は彼山上に上つて旗を立てたが是は獨逸の爲に比律賓を占領した意味であると云ふ噂を立てた。何故獨逸と言つたかと云ふに此時分はカロリン群島で西班牙の舊教の僧侶が獨逸の新教の布教を嫉んで迫害して居る時であつたからして、獨逸名を借りてリサールを傷けやうとしたのである。或は又リサールが謀叛を起して、此比律賓を取る積りである所から旗を山上に立てたのであると云ふやうな説を流布した者があつて、リサールの敵は段々其數を増して來た。

此時比律賓の状態は依然として舊の如く、人民は僧侶と官吏の壓制の下に苦んで居つたが大地主たる寺院と小地主たる人民の間の軋轢も亦頗る強くなつて居つた。それで段々不平を言ふたり或は裁判所を煩はしたりしたが、リサールは此等の人々に教へて、只漠然苦痛を訴へても役に立たぬ、正確なる事實に依つて言ふべきことを言はなければいかぬと云ふので、自ら其苦情の調査を行つた。さうして自分の村に於ては人民は勤勉にして教育を受けんことを望んで居り、政府にも寺院にも忠實である然るに其苦しむる所は斯くくの次第であると云ふので一の報告書を作つて之を公にした此報告書は他の文書と異つて正確なる事實の上に論據を有するので大なる反響を生じた。

再　　び　　外　　遊

そこでリサールは餘り長く比律賓に居ることの危険を思ひ、又母親の眼病も癒つたから再び歐羅巴に行つて研究を續けようと考へ、其年内に比律賓を去つて、先づ香港に行つて亡命の西班牙人バサを頼つて暫く滞在した。香港でリサールは支那の芝居を見て大に之を愛した、支那の芝居は比律賓の芝居によく似て居る、恐らく比律賓の芝居は支那の芝居に倣うて、宗教的の意味を之に附加へたものであらう。

日　　本　　に　　來　　る

香港を去つて彼は日本に來て暫時滞在したが、其時は西班牙領事の懇望によつて西班牙領事館に泊つて居つた。さうして不思議にも西班牙公使も頗るリサールに懇親を表して、公使館の通譯官になつて此の地に留まつてはどうかと勧めた、リサールは日本滞在中に日本語を學び日本の繪を稽古した、彼の記す所によれば日本の事物は大に自分の趣味に適つて居るので長く此國に居りたいと思ふ

氣がしたと書いてある、併し目的は歐洲であるからして横濱から船に乗つて先づ米國に渡つた、此船中外國語を少しも知らない日本の新聞記者と同船して心易くなり倫敦まで一所に行つたと云ふことであるが、或は末廣鐵腸ではなからうかと思ふ。

リサールが日本繪に倣つたスケッチは其ノートブックに幾つも残つて居るが其中に獨逸人の顔を日本の武士に作り換へた繪がある。是は日本が獨逸を學んで而して依然として其内部に元の日本を留めて居ると云ふ意味を寓したものであらうと思はれる。

モルガの古史を寫す

桑港からは市俄古ナイヤガラを通つて紐育に行き、紐育から更に英國に渡つたさうしてドクトル・レヒドルと云ふ人に世話になつて、倫敦に滞在することゝなつた、其倫敦に滞在した家はセントポールのオルガン師でベッケットと云ふ人であつたが、其家に残つて居る話によれば、リサールは此時分類りに手品を研究してなか／＼上手になつて屢々其業を家族知友の間に試みた。そこで其年のクリスマスに、ベッケットはお歳暮として腹語術(ヴェントリロキ)の書物をリサールに送つたと

云ふことであるが腹語術まではやらなかつたで有らう。倫敦に滞在中彼は又レーノルド・ロストと云ふ有名な言語學者と心易くなつた。ロストは香港太守ボーリング以上の大言語學者で其の集めた七十箇國の文典は今も新嘉坡の圖書館に残つて居る。倫敦には『トルブナー』と云ふ東洋雜誌があつて、ロストは其主筆であつたから、リサールは比律賓の諺やなどを翻譯して此東洋雜誌に投書した。さうして傍ら英國博物館に通つて比律賓に關する書物を澤山に讀んだ。其中に彼のモルガの歴史があつたのでリサールは自ら其全部を筆寫して後に之を出版する準備をした。

雜誌『同權』に執筆

倫敦滞在中彼は又西班牙の馬德里で發行する比律賓人の雜誌ソリダリダットにも屢々投書した。ソリダリダットは平等又は同權とか云ふことを意味し、比律賓學生中の有力者が之を創め比島人の聲を西班牙に響かせる機關として居つたのである。其頃比島官憲のリサール一家征伐がますます甚しくなつてリサールの義兄弟が病死したのに、寺院では其墓地に之を葬ることを承知しない此男は平生頗る信仰家で、寺院に對しても善く附け届をしたにも拘らず、斯様な不當なる取扱をした。さう

して同時に死んだ評判の悪い男と寺の墓地へ埋めた。リサールは彼のソリダリダット誌上で其冤を鳴らし、植民大臣に訴願を呈して、此非法を正さうと力めたけれども何の甲斐もなかつた。

モ ル ガ 歴 史 出 版

リサールは千八百九十年に倫敦を去つた、理由は前に言つたロストの家に三人の娘があつて、其一番小さい娘が頗るリサールを愛し、日を経るに従つて益々其愛を注ぐことが厚くなつたのをリサールは感じ、其心根を憐んだが大志を抱く身で有るから結婚するような考へ無く、遂に紹介者のレイドールに其事を告げ心を鬼にして倫敦を去つた。倫敦を去つて先づ巴里に行き、暫く滞在中、倫敦で寫したモルガの歴史を出版した。彼の綿密なる校正のために一度倫敦に歸つて來たが恰度其時原書が外に出て居つて、對照することが出來ず、若干の誤脱が出來た、彼れはそれを遺憾とし後日細かに訂正して卷末に附したと云ふことである。巴里に於ては彼の畫家フワン・ルナの家屢々出入して舊交を溫めた。其時ルナの細君の金蘭簿に比律賓の昔話『猿と龜』の話を畫いた。彼は又此の猿と龜の話が日本の猿と蟹の話によく似て居ることを奇なりとし、兩者を對比して前のトルブナーと

云ふ雜誌に投書した

猿 と 龜 の 話

昔々猿と龜とが有つて、或日バナナの樹が河を流て來るのを一所に見付出して捨ひ上げ、暫くは互に取合つたが、猿が智慧を出して、何處からか鋸を持つて來て二人で之を引切つた、さうして猿は頭の方を取り龜は其根の方を取り、各々之を地に植ゑたが、猿の方は間もなく枯れて、龜の方は着いた、暫くして龜は猿を訪ねて樹の事を尋ねると猿は其枯れた事を話して悲んだ、龜は自分の方では好く着いて澤山の實がなつて居るが木登りが出來ず眺めるばかりだと話した、猿は腹の中で大いに喜び、それでは一ツ自分が行つて取つてやらうと、直ぐに龜に同行して見ると、黄金色の實が房々と成つて居る、猿は素より木登りの銘人、早速木に登つて實をちぎり獨りて甘さうに食べる、龜は下から涎を流して、見て居るが何程頼でも猿は一個も落してくれぬ。

龜は大に憤ほつたが仕方が無い、不圖一計を案じ木の傍に落ちてある椰子の中に隠れて、猿の降り來るのを待つて居た。猿は龜の姿が見えないので、立去つたものと思ひ、木から降つて來ると

椰子が有る、一寸尻毛で其中を搜ると、龜は占めたと其尾に喰付き其先を喰切つた、猿は驚て飛上り、椰子の殻を引くり返して見ると、中に龜が居る、捕まへようすると、首も手足も甲の中に引込めて丸くなつて居る、ウツカリ觸ると又喰ひ付かれるので猿は大閉口、さうして尻尾の傷が痛くて堪らぬ、藥を拵へて着けようと思ひ、藥研を持つて來てゴリゴリやつて居ると、龜は何の音だらうと、そつと甲羅から頭を出して見た、猿は目敏く見つけて飛つき其頭を捕まへて持上げ、海岸へ持て行つて海の中へ抛り込んだ、龜は海が家だから少も驚かぬ、猿さん大きに御苦勞と云つて、笑ひながら海中に影を隠した。

再 度 冤 を 訴 ふ

リサールは巴里から再び、馬德里に行つた、それは更に一ツの災難が兩親に降り掛つて來たからである、其災難は、リサールの家がカンバから追立てられたことである。元來カンバの家は父の所有で無く寺院の所有地を借りて居たのであつた。父は養鶏が上手であつて、澤山の鳥を飼うて居つた。地主の僧は鳥肉入用の度毎に使をやつて我物顔に其鳥を取上げて食ふ。或時七面鳥を貰ひた

いと云ふ使が來た、所が恰度七面鳥が皆死んで一羽しかなかったので、是は種鳥だから御免を蒙りたいと言うて使を返した。暫くすると再び使で、鳥を渡さなければひどい目に會はせるぞと威嚇した。老リサールはそんな威嚇に驚くやうな人ではないから、それは御無理差上ることは出来ませんと斷然斷つた、さうすると果して報が來て其翌月借地料を一倍に引上げられた、それを默言つて拂ふと其の翌月は又倍になると云ふやうなことで到頭我慢にも拂ふことが出来ないやうになつたそこで地代の支拂を拒絶しなければならぬやうな事になつたが、坊主は大に怒つて之を官憲に訴へた。其頃同様の無法がそこらに澤山行はれて居つたさうで、多くの農民はリサールの父の強硬な態度に勢づき地代の支拂を拒絶するようになった。其時の太守はワイラー將軍と云ふて、後に玳瑁に行つて大虐殺を行ひ米西戦争を惹起した亂暴で一名『肉切りワイラー』と云ふ位な男だから太い百姓めらだと、忽ち一隊の兵をカランバに繰込み、地代を拂はぬ奴等に盡く立退を命じた。リサールの父其他の村人は據なく之を高等裁判所に出訴したが、官憲は總督の命を強制し、約十五萬ペソに當る財産を破壊したが幸にしてリサールの家は湖水の附近なるロスバニョスと云ふ温泉の出る所に地面を持つて居つたから、其處に移轉して行つたが多くの者は家屋を奪はれ途方に暮れた。

リサールは馬德里に行つて植民大臣に此事を訴へたが遂に何等の効能もなかつた。

決闘の申込み

此時マドリッドでレタナと云ふ男が新聞に投書して、リサールの父は初から家賃を支拂はないのだと言ふた、リサールは大に立腹して、豫て決闘は殺人同様なりと云ふ持論を懷いて居つたにも拘はらず、此レタナに向て決闘を申込んだ。彼は大に恐れて自分の言ふたことを取消してリサールの怒を宥めた。屢言ふが如くリサールは學者にして闘争等を好まない人であるが、正義心の強い人であるからして、許すべからざる場合には奮然として起つ人であつた。恰度此時分にアントニオ・ルナと云ふ後に將官にまで陞つた軍人があつたが、或場所て或婦人に對して大なる無禮を働いた、リサールは之を見て打棄置く可らずとし婦人に代り決闘を申込んだ。前のレタナは劍術に於ても射撃に於ても、到底リサールの敵でない弱い男であつたが、今度のルナは軍人であるから、劍術も射撃もリサールよりは上手である、それにも恐れずリサールは毅然として決闘を申込んだがルナの方で其過ちを悔いて事なく相濟んださうである。

香 港 ま で 歸 る

馬德里に暫く滞在の後、リサールは千八百九十一年巴里に行き、巴里より白耳義のガン市に行つて此年の大部分をガンに費した、ガンは巴里よりも古い大都會で日本の京都のやうなところ有る。此頃奥太利のブルメントリット博士はリサールに書を送り、マレーポリネシア語を研究し其語の入用ある和蘭に永住した方が身の爲に善くはないかと忠告した。然るにリサールは其父母を思ふことが深かつたので、此忠告に従ふことが出来無かつた。此滞在中リサールは曩に著した小説『ノリ・メタンゲレ』の續編たる『フィリバステリスモ』と云ふ小説を書いた。是は四年前に歸國した時稿を起し足掛五年で出来上つたものである。此の小説は前編にも増して上出来て有る。其小説を書上げた後に同年秋香港に歸つて来て、眼科醫を開業して暫く香港に住んだ。所がリサール一族の迫害尙罷まず妹の子供が虎列拉で死んだ時に惡病だから急いで埋葬したのを種にして、寺院から訴へられ夫婦とも故郷を追出され、他の地方に流寓して居ると云ふことを聞いた。それから又兄のバシアノは如何なる罪であつたか前年ミンドロに追放され此年やうく歸つて歸たのに、更に又他の家族の

一人が追放の刑に處せられんとして居ると云ふことであつた。すべて是等の迫害はリサールの小説に原因するものであつて、僧侶及官吏は何とかしてリサールを再び比律賓に誘き寄せて、ひどい目に會はせてやらうと云ふ考を有つて居つたから、彼が香港に來たのことを聞いて。又一の惡計を企み、母が十五年前まで用ゐて居た名前を勝手に變へたと云ふので姓名詐稱の罪に問はんとして、妹までも併せて裁判所に引張り出した。

リサールの父母は、これがリサール誘引の目的であることを知つて、密にリサールに警告した、そこでリサールは此報を聞いても香港からマニラへ出掛け無かつた。香港でリサールの最も心易くしたのは彼のバサであつた、バサは西班牙人でありながら寺院の跋扈に憤慨して居る人で、屢々一枚刷りの文書を發表して僧侶の横暴を攻撃した、僧侶はバサの背後にリサールが居ると思つて益々リサールを憎んだがリサールは毫も之を意に介し無かつた。然し此有様では到底故郷に歸ることもむつかしく一家一門の苦痛も見るに忍びずと考へ國外に永住の地を求めようと思ひついた。恰度其時英吉利人のダルリンブルと云ふ人と心易くなつたが是は香港に於て有力なる醫者であつて、北ボルネオ會社に關係のある人である北ボルネオ會社は恰度其時分亞米利加人の會社を買收して、今の北

ボルネオ政府を立てた時であつたから、リサールに勧めて彼の地方に比律賓村を拵へては怎樣だと言つた。そこでリサールは翌年の春自から北ボルネオまで出掛けて、細かい調査をした、其時の計畫はサンダガン附近キナバタンガン山下に廣い地面を借受け比律賓名物の麻尼拉麻、カカオ、椰子甘蔗等を植ゑやうと云ふので有つた。

自　ら　死　地　に　入　る

千八百九十二年にはリサールの家族の一部は香港に來て同居するこゝとなつたが、父母は香港に來ることが出来ない、然るに其時分に比律賓總督が代つて、デスプホールと云ふ人が新たに總督になつてやつて來た。此人は頗る自由寛大なる人物との評判で、着任後、其治績大に見るべきものがあつた。リサールは之を聞き大に喜び漸く比律賓人が助かる時が來たと思ひ、デスプホールに一書を送つて、大に其德を稱し、太守若し、比律賓の状態を改良せんとの慈悲心を有し、島人の進言を容るるに吝ならざれば、自分は進んで相當の御用を勤めやうと申し出た。デスプホールは悪い人ではなかつたかも知れぬが、其左右にリサールを穿れんとする僧侶官吏等が充滿して居たから、時こ

そ來れりと考へて、デスプホールに勤め、欺いてリサールを呼寄せる手紙を書せた。勿論其手紙には生命の安全を保證すると云ふ文句を書入れた、リサールの賢明なる之に欺かれたのではないが、愛國の情禁ずる能はず危険を冒して歸國し、同胞の苦を助けんと欲し香港の家を閉し妹をつれてマニラに向つた其時に萬一を慮り、父母に寄するの書を作り又別に比律賓人に與ふるの書をも作つて香港の友人の手に殘して置いた、其父母に寄する書は左の通りで言々皆金玉で有る。

父母に寄するの書

リサール

御兩親様に申上候、此度の歸國は、御二方様を御慕ひ申上候私の衷情より起り候ものにて、其結果如何は今後發生する事實によつてのみ判斷せらるべき次第に御座候、然し前途の吉凶孰れに相成候とも、私は悔み申さず、唯斯くする事が私の義務と信じ候故、斯く致し候ばかりに御座候、從來私の所爲が御二方様に如何ばかり御難儀相掛候やは、私も熟知罷在候、然し毫も其所爲を後悔は不仕私の爲せし所は比律賓人としての義務を果し候までなれば、萬一再び過去の數年間の日月を繰り返し候ても、矢張り同一の行道を取るまでに御座候、此度私は一身の危難を顧みず歸國

致し候が、此事たる、罪障消滅の爲には無之（私は平生の行何人に比するも無罪過なるを信じ申候）唯年來斯くせざる可からずと人に説き來り候ところを自ら實行し、義務遂行の手本を示すまでに御座候。

凡て人たるものは義務と主義の爲には一命を惜しむ可らざるものに御座候、私は從來比律賓島の將來につき發表した諸の思想を今も確と保持罷在候、而して此事の爲には死も甘しとするところに御座候若し私の一命が正義と平和とを此島に齎し候爲に相成候得者、一層喜びて死し可申候。右の如く御座候故、私は多くの罪無き人々を救はんが爲に、此度の危険を冒し申候、我一族多勢の甥姪、朋友の有する多勢の子女達及び朋友以外の多數の人々、皆罪無くして痛苦を受け居るが現今の有様に御座候吾は何者ぞと自問致し候得者、妻子無き單獨の壯夫、世事の表裏に於て略通曉致し居る人間と答ふべく候、過去に於て私は幾多失望致し候事有之、而して將來は甚暗澹に相見え候、若し比律賓の現状打破せられ光明の此暗を照することなく候はんには、將來も絶望に終り可申候、而して他の一方を眺め候得者、希望と功名心に富める人々澤山に控へ居候、此人等は私死し候得者大満足大喜悅にて多分唯今苦しめつゝある多數の善人を釋放致し可申候、此の人々

の憎惡は大部分私の此世に在るが爲に御座候、従つて御兩親様及私の親族等の此世に在ることが彼等に取り厭はしきことに御座候。

されば若し此行不運に終り候はゞ、私は潔よく此世を去り、御二方様の御難儀を除き可申候、私無き後は何卒故郷に御歸り被遊、安樂に御暮し被遊候やう祈望仕候。

返へすゝも御二方様の御事は私命終の其瞬間まで心に掛け、何卒永く御好運に幸多き日を御送り遊ばされんことを念じ居り可申候。

リサル の 投 獄

香港駐在の西班牙の領事はリサルに旅券を交付すると同時に「宗教及官府に對する罪人は首尾よく陷穽中に落ちた」との電報を總督に向けて發した。リサルはマニラに着するや直に總督を訪問し、施政上に關して意見を開陳し、冤枉に泣く一族の爲に辯解し、總督は略彼等を釋放するの約諾を與へた、リサルは尙進んで總督との間に十分の理解を得やうとしたが、丁度其時舊教の大祭が有つて總督が忙しいので暫く田舎を旅行して其の手隙になるのを待つことにした。

此時マニラには舊教徒の嫌ふメーソン組合が、段々盛になつて其會堂も建てられて居た、リサールは素よりメーソン互助組合の會員であるから、其會堂の集會にも出入し、旅行の道伴としてメーソン會の幹事二人を同行した、官憲僧侶の方では是ぞリサールを捕縛の口實を作る好機會と、密かに探偵を一行に附して一舉一動を偵察し、其交る人々の家庭の有様を調べ、秘密文書の有無を取調べた。

リサールがマニラに歸つて總督に面會すると彼は第一にボルネオ移住の計畫を抛棄する考を有せずやと質問した、リサールは地主と借地人の間の不和を指摘し移住策の已む可からざる言を説いた、之を聞いた總督は俄然態度を一變し手文庫から一個の紙片を取出し、是に覺が有らうと屹となつたリサールが其の紙片を取上げて見ると『惘然なる和尚連』と題するチラシで有る、是はバサの家に居た妹が荷造りの際何氣なく其處に在つた紙片を手荷物の中に押込んだものに相違無い、總督はリサールに向ひ是は税關吏が汝の妹の手荷物中から發見したもので有る、此の如き、書類を密かに輸送するからには汝等は今猶不逞の心を藏して居るに相違ない此不屈者と云ふので、リサールの辯解も聽かばこそ副官に命じサンチャゴ城の政治牢獄にリサールを投じた。

ダビタンの配流

リサールを獄に投ずるや否や總督は其官報全面を費してリサール投獄の已むを得ざることを述べ、之を比律賓全島に配布し、同時に香港市中に散布せしめた、香港の英字新聞は大に總督の卑劣手段を攻撃し、マニラ駐在の英國領事はリサールの如き學者を英國政權の及ぶところから誘びき出だし故無く之を投獄するは西班牙の一大不名譽なるを指摘し、總督に反省を求めたが彼は空嘯いて顧みなかつた、而して暫の後リサールはミンダナオ島の北海岸に在るダビタンの僻村に配流せらるゝ事となつた。リサールの流されたダビタンと云ふ處は、今日でも平常は沿岸航路の船が寄港せぬ位の小港で、其近傍に村落は有るが住民は程度の極低い土人である。但し此處にもゼスユイット教會の寺院があつて當時は若干の西班牙人が居り尙又近傍を支配する郡長が居た。リサールがダビタンに着いた時、郡長の世話になるか寺院の世話になるか二者一を擇べとのことであつたが、寺院はリサールを迎ふることを拒絶したので、郡長カルニセロの世話になり、一先づダビタンに落付き、暫くして、其所持金を以て近傍のタリセー村に小さき地面を買ひ萱葺の家を建て眼科醫を開業して永住

の計をなした。所が彼が眼科の名人たることは比律賓以外にも聞えて居た爲に屢々富有なる病人は遠方から尋ねて來て治を乞ひ澤山の謝禮を置いて行く、中に一人の英人は五百ペソの大金をリサールに贈つた、リサールは其以前から近傍の兒童二十人ばかりを集めて學校を創め、英語西班牙語及び數學を教えることを日課として居た、但し據るべき書物が無いので教科書もすべて自作であつた彼は又其傍に兒童と共に昆蟲を蒐集し、兒童等に教えて標本を作らせ、それを獨逸の博物館に送り其の返禮として書物と科學教授の材料とを貰つた、此時リサールが集めた爬蟲の中には新種があつて、リサールの名を付けられて居る、ドレスデンの博物館長ドクトル、ヘラーと云ふ人は大にリサールを敬愛する人であつて、遠方から此ダピタンの流人の爲め種々の便利を與へた。

配 流 中 の 仕 事

すべて偉人傑士は如何なる處に居つても必ず其知徳を發揮し、同胞を利益する仕事をなすものである、近くは我吉田松蔭西郷南洲が幽閉流謫の中に爲した仕業を見ても分る、リサールも亦其の通りで第一に右の學校を建て第二にジシユイット寺院の坊さんが竹の梯子段から落ちて怪我をしたのを

見て、直ちに學校の兒童を率ひ、貝殻を集め、之を焼いてモルタルを作り竹階を石階に改造した。第三には同じく兒童と共に小川に石堰を築き其水を引いて家内の使用に供し其餘りて游泳稽古の溜池を作つた海には鱈が居るから。幼時の師サンチエス法師之を聞き、マニラから來訪の時土產として、測量機械を持つて來た、リサルは直にサンチエス其他の僧侶と共に近傍土地を測量して一層大なる水道を造つた。第四には彼の英人の患者が贈つた謝禮五百ペソを村に寄附して街燈を點じ文明都市の雛形を拵へた、水道は、後日米國の比律賓政府の手に收め地下水を掘つて水量を増し、完全なるものにしてリサル記念の一事業とした。第五には又山間や林中を徘徊する序でに古跡を探り此地方の先住民モロ族が基督教に化せられたことを證する遺物をも蒐集した、第六には學校の生徒に地理を教えんが爲に、サンチエスと共に比律賓全體の凸面圖を平地上に作り創めた、其ミンダナオ島の部は出來上つて、今も其處に残つて居る。第七はジシュイット寺の尼僧禮拜所の祭壇製作で、リサルは自から祭壇の廻りを飾る所のカーテンの畫を書き、其序でにマニラから油繪の繪の具を取寄せて尼さん達に繪畫を教えた、それから本尊のマリアの像は聖女が蛇の上に立ち蛇は林檎を啗へて居る形である、其首は新しくマニラから輸入し、其他の部分のリサルが尼さん達と共に

拵へ、リサール自ら立像の足と林檎と蛇の頭とを彫刻した、第八に此地方の幼稚な漁魚法を改良する爲に、故郷カラムバから網を取寄せて漁具の改良を行つた。第九に又マニラ麻の輸出を奨励して麻引機械を亞米利加から輸入して、自らエゼントとなつて之を擴めた。

リサールは斯くの如くして、地方を改良する間にも其平生の嗜みを忘れずして『予の隱栖』と云ふ長篇の名詩を作つて近傍の風景を賞した、其詩の題目となつた處は、後に米政府から買上げて公園となつて居る菅公の都府樓にも比すべき美談で有る。

流 人 の 結 婚

流人ではあるがリサールは眼科醫で相應の收入が有るから金には困らぬ、其所へ又不思議にもマニラの富籤が當つて中々金持になつた、或時マニラから來た船が檣頭に何か旗を立てゝ入港した、郡長は大富の御出だらうと思つて迎に出ると、何ぞ計らん富籤が自分とリサールと今一人の西班牙人にと當つて居ると云ふことで、大喜び大笑となつた。

其よりも不思議なるは此ダビタンの片田舎でリサールは圖らず終生を契る婦人に出會ふた、始めリ

サル香港で開業中患者の一人に米國人トウフアーと云ふ人があつた、此人は香港の消防隊に屬しポンプ技師を勤め、優しい勇敢な人で曾て溺死せんとする西班牙人を救つて義勇賞牌を贈られたところがある。細君も亦同情の深い女で、或愛蘭婦人が夫に死別れ、大勢の子供を抱えて困つて居るのを見て其一人ブラッケンを養女にした。リサル歸國後此米人の眼病が益々悪くなり香港の醫師では治らない、そこで其娘が比律賓の名醫に今一度診て貰つたら好からうと勧めたので、トウフアーも其氣になり妻と養女とを伴れてダビタンに來た、暫く滞在して居る内に、此ブラッケンと云ふ娘がリサルを愛しリサルも遂に其心にほだされ、且最早自己の郷國に對する務を終つたと云ふ考から結婚する氣になつたが、正式に結婚するには寺の許可が入る、ゼシユイト寺のオーバク和尚リサルに勤めて懺悔文を書かせ、本山に送らうとして居るところに急に變事が持上つて中止になった。何故中止したかと云ふに彼の盲目のトウフアー氏はダビタンに來る途中マニラで其生みの娘を西班牙人に嫁し養女の方を杖柱と頼んで居たのに此處で、又娘がリサルに嫁すると聞いて浮世をはかなみ剃刀を以て自殺を企てた、幸にリサルに發見せられて抱止められた爲生命は無事であつたが、結婚は見合せねばならぬ、ブラッケンは養母と共に急に盲目の父を香港に伴れ歸つた。

薄　命　の　佳　人

リサールは實は其以前眞實の愛人を持て居た、レオナラ・リベラと云つて、彼の従妹で有る、其時年僅に十五で娘もリサールが大好きで有つた。リサールは歐洲遊學前此女と結婚する考で有つたが兩人共餘り年少なので父母之を許さず、リサールは心を後に西班牙に出掛けたのであつた。所が其娘の親達はリサールが甚しく僧侶から嫌はれて居ることを知つて、リサールに嫁するのは危険だと思つて娘の心を他に轉ずる工風をした。リサールは西班牙から度々娘に書を送つたが父母はそれ隠して娘に與へず、娘が手紙を出さうとすると之を發送せず藏して置く、其所で二人の交通が絶えて互に疑つて居るところへ或英人技師から此娘を懇望して來た、兩親は是れ幸と百万娘を説き勸めて英人の妻にした。娘はリサールが他に心を移したものと思ふて父母の命に従つた。リサールは西班牙から歸つて來た後娘は此顛末を知り大に泣き悲み、せめてはリサールの手紙だけでも貰ひたいと父母に請たが、人の妻たるものが然様なものを持つは宜しくないと叱られ、それなら手紙を焼いて灰にして渡して下されと頼んで、やうやう其灰を貰ひ、之を小さな銀の箱に入れて傍を離さ

ず持て居たと云ふ事であつたが落膽の餘りか此女は間もなく病死してしまつた。

リサールの第一小説ノリメ・タンゲレの中に出るマリアクララと云ふ薄命の佳人は材を此娘に取つて書いたものであつて、リサールは自分の事を自分の小説に書いたので有る。

斯く結婚に不運なるリサールは今復た僅に愛情の端緒を解かんとしたブラッケンを失つて、再びダビタンに淋しき月日を送ることになつたが、幸にしてトーフアーの心が香港に歸つて後に柔らいて養女のリサールに嫁することを許したので、彼女は再び比律賓に來り先づリサールの父母を訪ひ、然る後にダビタンに來た。そこで又再び結婚の手續をすることになつたが、此時は新法律が發布され僧侶の立會を要せずして結婚が出来るやうになつて居たので、父母の許諾を経て、二人は遂に夫婦になつた、間もなくブラッケンは懷孕したが月足らずの出産で其子はどうも育た無かつた。

リサール妻を疑ふ

此ブラッケンはなか／＼信心家で、屢々寺院に參詣する、其參詣が餘り頻繁なのでリサールは不圖心に疑を生じた、考へて見れば自分に對する警戒が極めて嚴重なるにも拘らず、此女だけは何時も容易にダビタンに來ることが出来る、是れ或は坊主等の廻し者には非るか、油斷はならぬと思つた

ところから暫くは夫婦の中が甚だ冷やかであつた、所が或時リサールは戯に背後からブラッケンを嚇かした、ブラッケンはキャツと叫んで逃るはづみ、うつ伏しに倒れ頭に大怪我をした、早速手當して治したが、リサールは之を氣の毒に思ひ其後は妻に對して元の如く愛情を注ぐことになつた。ブラッケンの外此配所を尋ねた女は母と姉妹だけで官憲の許しを得時々ダビタンに來て逗留した此時分母の眼病が復た重くなつたのでリサールは一生懸命に治療したが、母はリサールの言を守らず養生を怠るところから其眼病は遂に全治に至らなかつた リサールは此時初めて醫者は自己の骨肉を治療す可らずと云ふ格言に深意あることを悟つたと言つて居る。

カ チ ブ ナ ン に 賛 成 せ ず

斯くして足掛四年の歳月を送つて居る内に、リサールの友人は二度までも彼を救ひ出さんことを計畫した。彼に向つてそつと船を海岸に近けるから、小舟で漕ぎ出して海中に飛込め、さうすると溺れる人を助るやうに見せて、香港まで連れ退かうと云ふことであつたが、彼は左様な策略で脱出することを好まない、二度とも之を謝絶した。ところが此處にカチブナンと云ふ秘密結社が有る。マ

ニラの或船會社の書記ボニファシオと云いふ少年リサール入獄の前から佛國革命史を讀んで大に感奮し、革政は血を流さねば成就せずと信じ、リサールの入獄を機としてより不平家を語りひ叛亂を起す企をした、此カチブナンが四年間に頗る發達して其黨員全島に瀰漫し、何時にても事を起し得るやうになつたが、首領たるべき人が無い、ボニファシオはリサールの人望の盛なのを見て何とかして彼を首領に戴かんといろ／＼手段を廻らしたが、リサールは之に應じない、遂に一人の仲間眼の患者を連れさせてダビタンに遣り、密にリサールを説かせたところ、リサールは平和手段を以て改革を爲し遂げんとする考で有るから斷然之を拒絕した、使が失望して歸りボニファシオに其趣を報告したらボニファシオは眞赤になつて、腐れ學者の臆病者何の役にも立たぬ好し最早彼を引當にはせぬと怒つたさうであるが、官憲の方では矢張りリサールを疑つて居た。

配處より從軍の願

斯くする内に彼の塊太利のブルメントリット博士から手紙が來た、其中に昨今西班牙は玖瑪の叛徒を征服中であるが、其兵士中に多數の病者を出して、軍醫が缺乏して大に困つて居ると云ふことが

書いてあつた。リサールは之を見て大に心を痛め、出来るなら從軍して一人でも其病人を助けたいと考へ總督に向つて其旨を願ひ出でた時の總督ブランコはリサールの本心を疑ひ、容易に之を許さ無かつたが、西班牙も好く困つて居たと見えて遂に其願が聞届けられた。リサールは大に喜んで大急ぎで其仕事を取り片付け、妻と幼い姪とそれからダビタンの若者一兩人を連れて久し振りでマニラへ歸つて來た。

此時彼のカチブナンは島中諸所で騒動を起したので、マニラの政府は斷然之を鎮壓することに決し先づ其の會中の重なる人間を捕縛中であつた、坊主達はリサールをも其仲間羅織しやうと力めたが素より潔白のリサールであるから、之を罪する口實が無い、彼の乗船は西班牙に向つてマニラを出發した、然しさう云ふ不穩な際であるから歐洲に到着するまで船中に如何やうな事が起るか分らぬ、同船したマニラの富豪ロハスは新嘉坡で脱船して行方を晦ました、さうしてリサールに傳言し早く船を去れと勧めた。是れと同時に倫敦に在るリサールの友人は、リサールが御用船で西班牙に來ると云ふことを聞いて、時こそ來れり彼を救ふべしと、數人打寄りて相談し、船が英領の港に碇泊し居る間は英國の法律の下に在るから人身保護令狀の力を以てリサールを船から取出さうと計畫

した。そして其の計畫は新嘉坡で實行される手筈で有つたところ、不幸にしてリサールの乗船が西班牙の兵士を載せ御用船の旗印を立てゝ居つた爲に、英國法を適用することが出來ず、船はリサールを載せたまゝ西に向つて出帆した。

リ　サ　ー　ル　又　捕　へ　ら　る

一方マニラではリサールを逃したのを残念に思ふ官吏僧侶は、ブランコに代つて新たに總督となれるボラビエハに向つて運動し、カチブナンとの關係を捏造してリサールの捕縛を迫つて已ま無い。而して其運動は段々猛烈になつて、之を許さなければ總督自身の地位にも關するやうな有様になつたので、ボラビエハは心弱くもリサール捕縛の命令を下し、其命令は彼の船がスエスの港に居に時に到達した。然し途中で上陸させる譯には行かぬから、船は尙西行し西班牙のバーセロナに着いた。西班牙政府は總督からの電請があるので、直ちにリサールを捕へてモントフィ城と云ふ政治犯人を入れる牢獄に投じた。所が奇なるかな其牢獄の長官が四年前にリサールを欺いて捕へた前總督デスプホールであつた。斯くしてリサールは折角人の爲め世の爲めに盡さうとの願ひも水の泡となり、再

びマニラに送り還されて、千八百九十六年（明治二十九年）の十一月三日に再び比律賓の土を踏むことになつた、さうして相も變らず元のサンチャゴの牢内に打込まれた。

死 刑 の 宣 告

斯うなれば彼の運命は既に定まつたのであるが、惡人等は更に證據を得やうとして、リサールの兄を捕へて拷問にかけ、カチブナンに關係ある事を言はせやうとした。ところが兄は如何に拷問しても無實の證言を與へない、三日の間責められて遂に氣絶するに至つたが矢張り注文通り種を與へぬそこで仕方がないから總督は軍法會議に下してリサールを審問することになつた、リサールは其間にも自己の不名譽を救はん爲め、十二月十五日に『比律賓の同胞に對する宣言』と云ふものを書いて之を郷人の間に送つた、其書中に自身は決して何處までも暴力を以て事を爲すと云ふ考を有たぬ、比律賓人を救ふのは、只文明の教育を廣め、其の精神を改造するにあるとの事を言ふた、然るに裁判は進行して十二月二十九日に至つて遂に死刑宣告を受けた其罪の第一はリガフィリビナと云ふ結社を拵へて謀叛を圖る事、第二はカチブナン煽動者となつて叛亂を起したと云ふことであつた。其

裁判は辯護士を附することを許さず、只青年士官の内から一人の辯護人を選べと云ふことであつた。そこでリサールが選出したのが偶然にも曾てリサールの保護者として又朋友として忠誠を盡したアンドラードの弟で有つた、此青年將校のアンドラードは兄の關係から出来るだけリサールを辯護したが、罪は初めから定めてあるから其の辯護は何等の効力も無かつた。

此審問の間リサールは常に後ろ手に縛られて地上に引据えられ、彼を憎む西班牙人は群を爲して其周圍に立廻り、罵詈褻弄の語を浴せ掛けたが、リサールは平然として少しも惡びれたる様を見せなかつた。

骨　肉　の　別　れ

宣告が終ると彼は又直ちに獄屋の中に入れられ、死刑執行まで二十四時間の猶豫を與へられた。其間に彼の家族は總督の屋敷に行つて、頻に赦免を嘆願したけれども、嚴しく拒絶されて受付けられず、只母と姉妹と妻のみが面會することを許された。彼等は泣く／＼獄屋の中に行つて最後の別れをした。一説に此時彼のアテネオでリサールを教へた和尚がリサールの彫刻聖心の像を携へて彼を

訪ひ、熱心に説勸めて懺悔の文を書かせ、ゼシユイット宗の破門を許し、ブラツケンとの間に正式の婚姻式をなさしめたと云ふことである此事の實否よく分らぬが、ブラツケンと神前で誓を爲したは事實で有る、されば恐らくリサールは爲すべきことを爲し果てたと云ふ考から、あとに残つた父母兄弟等の難儀を幾分か輕める爲めに懺悔の文を書いたであらうとの事である。兎に角彼は是等の人々に面會して長き別れの言葉を交した。其時彼は獄中で食物を溫める爲に使用した石油ランプを筐として妻に與へ、英語を以て極く小聲に其中に何か這入つて居ると知らせた。

リ
サ
ー
ル
殺
さ
る

程無く其夜が明けて月三十日の朝になると、一隊の兵が來てリサールをバグンバヤンの刑場に連れ出した。此日リサールが處刑せらるゝと云ふことを聞いて、西班牙人は僧俗共に大に喜び多數の人が其刑場の周圍に群集して、憎い土人がいよく殺されると言ふて笑ひさゞめて居つた。ひどい奴は辨當を持つて塀の上に登り、酒を飲みながらリサールの處刑を見物したと云ふことである。

此時不思議にも或一人の寫眞師が竊に處刑前の光景を寫し撮つて保存されて居るから彼が如何なる

姿勢で撃たれたかと云ふことも能く分る。記録によれば射撃の兵士は態と皆比律賓人を用ひ其後ろに大部隊の西班牙の兵が配列され、若し土兵がリサールを撃つまいとしたら、土兵諸共撃殺さうと云ふ結構である。リサールは歐羅巴旅行中に買求めたモーニングコートを着、山高帽を冠つて後ろ手に縛られて、現に彼の記念碑の在る處から少し右手に在つて街燈の傍らに立つた、さうして最後の希望として、謀叛人とせず正面より撃たれたいと云ふことを願ふたが、處刑の士官之を許さず、何處までも謀叛人扱ひにして背後から射撃せしめた、彼は後ろ手に縛された手を舉げ、指を以て心臓の位置を指示しつゝ、ドンと放たれた一齊射撃の銃丸を受けてバツたり倒れたが、前に倒れずして後に倒れ、西班牙人の方に顔を向けたのは、恐らく何處までも謀叛人たらざる事を示す最後の一心であつたらうと云ふことである。

死 後 の 光 榮

斯の如くにして比律賓に生れた稀有の天才、多藝多能の學者にして而かも愛國の志士たるリサールは享年僅に三十六歳で憐むべき最後を遂げたのであるが、何ぞ圖らん其時を去ること未だ一年半な

らざる千八百九十八年五月には彼を虐殺した西班牙人は、米國人の爲に此島から追拂はれる運命になつて、カビテの砲臺を攻撃する米國軍艦の砲撃は此バグンバンの刑場に祝砲の如く轟いたのである。リサールの刑戮は比律賓人の心に甚大の刺激を與へ、アギナルド以下多數の青年が干戈を執つて西班牙人に抵抗して、世界に比律賓人の寛枉を訴ふると共に、又比律賓人の精神氣魄を發揮した、其顛末は人の好く知る所で有る。彼死するの翌々年から其刑死の日は比律賓全島に於て國祭日として記念せらるゝことになつたのは決して偶然に非ず正に然るべき原因が有るので有る。實に欽慕すべき俊傑の生涯で有る。

リ　　サ　　ー　　ル　　の　　父　　母

比律賓の愛國者ホセ・リサールの生涯は、初號以來六回に涉り略ぼ之を説き了つた、讀者若しこれによりて南隣の島國にも非凡の天才誠實なる改造家の有つたことを知り、斯る英物を有する比律賓人の侮る可らざるものなるを覺られたならば、記者の目的は既に達したと云へる。

然し大凡英物は突然としては生れず、其血縁者中に、必ず多少類形の人物あるを常とする。リサ

ルに於ても其父フランシスも羅旬語及び哲學の教育を受け（日本にて言へば舊幕時代の漢學の如し）其性質は剛直で僧侶及官憲に抵抗するの勇氣を有つて居た。母は父にも優る學問才藝を有し、家事の外に商事をも經營し、其の氣象は男まさりて屢々官憲の毒手に苦められしも好くこれに堪えた、米國が比律賓を領有せし後二萬五千ペソを以て其小説ノリ・メ・タンゲレの原稿を買取らうと申出た時、其金を謝絶し、其後又議會で恩給を與へようとした時も嚴然として之を斷はり、我家の法は報酬の爲めに愛國を爲すを許さずと云ふたと云ふ。古來の史上を飾る烈女の風采が有るては無いか此母は信心家であるからリサールの言動を喜ばず、其前途を心配し、時々お前のやうな剛情者は終を善くしないぞと戒めたさうで有る。

兄　　バ　　シ　　ヤ　　ノ

リサールの兄バシヤノは大正七年記者が比律賓に行つた時猶健全で農業と鑛業に従事して居た、クレーグ博士の説には此人は才こそ無けれ人物はリサールよりも大なるところが有るとの事て有る。早く田野に隠れし爲め人に知られないが、リサールの最後に捕へられし時嚴しき拷問に遭つて屈せ

ず遂に其弟を陥るゝの言質を官憲に與へず、放されて歸つた後同郷の青年等リサールの爲めに憤激し、城中に打ち入り兵士を殺しリサールを奪取らんとした時、靜かに其銃器を點檢し、不完全なる點を指摘して、事の成るべからざることを説き其暴舉を制止したと云ふ事である。其後米軍がマニラに上陸した時土民等所々に蜂起するや、彼は衆に推されて一揆の長となり、直にラグチ全州を占領して自治政を布き其執政の間大に農業を獎勵した、比律賓全洲米國人に平定せられた時、米人政府は各地方の自治體に其事業報告を提出せしめたところ、バシヤノの報告が群を抽いて條理整然たるもので有つたと云ふ話である。

リサール夫人の其後

リサールの妻ジョゼフィナ・ブラツケンはサンチャゴ牢獄で夫に別るゝ時、リサールから所持金は皆官に取られるが今後何様して生活する考であるかと問はれ、英語を教へて其報酬で生活するつもりと答へた。夫の死後彼は香港の養父の許に歸つたが間もなく父にも死別れ、寄る邊無き身となつた時、比律賓セブー島人ヴィセント・アバドに思はれ、其男に再嫁し、セブーに歸つて英語を教へ

米國時代になつてから官立學校の英語教師となつた。其セブにて英語を習つた少年の一人がリサールの遺志を繼承し米人を助けて比律賓の改造を成しつゝある現下院議長オスメニャ氏あるは奇なる運命の出會ひと云ふべきで有る。

傑　士　の　墓

リサール刑死の後其遺骸は直に市内のバコ墓地に埋められ、數日間は兵士立番して土人の近付くを許さず、其埋めたる所も人に分らぬやうにして有つたが、リサール崇拜者の一人が埋葬の際竊にリサールの名を逆さに彫つた小石版を投入れて置いたため、後年探り當てゝ掘出し、遺骨を甕に入れて保存して有る、改葬後の墓も故意に姓名の頭文字を逆にして有る。

リ　サ　ー　ル　祭

リサールの處刑の日十二月三十日は比律賓全島の祭日で、各地ともに毎年美麗なる出し、屋臺を引出し中々の賑ひで有る。千九百五年の祭日には米國有名の政治家ブライヤン氏が來合せて一場の演

説を爲し、大に故人を稱讃した其一節に「リサール博士の生涯より吾人の學ぶべきところは、氏が好く學者の本務を盡したる點に在る、世には幸福にも多大の學識を修得しながら、同胞の爲めに一事をも爲さざる人が有る、氏の示した手本は比島國の人民幼と無く老と無く苟も氏の傳を讀む者に向つて絶大の教訓を與へる」と云ふ言葉が有つた。

バクンバヤン虐殺

リサール刑死の後二週間リガフィンピナ協會の會員十二人も同じ場所にて死刑に處せられたが、富豪フランシスコロハスは刑場に引出されると失神し、衣囊からハンカチーフを取出し、寺院に參つたつもりで、之を地上に布き、其上に膝を突いて祈禱しながら撃たれた、サルバドルと云ふ老人は拷問の爲めに身體の自由を失ひ、脆まづくことが出來ず、草の上に臥したるまゝ射殺せられた。

カチブナンの叛亂

カチブナンの叛亂は千八百九十六年八月二十六日カルーカンと云へる所で先づ火蓋を切り其の四日

後にサンファンデルモンテと云ふところで激戦があつたが一揆方破れ、隊長ヴァレンズエラは捕へられリサールより先きにバグンバヤンの露と消えた、然るに一揆は却つて諸洲に廣がり就中マニラに接近するカヴィテ州が最も盛んにカヴィテの少壯村長エミリオ・アギナルド氏推されて叛徒の司令官となり、勢猖獗を極めた。然し兵器少く彈藥は續かずして戦ふことが出來ず政府方も兵數少くして之を鎮壓する能はず、遂に叛徒に和議を申込みビアクナバトといふところで條約を結び、アギナルドは現金四十萬ペソを受取つて重立ちたる部下と共に香港に立退いた。其後キューバの事で米西の間に兵端が開け、米軍がマニラを攻撃するや香港の米領事が周旋してデウエーの艦隊に屬する御用船でアギナルドの一類をマニラに歸還させ、土人軍を募つて内外面から西班牙軍を攻めさせた。此時米人がアギナルドに比島獨立を約束し乍ら實行しないと云ふので、久しい間此島人と米人との間に爭論となつて居た。

リサール最後の詩

リサール刑死の後、淋しき骨肉の人々は密に打寄つて彼の石油焔爐を取出し油を覆して中を改める

と、小さき紙片を細かく疊んだのが油壺の一隅にひつ付いて居る、これを剝がして展げて見ると我が最後の暇乞と題する一篇の詩が、美しい細字で紙の表裏に認めて有つた、此自筆の詩は今一ツ有つて如何なる手段を用ひたか友人の手に渡つて居つた、其詩はリサールの天才を傾けたもので、非常に立派なもので有るさうだが、西班牙語で有るから我々には讀めぬ、左に掲ぐるはチャイレスダ・イビシヤア氏の英譯から意味だけ譯して見たので有る、球玉變じて瓦礫とはなつたが、美しい心持だけは、之によりても猶窺はれようか。

我が最後の暇乞ひ

リサール

然らばよ御祖の國、天つ日の胸^{はこ}む國、潮凝る東の海の眞珠^{たま}、此世ならぬエデンの園、汝^きが爲めに我は今、疲れぬる身を棄てゝ、永なへに別れ行かん、否否君よ我命、假令盛りに耀きて、神の御恵み多^さならんも、我は棄てなん汝が爲めに、價は問はず我命、與へんと思ふ汝が爲めに。

我國人の誰々は、直^すなる心竹のよの唯一筋に國を思ひ、雄たけびしてぞ矢玉散る戦^{いくさ}の場に身を棄てつ、我も問はじな身を棄つる。處はよしやいと杉の、緑の木末姫百合の、花さく谷間^{やま}は又首斬る

斧の降下る、臺うてなの上に在りとも、何か厭は我んは唯、國に報ゆる死を取らん。

淋しく暗き夜の闇、白々明くる曉に、魁けしてぞ我死なん、東の空にさし昇る、朝日の色の薄からば、汝が爲流す我血潮、こちたく塗りて其色を、眞紅にしてよ來ぬべき日。

東の海の眞珠聞け、昔我世に生れし時年若くして種々の希望持たりし其頃は、汝が面おもてより悲しみや苦しみの雲消え失せて、眉根顰しりぞまず眼には、涙の痕の無きをりを、何時しか見んと思ひしを。死に行く我れは今も猶、昔の夢を夢みつゝ、天翔るべき魂は、汝が爲棄つる命をば、塵より軽く見やりつゝ、常世の眠安らかに、汝が懷に睡らなん。

草むす土の一塊くれは、我奥津城ぞ其の上に、何時か小さき花咲かば、取りて汝の唇を、觸れよ御國よ我額ぬかは、冷たき墓の中に居て、汝が吐く息の温かき、露に霑ふ心地せん。

夕月の静けき影や朝つく日の、するどき光奥つきの、上に照りつゝ吹く風は木々に悲しき音立てゝ我を弔ふことあらん、淋しく立てる墓標、十字の上に止まりて、暫し休らふ鳥あらば土中に朽つる我がからに、平和の歌を聞かせてよ。大空に水の騰るは天照らす日こそ引くなれ其水に、垢を洗はれ我がかごと天津御空に昇らなん、昇りて後は情けある、人こそ我を憫まめ、我が愛づる國は我が

爲めに、我魂の大神の、御傍に在りて安かれと、祈りて在らん静けき夜。

悲命に死せし同胞や、言ひも盡せぬ苦しみを、受けて此世に住む人の、救ひを神に祈れかし、血に泣く母も世に多し、つま無き女親無き子、牢獄ひとやの中に苦みの、月日を送る人の爲め、祈りて後は汝御國、汝にも救の來らんを、天津御國に祈れ唯。

實に烏羽玉の暗の夜に、墳つみの邊行かば幻に、世に無き人の見えやせん、此世ならざる人聲の、かすかに遠く聞えなば、それぞ失にし我魂の、御祖の國に鄙歌を、捧ぐるものと思へかし、思へば通ふ我が魂の、夢な覺しぞ苔の下。星霜ふりて後の世に、我奥津城の上に立つ、標も失せて所在ありかさへ、分らずならば其所等をば、田畑になして犁鋤に、土ほり返しすき返し、いさごに交る我からを、七諸共に掬ひ取り、敷きてよ君が土の床。

我なきがらは斯くしてぞ、朽ちて痕なくなりぬべし、世に忘れし我魂は、愁を知らずほだし無く我が美はしき山水を、見つゝ眺めつ天翔り、風には歌ひ雨に泣き、在りし真心其儘に、草木の色に現はれん。

嗚呼我が國よ、幾度か、我は心を碎きぬる、嗚呼己が愛づる比律賓、聞けや別れの我歌を、別るゝ

我は汝が爲めに數の寶を棄てゝけり、我垂乳根も兄弟も我を助くる友人も、我は遺^{わす}れて今ぞ行く、
我行く國はまが人の、民を虐げ其前に、額づく奴婢のあらぬ國、我行く國は眞心の、人を殺さぬう
まし國、我行く國は天津神の嚴かに世を知ろしめす國。

さらばよ諸人其昔、追はれぬさきに我家に、集ひ遊びし友らさへ皆交を裂かれたり、あなうれしや
な我は今、愁ひの多きうつし世を、去りて憩はん永へに、さらばよ友よ汝はむかし我を慰め我世を
ば、樂しき世とはなしけるよ、今は別れぞ諸人よ、神の御手に成り立てる、萬の物よいざさらば、
我は行くなり唯休みある國へ。

第八章 比律賓人種及び其文明

比律賓に旅行した人々の中で多少とも其趣味を有つた人々が目に着くところは、同じく比律賓人でも骨格容貌が甚しく異つて居つて一定して居らぬ事である。是は言ふ迄もなく數多の人種が相結んだ結果混血兒が多いからである。先づ歐羅人殊に西班牙人との混血、支那人日本人との混血が最も多い。又少しく其方の研究を進めて、呂宋島の北部中央の山中に行つて見ると、イゴロット、イフガホ等の蕃人が居る。又サンバレスの山中ミンドロの内地等に行くとネグリートと稱する他と全く異つたる蕃族が在る。又南方ミンダナオにはモロ族は勿論バゴボ、マノボ、マンサカ、ピランの如き通俗に總稱してバゴボ族と稱するものが居る。そこで斯く數多の人種が如何にして同一地方に存在するか、今日比律賓人と稱するものは何であるかと云ふ問題が起る。先づ第一にネグリオトの事から述べると、此種族は元來エタ、アタ、アイタ等の名稱があるが、色が黒く體軀が小さく四尺五寸位よりない所から西班牙人は小さい黒人と云ふ意味でネグリートと呼ぶに至つたのである。ネグリオトの特色は小さくて色の黒いのみならず、頭髮が非常に縮れて居る。知識の程度は他の如何

なる人種よりも遙に劣り、住むに家なく果實草根鳥獸等を食とし、他種族との交通を嫌ひ、殆ど猿に近き人間と言ふも差支なく、馬來語では此種の人類を稱してオランウータンと云ひ、オラングータン猿と同じ名稱を付けて居る。(オラングータンはオランウータン即ち森の人と云ふ義の誤りたるものならん)

惟ふに此ネグリートは此地方並に馬來半島等の原始種族であつて、今日の所謂比律賓人は他より移住して來たもので、インドネシアン又はプロトマレーと云ふものではあるまいかと思ふ。今日の所謂馬來人は既に種々の種族か混じて居つて、其昔比律賓に移住して來た者とは異つて居るが、兩者の間共通の祖先を持つて居ることは疑ない。比律賓に移住して來た種族と同一又は最も近いもので現存して居る者はボルネオの山中に居るカヤン、ケニヤ、クレマンタン等の種族、呂宋の北部山中に居るイゴロット、イフガオ、又は臺灣の生蕃等であらうと思ふ。今日の比律賓人が他より移住して來たものであると云ふ證據は専門家の言ふ所に依ると色々あるが、著者が氣が着いた事で一つある。それは西班牙時代の末まであつた地方最小行政區劃の名稱をバランガイと云ふが、此バランガイと云ふ意味は船と云ふことで、即ち小さい船で一家族が移住して來て一箇所に居住し土着し漸

次其人口が増殖して一部落をなすに至つたことを想像することが出来る。別章猿蟹合戦の如きものの證據であると思ふ。又此移住に付ても勿論幾回にも行はれたものであつて、イゴロット、イフガオなどは其中で比較的早く來た者で其後移住して來た者の爲めに漸次内地に追込まれ、遂に今日に於ては中央の山嶽内まで追込まれたものであつて例へばボルネオのカヤン、ケニヤ等の種族がダイヤ、又はシイダイヤ等の比較的馬來に近き種族から山中に追込まれたのや、臺灣の生蕃が平地に住して居る者の殆ど行くことの出来ない山中に立籠つたのと同じ理由であると思ふ。

スチュアート博士の研究の結果に依ると西曆紀元前四百七十年乃至四百五十三年、印度のシスナガ王の時に印度人がプロニー（ボルネオ）の北マイヤに行つて支那人及アイタ（ネグリート）に會つたと云ふ記録がある。又支那商人は紀元前五百七十年にマヒに行つたと云ふことがある。而して此マヒとはサンスクリットのマイヤに對する支那音である。印度王アソカ（西曆紀元前二百六十年乃至二百十九年）は佛教に歸依し特に婆羅門教徒を虐待したと云ふ譯ではないが、不滿を懷いて居つた印度人は其故郷を捨て、スマトラ、爪哇及マイヤに移住し、スマトラ爪哇にては各地に印度の侯國を建設し、隨時北方のポホール、セプー、レーテ、サマール、マイヤ（例れも比律賓群島）に行き到る

處黒色のアイタ及前の居住者を内地又は山地に追込めた。紀元前二百九十五年乃至二百六十五年頃
に居つたアレキサンドリヤの天文學者クラウデヤス、ボトレマイオスはボルネオの北方の群島を稱
してインスラエ、マニオラエと言つた。プトレマイオスは恐らく亞刺比亞人から此邊の地理に對す
る知識を得たものであらう。而して亞刺比亞人は更に印度人から此事を聞いたものであらう。現今
のネグリートはアイタ族に多少他の血が混つたもので、イゴロットは最初の印度移民にスマトラ土
族の血が混つたもので、今日の所謂基督教比律賓人は其後の印度移民と支那人との混血であらう。

又比律賓大學人類學教授バイヤー氏の研究した所に依ると、西曆七世紀乃至十三世紀頃に最も
勢力のあつたスマトラの王國スリビシヤは各方面に向つて大なる發展をなし、其一部はボルネオ
にも勢力を占むるに至つた、殊にバンジャルマツシン、スカダノ、ブルニ等には有力なる植民を
した。比律賓へはバンジャルマツシン及ブルニから更に植民をしたもので、其勢力は主として比
律賓群島の中央部に及ぼしたのである。今日に於ても比律賓の中央部の群島に居住して居る人々を
總稱してビサヤ人と云ふはスリビシヤの移民たることを現して居る。(徳川の初期に海外渡航船
に與へた御朱印狀に依つて見るも、密西耶國渡航の印證を與へて居る所から見ても、密西耶と云ふ

名稱は以前からあつたものであることが分る。其後爪哇にマジヤバヒット王國が十三世紀の終りに出來て、遂にスマトラのビシヤヤ王國の勢力を奪ふに至つたので。比律賓の一部の如き此爪哇の新王國の勢力範圍に歸するに至つたのである。其後爪哇が回教の勢力に歸した爲めに比律賓も其影響を被り、西班牙人渡來の頃は南部ミンダナオ及スルー群島は勿論マニラの如きも回教徒の支配する所であつた。

支那と比律賓との交通は何時頃初まつたかと云ふことは確かには分らぬが、大分古いことであらふと思ふ。前述のステュアート博士の説に依ると紀元前四五百年前の頃既に支那人が比律賓に來て居つたと云ふことであるが、支那の記録に依るも紀元前三世紀頃には今の臺灣と共に比律賓に關する記事がある。唐の時代即ち七世紀より十世紀頃に於て支那商人が比律賓に行つた模様を記した記録がある。又其後チャオジュエカの歴史には支那人が比律賓に行つて商賣をした模様が詳しく載せてある。今日の佛領印度支那カンボチア及チャンパと比律賓の南部群島との間に古くより通商が行はれて居つて、スルー群島にはチャンパの植民地があつたかの形跡がある。厦門、汕頭及廣東方面の支那人が遠き昔から比律賓の北部地方と交通があつた事は想像するに難くはない。

日本人が比律賓と交通するやうになつたのも恐らくは最初支那人から比律賓の事を知つたのであらうと思ふ。日本人も果して何年頃に比律賓と交通を初めたかは正確の事を知ることが出来ないが例の呂宋助左衛門とか原田孫七郎とか云ふ人達の遺跡は明かである。西暦千六百九年に出版されたモルガの比律賓史に依るも、今日の馬尼刺市の殆ど中央部で今はエルミタと稱する區劃内に日本人の一廓があつて五百人位常に居住して居つたことが書いてある。

西班牙人は千五百二十一年に初めて比律賓に渡來し、馬尼刺を征服したのは千五百七十年であつて、其以來三百三十年間之を領有して居つた。此間役人軍人僧侶商人の多數が比律賓に住んで居つたので多數の混血兒が生れたのは當然である。即ち今日の比律賓人は數回に移住して來たインドネシアン種族、ネグリート、印度、アラビヤ、マレー、支那、日本、西班牙人の血が集つて出來て居るものである。其中西班牙との混血は比較的新しいのと兩者の間が著しく異つて居る爲め一目して之を知ることが出来るが、馬來人、支那人、日本人との混血兒は兩方の間餘り著しき相異がない爲め見分けの付かぬものが多い。比律賓人は身長不揃で、或者は非常に高く或者は非常に低いと云ふことは、恐らくは印度人亞刺比亞人の血の混つて居るのと、又一方にはネグリオートの血が混つて居

るのにと依りて説明し得ると思ふ。即ち比律賓人はネグリート以外にエリヤン族とドラビデアン族との混血兒たる印度人に依つて印度の文明を傳へられ、文字及言語はサンスクリットを用ひ（記録は西班牙宣教師渡來後總て異教徒の用ひたるものなるを理由として、出来るだけ之を燒棄したる爲め、今日に於ては文字は傳らず、唯言語のみ傳へらる）宗教並に法律は回教徒により亞刺比亞文明の感化を受け、家族制度並に社會の種々の制度は支那の影響を被つた。而して最後に西班牙人及米國人に依りて基督教並に西洋文明を吸收するに至つたのである。因に西班牙渡來の頃即ち千五百六十五年頃に於ける比律賓の人口は略々左の通りであつたとのことである。

ネグリート

五 萬人

イゴロット其他最初のインドネシアン移住民

十 萬人

其後の同移住民

四十 萬人

支那人

二 萬人

合 計

五十七 萬人

第九章 南洋の御伽噺と日本の御伽噺

著者は巖谷さんや來島さんの様な御伽噺研究家でもなく又鳥居博士のやうな人類學者でもないが南洋の書物を讀んで居る内に一寸面白いものが見當つたので其内の猿蟹合戦の一節を御紹介する日本の猿蟹合戦物語は小供の時分誰でも聽かされたもので、殆んど知らない者はないが、之を簡略に述べると、

昔、或處に猿と蟹とがあつて猿は柿の核を持ち、蟹は握飯を持つてゐた、猿は蟹に之を交換仕様ぢやないかと云つて承知させて握飯を食つて仕舞つた、蟹は柿の核を蒔いたから柿の木が生えて柿の實が成つた、然るに蟹は木に登ることが出来ないの、空しく木の下に立つて上を眺めてゐると、以前の猿が出て來て、俺が柿の實を採つて遣らうと云ひ、直ちに木に登り熟して居る柿を散々喰つて肝心の蟹には一ツも採つてやらないので蟹が下から催促すると、猿はまだ熟さない堅い柿の實を蟹目蒐けて投げ付けた、蟹は之に打たれて遂に死んだのである、所がその死んだ蟹の腹から兒が出た、そしてその兒が蜂だの石臼だの玉子だの針だの、援兵を得て猿の住家に押寄せて遂に仇さを討

つたといふのである。

比律賓の御伽噺にも日本のと酷く似たのがある。

昔、猿と龜とが湖水の畔りて遊んでゐたらバナナの木が流れて來たので、兩者が相談の末これを分け取ることに成り、眞中から二ツに切つた、猿は葉の付いてゐる方が見掛けが好いのでそれを取つた、そして兩者ともこれを植えた所が猿の方のは根がないから二三日の中に枯れたが、龜の方は根があるから段々と葉が出て遂にバナナが成つた。

或時猿が龜の所に來て見ると立派なバナナが成つてゐるので、早速木に登り之を喰つて龜には一ツも投げて遣らないので、龜は腹を立てゝ近所にあつた多くの木の刺を持つて來てバナナの木の幹に挿して置いた、すると猿が木から降りる時にこの刺に手や腹を刺されて痛かつたので大いに立腹し附近を探し廻つて隠れてゐる龜を捕へこれを殺さんとしたが、同じ殺すなら龜の好まない方法で殺して遣らうといふので、龜に向つていふには、お前は誠に不都合の奴だから今殺さうと思ふが、白に入れて杵で搗き殺すがよいか、又は水に入れて溺れ死するのがよいか返事をしろと云つた。

所が龜も考へた、猿の奴連も俺のいふ通りにして呉れる氣遣いはない、必ず俺の厭だといふ方法を

取るに相違ないと思つたので、どうせ殺されるなら白に入れて只の一搗で殺して貰ふ方がよい、水に入れられてアツブ／＼して死ぬのは誠に苦しいからと云つた、猿は所謂猿智恵で、馬鹿を云へ誰が貴様の好きな方法で殺してやるものと云ひながら龜を湖水の中に投げ込んだ、龜は早速水面に浮み出て猿の馬鹿やいと嘲つた。

ボルネオの中部に棲んでゐるケニヤと稱する種族にもこれと類似の御伽噺がある、即ち

昔、或時ブランドウ（小さな麝香鹿の類）と龜があつて共に果物を捜しに行つた、所が或家の側に果物が澤山成つてゐる木を見付けたので、ブランドウは龜に向ひ、私は木に登れないが、お前が私の肩に乗れば枝に掴まれるからと云つて龜を肩に乗せて押し上げた、龜は上に登つて行つて果物をどつさり落してやつたが、偕降りることが出来ぬので援けを求めた、ブランドウは勝手に降りて來い若し降りられないのなら落ちたらよいではないかと云つた、龜は已むなく上から落ちた、その物音に家の内に住んでゐる人がソラ「ドリアン」の實が落ちたと云つて家から出て來て見ると、誰かが果物を分け合つて居るので早速その方に遣つて來た、ブランドウはその間に自分の分前を持つて逸早く逃げたが、龜は走れないので、木の蔭に隠れてゐたが見付けられて仕舞つた、人々はこの盜賊を

如何に處分するかといふので、先づ第一に火に投じようと云つたら、龜のいふにはソレは誠に結構ですこの前も火に入れられた時に片側ばかり焼けて腹の方は少しも焼けなかつたと云ふので、それではいけないから臼に入れて挽いてやらうといふと、又も龜のいふには、これも結構です此前挽かれた時には腹の方だけは平つたくなつたが脊の方はどうもなかつたと云ふのでこれでも駄目だソレなら水に入れてやらうといふと龜は忽ち泣き出し、何卒それだけは赦して呉れと云つた。

イヤ／＼赦さないと云つて到頭水の中に投げ込んだ、所が龜は河の中流に泳ぎ出て、これは誠に難有い私の家は此處ですと云つたので人々一杯食はされて大いに立腹しそれでは河に毒を流してやらうといふので、ツバの根を採つて來て河の中の石の上で叩きその毒汁を流し始めた、所がその間に龜は淺い處に泳ぎ付いて石の間に脊を出して凝つとしてゐると、一人の者が之を龜の脊と知らず、その上でツバを叩いてゐた、すると龜は少しづつ脊を水中に沈め始めたので、これは水が段々増して來ると思ひ斯様に増水して來ては毒を流しても効が無いと云つて一同引揚げて仕まつた、といふのである。

今この三者を列べて見ると、その共通點は左の如くである。

一、話の主人公は小さい獸と而して甲羅を有して匍つて歩くものである

但しボルネオの分は人間も這入つてゐるが

二、果物の分配といふ事が問題となつてゐること

三、木に登ること

四、白があること

五、弱者の方が結局勝利を得ること

等であるが、又この三者を比較して見ると地理氣候及び文明程度の異つてゐる事が分る、先づ第一に話の内に現はれてゐる果物がボルネオはドリアン、比律賓はバナナ、日本は柿である、是は一面に於て氣候を現はしてゐるのと同時に又その土地々々の代表的果物を現はしてゐる。

第二に、ボルネオの話に依ると、龜に一杯喰はされたのは人間であるが、比律賓はこの話の中に人間は這入つて居らずして、計略に懼るものは猿である、即ちボルネオに於ける土人の智識が龜にさへも欺かれる位低級のものであつたことを現はしてゐるとも解釋することが出来る。

第三に、ボルネオも比律賓も共に話の内に現はれてゐる食物は天然その儘で食用に供し得る果物で

あるが日本のは握飯といふ食用に供する迄に種々手数の掛つた食物であるのみならず、米を作るといふこと即ち農業が相當に進歩してゐたことを示すものである。

第四に、日本のは臼だの蜂だの針だの玉子だのといふ種々のものを以て一の軍勢を作り、猿の住家に押寄せるといふ事で、社會の組織が餘程複雑となつてゐることを現はすと同時に、共同とか協力とかいふ所謂社會進歩の原則を示してゐるのに反しボルネオや比律賓の嘶には是等の點がない。

第五に、ボルネオや比律賓のものは復讐といふよりは只頓智を用ひて自己の危害を免かれたにすぎないのであるが、日本のは親蟹が殺されると其兒が讐を討つといふことで報仇心の強いことを示してゐる、是れ日本人の性情を現はしてゐるのも見られるのである。

最後に、ボルネオと日本との嘶を列べて見てはこの二者に深い關係があるとは思はれないが、その中間に比律賓の嘶を入れて見ると、比律賓とボルネオのとは似寄つた點が多くその間に密接なる關係のあることは疑ひがない、又これと同じく比律賓の嘶と日本の嘶とを較べて見ると、その間亦似寄つた點が多く、必ず兩者の間に深き關係があるといふことを知るに足るのである。

之に依つて考ふるに、この嘶はその源をボルネオに棲める土人に發し

「尙他にその本源があるのではないかと思ひ少しは調べて見たが、著者の寡聞なる未だ之を知らずマレイ半島に住するサカイ族に麝香鹿と龜との噺はあるがその筋が全然異つてゐて、この噺とは關係がないらしい」

比律賓を経て日本に來たものと解するが至當と考へるのである、我輩は決してこの一事を以て日本人はその源を南洋に發すといふ譯ではないが、少なくとも南洋の住民と日本人との間には、昔時何等かの關係があつたことは争はれぬことゝ考へるのである。

第十章 比律賓の婦人

旅行者が馬尼刺に上陸して最初に目に着くものは比律賓婦人の服裝である。昔の我國の袴のやうに角張つた薄い上衣を着けて裕々として歩行するのを見ると、天人が羽衣を着けて居るかの如く見える。そこで我國の謠曲に現れたる三保の松原に下向した天人は或は比律賓の漂流者ではないかと思ふ人がある。著者の知つて居る人々の中で大學の教授で二人まで此疑を持つて居る人がある。其中の一人は今日も尙保存してある天人の羽衣と稱するものを實見に行つたとのことであるが、それは若しそれがマニラ麻を原料として造つてある布であれば正に疑もなく三保の松原の天人は漂着比律賓人であると云ふことが判るからである。併ながら今日保存してある羽衣は其布片僅に二錢銅貨大のものであつて色も頗るくすんで居つて、何だか判らぬとのことである。惟ふに比律賓婦人の服裝は西班牙人渡來當時即ち十六世紀の歐羅巴婦人の服裝であつて、上衣の原料は今日に於ては比律賓麻又はフーシイ或は鳳梨の纖維であるが、大體の形は古い歐羅巴の婦人の服裝と同じである。殊にスカートの後方に裾を引いて、恰度歐羅巴婦人の結婚の時のスカート又は皇室邊りの儀式の時に

高貴の婦人が着するものと同様である。即ち羽衣的服裝は決して比律賓固有のものでなく西洋から輸入せられたものである。西班牙渡來以前の比律賓婦人の服裝は今日比律賓ボルネオ等に住んで居る蠻人の服裝と同じく、恐らく腰巻か何かに過なかつたであらうと思ふ。其證據には今日スカートを着けた上に腰の周圍に黒い幅の廣い布を巻いて居る。尤も上等の服裝になると此黒い布は黒いレースに代つて居るが、是は別に不思議ではない。斯くの如く詮じて見れば例の羽衣説の起り、羽衣の話は何年頃から初まつたものであるかと云ふことを調べたならば直に分る。即ち若し羽衣の話が十六世紀前のものであつたならば漂流比律賓人でないことが確かである。

比律賓婦人の社會上並に家庭内に於ける位地は、他の東洋諸國の婦人に比して高い。是は比律賓人種固有の状態ではなく、全く西洋文明輸入の結果である殊に基督教の感化に依るものが多いと考へる。比律賓は勿論一夫一婦の制度であつて、今日に於ては比律賓の憲法とも云ふべき根本法律にも多妻を禁じてある。斯く言へばとて決して例外がないと云ふ譯ではなく、例へば南方スル群島又はミンダナオ島に住んで居るモロ族の如きは回教徒であつて多妻主義を實行して居る者もある。又馬尼刺邊りでも妻の外に女を蓄へて居る者もあるが、要するに是は原則と見るべきに非ずして例外

に過ぎぬ。

家庭に於ける婦は却々の權力があつて、金錢の出納を始め家庭一切の事を舉げて主婦の司る事になつて居る。或時著者がバギオと云ふ呂宋の中央山中の避暑地に行つて上院議長ケソン氏及學務局次長オシアス氏と三人で散歩をしながら四方八方の話の末、恰度吾々の前方を盛装した比律賓の一人婦人が通つたので著者は試に、比律賓婦人の權力の根源で又表徴であるものは何か、との質問をした所が、一寸答へに苦んだから自分は、彼の婦人を見よ腰の所にブラ下つて居る多數の鍵（比律賓婦人は多くの場合自分の家の箆筒其他の鍵を腰の所に下げて居つて此鍵の多さを誇ると云ふ風がある）がそれである、と言つたら手を拍つて首肯した。勿論婦人が鍵を握るに至つたのはそれ／＼原因があるが、今日に於ては此鍵を握つて居ると云ふ事が婦人の最も強味とする所であつて、財布の口を握る者が勢力を占むるは不思議はない。著者が雇つて居つた自動車の運轉手の如き月給を貰へば全部之を妻女に差出し、毎日二三十錢づゝの小遣を妻女から貰つて居つたことを實見して、之れでは成程妻勝となるは理由があると思はしめた。

結婚は今日に於ては所謂自由結婚であつて、兩親や又は媒介者が配偶者を定むることはないが、

是は西洋の文明が輸入されてよりの制度であつて、其以前は結婚は總て兩親の間に相談が行はれて甚しきに至つては未だ出生せざる以前に婚約が兩親の間に行はれたことがあるとのことである。今日に於ては比律賓婦人は東洋に於ける最も解放されたる婦人であつて、男子との交際の如き、西洋諸國と殆ど變りがなく、若き男女が各種の集會宴會舞踏會等で相知り相當の間所謂コートシップを續けて、兩者の意思合致するに至つて初めて結婚するのであつて、是が必しも上流中流社會のみに限らず、勞働に従事して居る者の中にもある。例へば馬尼刺市には多數の煙草工場があるが、葉卷煙草は總て手で造る、機械を用ひることがないので手先仕事の器用である比律賓婦人は葉卷煙草の工女として何れの工場にも澤山居る。午後五時乃至六時頃仕事が終わる時分に工場の門の附近に行つて見ると多數の男子が人待顔に佇んで居る、是は意中の婦人が工場から出て来るのを待つて彼女の家まで送届けてやるとか、又は附近の飲食店に行き晩食を共にする爲めとか云ふのであつて、斯の如き深切を數箇月の間盡して始めて結婚するのである。

比律賓婦人は多産であつて、數人の子女を擧げるは普通で、少しく多いのは十數人の子女を産することが珍しくない。比律賓の或有名なる人の如きは四十歳の時に十三人の子女の父であつた。夫

人は三年程前に三十幾歳で此多數の子女を残して他界せられ、同氏は昨年若き後妻を迎へたが本年は後妻に既に一人の子が出来た。斯くの如く多産であれば人口の増加は非常に速かであるべきであるが、小兒死亡率が非常に多いのでそれ程に増加しない、出生兒の四分の一乃至半分は生後一箇年間に死亡する。是は所謂粗製濫造と云ふ譯ではないが、育兒の方法が悪い爲めてあつて、其證據には日本人又は西洋人の子女の死亡率は別に多くはない。婦人會又は赤十字などは是が改善並に救済を圖つて居る。

婦人の貞操問題は却々六ヶしい問題であつて、一國の婦人を他國の婦人と較べて、全體より論じて孰れが貞操堅固であるかと云ふことは、殆ど斷案を下し兼ねる。例へば日本には公娼とか藝妓とか云ふ制度があるから、日本婦人は貞操の觀念が薄いかと云へば決してさうではない。近來所謂新しき婦人などの例はあるが、是は除外例であつて、原則ではなく、十字軍に従軍した者が留守中に妻の貞操を氣遣ひ遂に貞操帶を發明したと云ふやうなことは我國にはない。西洋に於ては娘の中は却々堅いが、嫁してから却て不品行の例が比較的多いと云ふが、是は或は事實らしく考へる。比律賓に於ては青年男女間の交際は所謂西洋流であつて頗る自由であるが、問題を起すことが少いや

うに見受けられる。併ながら結婚後の不品行は必しも絶無ではないと思ふ。是は一つには宗教上の理由で、一旦結婚した者が假令雙方承諾しても離婚することが殆ど不可能である爲め、愛の冷めた夫婦、又は一時の情の爲めに夫婦になつた者が他に愛人を作るやうな理由もありはしないかと思ふのである。殊に婦人の地位が他の東洋諸國人より高く、且財布を握つて居ると云ふやうな事の爲めに、婦人が自主的若くは自動的である事は、日本などの婦人より遙に超越して居ると云ふ事も間接には斯かる結果を誘致するのではあるまいかと思ふ。

尤も之れは勿論例外であつて一般に云へば比律賓婦人は自主的で勤勉で家庭を背負つて立つて居ると云ふも過言ではないウッド將軍總督就任演舌中にも「比律賓に於て見たるものの内品性忠實勤勉其他總ての點に於て社會に好感化を及ぼす事比律賓婦人の如きものあるを見ず」と云つて居る著者も同感である。

第十一章 比律賓カーニバル

カーニバルと云ふ詞は日本の新聞などによく謝肉祭などと譯されてゐるが、さう云ふ意味もないのではないが、馬尼ラのカーニバルと云ふのはさう云ふ意味ではなく、別に宗教上の關係はなく、一口に言へば一年一度の放生會と云ふやうなもので、先づ十一月頃からルネタ公園の傍の空地に圍ひをして、ルネタに面した中央に宏大なる入口を設け、其園の中には運動場もあればベースボールのグラウンドもあり、又昔の淺草の奥山のやうな各種の見世物小屋等も建てられ、舞踏場も設けられ、一月の末から二月に掛けて九日間開場するのである。此九日間はこの園内は勿論其附近一般に一大歡樂地となり、男女共に各異様な服裝をして、殊に晩方からはコンフェッティと稱する紙を細かに切つたものを袋に入れて腰に下げ又は手に提げて、會ふ人毎に知つて居ると識らないとに拘らず之を顔と云はず頭と云はず互に打突け合ふと云ふやうな他愛もなき戯れをして喜んで居る。是は唯子供やなにかに限らず堂々たる大人も甚しきに至つては老人までも同様若返つて無邪氣な遊びをするのである。大抵毎年此時に日本の學校から野球選手を招待して野球技を演ずる。又是と關聯

して色々教育上の展覽會様のものも其構内に開設せらるゝのである。

このカーニバルは比律賓に前からあつたのではなく、亞米利加占領後確か一千九百六七年頃に馬尼拉市外のバサイと云ふ處で小規模のカーニバルを初めたのが元で、年々大きくなつて遂に今日の盛大に至つたのである。カーニバルの事務總長とも云ふべき者は政府の局長位の人が選ばれて之に當ることに慣習上なつて居る。是は政府の役人を當らしめて置くとか何かに就て便宜が多いからである。而してカーニバルと云ふものは一つの會社組織であつて、株主は初め二十圓出して一株を持ち毎年十圓づゝ拂込をして行くのであつて、別に何等配當は受けないが、株主の權利としてカーニバル開會中は場内に無料で入ることが出来る、其他各種の利益があるので、之を金に積つて見ると約十圓位のものがある。本年（一千九百二十二年）のカーニバルにはウツド總督の招待で我國から田中義一大將が出掛けらるゝ事になつて居るが、カーニバル當局者も非常に喜ぶ事であらう。

THE LIFE OF SADAKAZE SUGANUMA (*"Philippine Review" January, 1917*)

During more than three centuries of intercourse with the people of these Islands, only two Japanese seriously thought of carrying out a certain definite policy toward the Philippines. First of these was Magoshichiro Harada, commonly known as Faranda in the Spanish books and writings. It was Harada who suggested that Taiko Hideyoshi take these Islands from the hands of Spain, in the year 1593. After several years of negotiation Hideyoshi gave up the idea on account of the unsuccessful campaign against China. The intercourse between Japanese and Filipinos continued for some time after this incident, but the exclusive policy of the Tokugawa Shogun practically shut the country from the rest of the world until the reopening of the country to foreigners by the guns and diplomacy of the American commodore.

The subject of this narrative, Sadakaze Suganuma, who was born twelve years after the arrival of Commodore Perry in Japan, and would have been 51 years of age had he lived to this day. The place where he was born is significant. Hirato, of the province of Hizen, in the Island of Kiusiu, is considered as the cradle of foreign trade in Japan. As early as 1549 Portuguese traders were seen coming to Hirato, and the famous Catholic priest Francis Xavier arrived there in the same year.

Suganuma studied in a provincial school for a few years, but owing to the financial circumstances of his family he had to work for himself. While he was employed as a clerk in the provincial govern-

ment he was appointed to prepare a history of the foreign relations of Hirato, which he accomplished in a creditable manner, and on that account his former master and lord, Count Matsura, furnished him with the fund with which he could get higher education in Tokio. He spent four years in the Imperial University of Tokyo, specializing in the study of ancient history and literature of Japan. It is said that while he was in the university he paid very little attention to his regular class work but spent most of his time in the library. Besides, he took special work in economics in another school. His classmates had very little idea as to what he was doing, but when the time for graduation came the students as well as professors were surprised to see a voluminous, hand-copied manuscript containing more than three million and five hundred thousand words, giving a most complete history of the foreign commerce and relations of Japan. Upon this work he spent four years and consulted one hundred and eighty-four works, some of which comprise more than one hundred Japanese volumes. He was then only twenty-three years of age.

The merit of his thesis soon placed him in the chair of Commercial History in the Higher Commercial School. But he was not a man of mere theory. He wanted to carry his ideas into practical operation. So he resigned his position in the following year and came to Manila in March, 1889, where he applied his intensive method in studying the history and actual conditions existing in the Islands. During three months' stay here he acquired a working knowledge of the Islands and in the beginning of July he intended to return to Japan to enlist the help of his countrymen in carrying out his plan. But unfortunately, on the 5th of July he was suddenly taken ill and died on the following morning. His remains were buried in the cemetery at San Pedro Macati, where his friends afterward erected a tomb

to his memory.

Now, let us see what was his plan concerning the Philippine Islands. This, however, can best be explained as a part of his general idea of Far Eastern Politics. Briefly stated, Japan, in order to place Oriental nations on an equal footing with those of the Occident, must take the following steps, namely: first, help the Korean people to strengthen their country; second, help the Filipinos to establish an independent government; third, these two countries should be allied with Japan; fourth, China should be forced to recognize and respect the equal rights of other Oriental nations, and work with them the salvation of their countries. He declared that Japan must be ready to fight, if necessary, first, against Spain, and second, against Russia.

The course of events during the twenty seven years following his death has not exactly coincided with what he anticipated. But we must study the conditions then existing in the Far East in order to understand and appreciate his ideas. China was then considered as the strongest country in the Orient. Her internal weakness had not been exposed. Her navy had newly added two large battleships of more than 7,000 tons each, beside many smaller but powerful ships, while Japan's largest men-of-war were not larger than 4,500 tons displacement. The discipline and training of the officers and crews of the Chinese navy were said to be of high order under the able command of Admiral Ting, assisted by his foreign adviser. Admiral Ting took opportunity to impress upon Japan the formidable power of his navy by cruising around different parts of Japan, calling at several important ports, such as Yokohama, Kobe and Nagasaki. In her dealings with Korea she acted as though Korea was her protectorate and would not listen to any proposition put forth by Japan for internal reforms in Korea in

order to develop her people and country.

To give an idea as to the relations between China and Japan as regards the affairs of Korea I will cite from "A history of the Japanese People," by Captain Brinkley:

"To exercise independence in practice however, was not permitted to Korea. A Chinese resident was stationed in Seoul, the Korean capital, and he quickly became an imperium in imperio. Thenceforth Japan, in all her dealings with the Peninsular Kingdom, found the latter behaving as a Chinese dependency, obeying the Chinese resident in everything. Again and again, Japanese patience was tried by these anomalous conditions, and although nothing occurred of sufficient magnitude to warrant official protest, the Tokyo Government became sensible of perpetual rebuffs and humiliating interferences at China's hands. Korea herself suffered seriously from this state of national irresponsibility. There was no security of life and property, or any effective desire to develop the country's resources. If the victims of oppression appealed to force, China readily lent military assistance to suppress them, and thus the royal family of Korea learned to regard its tenure of power as dependent on ability to conciliate China."

The first step to be taken, according to his idea, was to bring China to reasonable terms. This could only be done, in his opinion, by strengthening Korea and creating the independent nation of the Philippine Islands, and by allying Japan with two countries. This being accomplished, if China should threaten Japan, the Philippines would strike Southern China and Korea the north. Or if the Philippines should be invaded by China, both Japan and Korea would attack her from the north. Thus circumscribed, China would come to her senses and then the Oriental people would be able to unite for the

protection of their rights and territories against European encroachment. In short, his central idea was Pan-orientalism. After these Oriental nations had united themselves for the purpose of establishing and keeping the peace of the Orient, if Russia should still attempt to acquire an opening in the South, then would be the time to deliver a blow to the Northern Bear hard enough to make him abandon the project for years to come.

As to the Russian ambition due to her peculiar geographical position, Captain Brinkley says:

"Vladivostok, the principal port in the Far East, lay at the southern extremity of the Maritime Province. Freedom of passage by the Tsuchima Strait was therefore a matter of vital importance, and to secure it one of two things was essential: that she herself should possess a fortified port on the Korean side, or that Japan should be restrained from acquiring such a port. Here, then, was a strong inducement for Russian aggression in Korea. When the eastward movement of the great northern power brought it to the mouth of the Amur, the acquisition of Nikolaïevsk for a naval basis was the immediate reward. But Nikolaïevsk, lying in an inhospitable region, far away from all the main routes of the world's commerce, offered itself only as a stepping stone to further acquisitions. To push southward from this new port became an immediate object."

"There lay an obstacle in the way. The long strip of seacoast from the mouth of the Amur to the Korean frontier—an area then called the Usuri region because that river forms part of its western boundary—belonged to China, and she, having conceded much to Russia in the way of the Amur, showed no inclination to make further concessions in the matter of the Usuri. She was persuaded to agree, however, that the region should be regarded as common property, pending a convenient oppor-

tunity for clear delimitation. That opportunity soon came. Seizing the moment (1860) when China had been beaten to her knees by England and France, Russia secured the final cession of the Ussuri region, which then became the Maritime Province of Siberia. Then Russia shifted her naval basis in the Pacific to a point ten degrees south from Nikolaievsk, namely, Vladivostok. Immediately after this transfer an attempt was made to obtain possession of Tsushima. A Russian man-of-war proceeded thither, and quietly began to establish a settlement which would soon have constituted a title of ownership had not Great Britain interfered. The instinct that led Russia from the mouth of the Amur to Vladivostok prompted the acquisition of Saghalien also, which, as already related, was accomplished in 1875."

"But all this effort did not procure for Russia an unobstructed avenue from Vladivostok to the port of the Far East. In Korea seemed to lie a facile hope of saving the maritime results of Russia's great trans-Asian march from lake Baikal to the Maritime Province and to Saghalien. Korea seemed to offer every facility for such an enterprise."

Just how he was going to establish an independent government in the Philippine Islands is not fully known to us on account of his premature death. But if we look back into the conditions of the Islands in those days we cannot fail to see the grave dissatisfaction of the people. The Cavite insurrection and subsequent execution of native priests occurred in 1872; many prominent Filipinos were deported; political agitation by young Filipinos abroad, especially in Spain, was active; "Noli me Tangere" was published in 1886. In fact, the pictures drawn in Rizal's book seem to have actually existed in those days. We may say, without exaggeration, that most of the conditions necessary to start

a revolution were there, and with a little help from outside in the way of arms and ammunition would have won the day for Philippine independence.

Japan fought against Russia, and Russian advance toward the south was checked, at least for the time being. The Philippines are in a fair way to independence through their unexpected deliverer, the United States of America. Korea disappeared as an independent country, through the incompetency of both government and people. China exposed her weakness completely by the war with Japan, and the present Far Eastern question is how to build up China on a firm basis so that she can withstand outside pressure. Sugaunuma miscalculated the strength of China and misjudged the capacity of the Korean people, so his anticipations have not been realized to their full extent. But his sympathy for the cause of the people of these Islands and his belief in their capacity for independent government should entitle him to the gratitude of all Filipinos.

ECONOMIC ALLIANCE

(*"Philippine Review" November, 1916*)

The necessity of promoting the economic activities, especially in developing the natural resources of the Philippine Islands, cannot be overrated. Upon this, more than upon anything else, depends the future of the country. For without economic independence, political independence is merely an empty name.

The importance of this question is well realized by the leaders of the people. A bill was recently introduced in the Senate to appropriate \$1,000,000 for the development of the coal and mineral oil industries. Legislation of this kind will undoubtedly stimulate, but the governmental assistance of the new industry in the form of direct financial aid is, from the nature of the case necessarily limited. The government cannot advance money to develop all kinds of industries, nor even a majority of them. It must depend on private initiative for the most part, the proper object of governmental activities in this field being to create those conditions which are favorable for the investment of capital. While capital is timid and conservative, yet it is cosmopolitan and will not be limited within political boundaries. Therefore, those favorable conditions once established, and proper assurance given, there is no reason why capital should not go into those industries where there is a prospect of fair returns on the investments. Let us see some of these conditions which encourage the investment of capital.

1. Stability of political conditions.

The necessity of this condition for the investment of capital needs no argument. Mexico is a good illustration.

2. Least possible change of legislation affecting industrial activities.

Corporation laws, mining laws, land laws, taxation statutes and any other laws affecting the industrial activities should not be changed except in case of absolute necessity. To alter the conditions under which an investment was made is, to say the least, unfair to the investors.

3. Security of investments.

The law must give every assurance that property rights are absolutely secure before anybody can be expected to invest his capital. The Torrens title law may be cited as a good example.

4. Removal of obstacles.

There may be many kinds of obstacles but here I refer chiefly to such obstacles as wharfage upon all products exported from the Islands. (At present lumber and a few other articles only are exempted.) Some of the raw products or raw ores have very small value in proportion to their bulk, and domestic development of these industries is impossible, as there is no market at home for the products. This probably accounts for the present almost undeveloped condition of the Philippine mining industry except as to gold mines. Wharfage should be abolished, at least for raw products of small value and most of the mineral products.

5. As light a burden on investment as possible.

Here I refer chiefly to the taxation directly affecting the earnings of the investment. The direct tax on the earnings of the industries should be as light as possible.

6. Facilities for getting a sufficient number of such laborers as are required for the different industries.

Labor and capital being necessary requisites of production, capital, unless combined with a proper quantity and quality of labor, can not yield a large return. The government should provide means, where it is necessary, to introduce foreign laborers, to a certain extent.

Having seen the general conditions which favor the investment of capital, let us now turn our attention more particularly to the investment of Japanese capital in the Philippine Islands.

The relations between Japan and the Philippine Islands are very close in many ways. Geographically speaking, these two countries are almost contiguous. From the northernmost island of the Batanes group one may behold the mountains of Formosa, when the day is clear. The trip between Manila and Takao, the southern port of Formosa, will be a matter of two days, if a direct line of steamers be established, the distance being not more than 550 miles, which is less than the distance between Manila and Zambanga. Mere contiguity or even nearness itself tends to bring two peoples into closer relations than is the case with peoples of more distant places, even at the present time when steam and electricity have reemerged, to a great extent, the element of distance.

In former days, when navigation was slow and precarious, the question of distance was a much more important factor in the intercourse between different peoples. Yet it is not strange to find that the Japanese traded with the Philippine people at an early day and that some of them had permanent residence in the City of Manila as early as 1593. Had it not been for the exclusive policy of the Tokugawa Shogun, the intercourse between these two countries would have been most extensive.

Racial resemblance of two people is another point to be taken into consideration. Some one humorously remarked at a banquet where there was a large number of Filipinos and some foreigners that "a Filipino is a Japanese who talks Spanish, while a Japanese is a Filipino who does not." When I first came to Manila, a little more than four years ago, I was very much struck by the facial resemblance of the two peoples; so much so that I had great difficulty in distinguishing the two on many occasions. It was just after the death of the late Emperor and every Japanese had a black band on his left arm and I took this as a sign of the wearer's being a Japanese. But I found that the custom of mourning for the death of relatives and friends by tying a black Band around the left arm is extensively followed in this country and, therefore, to my great disappointment, my schemes to distinguish them proved impracticable.

The Japanese is without doubt a mixed race and so is the Filipino, the only difference seeming to be that the former have been more thoroughly mixed, through the long lapse of time, while the latter are still in process of mixing; thus we can tell, in most cases, Spanish or Chinese mestizos among the Filipino people. As to just what are the many stocks that make up the Japanese people there is some difference of opinion among scientific men, but they all seem to agree that at least a certain portion of it is composed of Malay stocks, the same as the Filipinos. Dr. Nitobe, at a reception held at the Manila Hotel last April, said: "Filipinos are kith and kin of the Japanese people."

Under such circumstances it is rather strange that Japanese have not gone more fully into economic enterprises in these Islands long before this. The explanation seems to be the comparative scarcity and urgent need of capital at home. But conditions are fast changing in this regard. Since

the beginning of the European War, Japan, next to the United States, has been increasing her share of trade and production. Foreign trade has increased enormously; the balance of trade become favorable; established industries as well as new industries which have sprung up in consequence of the war are paying large dividends. A steamship company recently declared dividends of 360 per cent; a metal refining company has just declared 200 per cent, besides writing off for the largest part of the plant. The rate of interest has become so low that the Russian and French governments thought it advantageous to raise a part of their war loan in Japan. In short, Japan is changing her status from that of a borrowing nation to that of a lending one. This being the case, the investment of Japanese capital in foreign countries will naturally increase in a short time and the Philippine Islands will be one of the fields of investment. Now the question is, What should be the attitude of the Filipino people toward this foreign capital? That the leaders of the people are not antagonistic to the introduction of foreign capital is evident from the speeches on the floor of the Assembly by the Speaker and other prominent members, at the time of the debate regarding the establishment of the Philippines National Bank. And there can be no valid argument against it. Every industrially and commercially younger nation has had to borrow money from older and richer nations in developing the industries of its country. The United States of America was, until recently, a heavy borrower of English and French capital. Japan was also borrowing nation and even still has quite large obligations abroad. But these countries have been bettered by borrowing, or rather they could not have achieved their present industrial and commercial status without it. The only condition that is important in his connection is to see that the money thus borrowed is invested productively. Just as an individual

who borrows money and buys an automobile simply for pleasure, or spends what he borrows for the personal pleasure will finally get into trouble, so it is very dangerous for a nation to borrow money and spend it unproductively.

Conceding that the investment of foreign capital in the Philippine Islands will be beneficial to the development of the industries in the Islands and ultimately to the economic independence of the country, there yet seems to the writer, to be a certain antipathy or even fear existing among some Filipinos against Japanese capital. The central idea of these people seems to be that if Japanese capital is allowed to come in it will lead to a political complication which might result in the occupation of the Islands when the Philippine Islands are declared independent. The fallacy of this argument is twofold: 1st. Capitalists or investors are the very ones most opposed to any political disturbance or change. So long as they enjoy the fruits of their capital they are contented. They have too much interest at stake to cause any disturbance. They are, more than any other class, the "peace at any price" people. 2nd. Japan does not need any political control over another people so long as the country does not become a menace to Japan. The Sino-Japanese war was started because of the denial on the part of China of Japan's demand for equal rights to be enjoyed by both governments in the affairs of Korea and the subsequent virtual declaration of the suzerainty of China over Korea. The Russo-Japanese war was caused by the denial of Japan's demand for a paramount interest in Korea, and the threatened extension of the Russian sphere of influence over Korea. What Japan needs for her capital and her growing population is an economic field. So long as the Philippines remain a neutral nation and treat the Japanese fairly and squarely, giving enough freedom and

facilities for their economic activities, there is no inducement for the Japanese people to spend both blood and money to get political control over the Filipinos, who would be much more difficult to govern than Koreans or Formosans.

Our next question is, What would be the best form in which Japanese capital should be introduced? This can best be done by a combination of both Japanese and Filipino capital to undertake industrial enterprises. From the Filipino point of view, if an undertaking be begun by Japanese capital alone, they may feel that the Japanese concern abstracts all the profit and the Islands will be impoverished just so much. Suspicion might also arise with respect to the doings of a purely Japanese enterprise. But these objections will disappear if both Filipino and Japanese invest jointly and share the control of the concern. Filipino capitalists will get the benefit as much as Japanese capitalists. Besides, Filipino capitalists will get for nothing the full benefit of the knowledge of technical experts and the experience gained by conducting similar industries in Japan. I have known two enterprises organized chiefly by Filipinos here, one of which has failed completely and the other is in a rather embarrassed financial condition, simply for the lack of sufficient capital and experience. I can see no reason why these above-mentioned industries should not have succeeded, if they had been undertaken with the co-operation of Japanese capital and experience. Most of the industries now in a highly prosperous condition in Japan have had very serious times in their histories. To receive the benefit of all this experience with which to safeguard the sound development of the new industries in these Islands would be a great benefit to Filipino capitalists as well as the country.

From the point of view of Japanese capitalists, it may be said that any industrial undertaking

in foreign countries is attended with a considerable amount of unknown risk, due to the local conditions both physical and political. They may also fear that they might be the victims of discrimination. These disadvantages will be obviated and fears dispelled if they have native capital and men associated with them. Thus this scheme is advantageous for both isdes.

The world is advancing and a nation that starts later than others has to make long strides to catch and keep up with the rest. The patriotic Filipino who cherishes the hope of future independence cannot 'lie back placidly murmuring 'manana' " while all the rest of the world is striving for the higher and better development of its territory.

And finally, this scheme of economic alliance between Filipinos and Japanese will not only promote the industries of the Islands but will cement the good relations now existing between the two peoples.

RIZAL DAY ADDRESS

Delivered in Tokio, December 30th, 1921

Mr. Toastmaster, Guests, and members of Filipino Community of Tokio.

We are gathered together here tonight in commemoration of the 26th anniversary of the death of the greatest Filipino Patriot and Martyr Dr. Jose Rizal y. Mercado, and you have done me a great honor in asking me to speak at this memorable occasion. I am going to speak on the topic which has been discussed by many people for many years, and will continue to be discussed until the long cherished hope of the Filipino people shall have been realized. The subject of my address is the Question of Independence. You may think that I am assuming too much in speaking on this subject to the audience composed mostly of Filipinos who probably know more about it than I do. But it is sometimes interesting to hear the Question presented by a foreigner, and that is my only excuse. Time, however, does not permit me to go into the details. All I am going to say is simply to point out a few important events leading up to the present status of the Question.

As all of you know the independence movement did not originate in the American occupation. It is much older. The 19th century, especially since the second quarter was marked by the spread of liberal and humanitarian ideas. It helped toward the enlargement of the suffrage, and the growing appreciation of man's right to self-government. Reform Bill of England in the year 1832, Chartist movement, and the various movements for a freer and better colonial system, are all parts of the developing

recognition of human rights.

This trend of the ideas did not have a direct bearing upon the Philippine affairs. The communications between Europe and the Orient were still slow and uncertain. But, with the opening of Suez Canal in the year 1869, together with the improved means of communications, the Philippine Islands were brought nearer to the mother country and to Europe, and these liberal and democratic ideas began to find its ways into the Philippines. Apolinario Mabini in his essay on the Philippine Revolution says that the opening of the Suez Canal brought a tremendous change upon the ideas of the Filipino people.

Next event bearing on this question is the Cavite Insurrection and the subsequent execution of three native priests namely, Fathers Burgos, Zamora and Gomez. Insurrection at the Cavite Arsenal was nothing but a local disturbance caused by minor grievances. But the Spanish authorities, through the pressure from Friars, made it pretext to execute three innocent native priests who had been protesting against the unlawful encroachment of the Friars upon the proper sphere of the Secular clergy, and carried their argument to the highest canonical court in Rome. The execution of three priests, one of whom over eighty years of age, without even a show of proper trial on the charge which they did not have any proved connection, could not help but arouse the popular indignations against the Spanish authorities. The people began to realize that something got to be done since the priest-ridden government is liable to do anything that the Friars demand.

Dr. Rizal was born in 1861 and he was not more than 10 or 11 years old when this had happened, but being a remarkable man from his boyhood he must have received a deep impressions by this event.

Thirteen years later he published his novel in Europe called "Noli me Tangere" in which he faithfully portrayed the picture of social conditions in the Philippine Islands. In the preface of the book he says.

"To My Fatherland:

Recorded in the history of human sufferings is a cancer of so malignant a character that the least touch irritates it and awakens in it the sharpest pain. Thus, how many times, when in the midst of modern civilizations I have wished to call thee before me, now to accompany me in memories, now to compare thee with other countries, hath thy dear image presented itself showing a social cancer like to that other!"

"Desiring thy welfare, which is our own, and seeking the best treatment, I will do with thee what the ancients did with their sick, exposing them on the steps of the temple so that every one who came to invoke the Divinity might offer them a remedy."

And to this end, I will strive to reproduce thy condition faithfully, without discriminations: I will raise a part of the veil that covers the evil, sacrificing to truth everything even vanity itself, since, as thy son, I am conscious that I also suffer from thy defects and weaknesses."

The second book of his called "El Filibastismo" appeared a few years later, which was dedicated to Fathers Burgos, Zamora and Gomez with the following words.

"To the memory of the priests, Don Mariano Gomez (85 years old), Don Jose Burgos (30 years old) and Don Jacinto Zamora (35 years old). Executed in Bagumbayan Field on the 28th of February, 1872."

"The Church, by refusing to degrade you, has placed in doubt the crime that has been imputed

to you; the Government, by surrounding your trials with mystery and shadows, causes the belief that there was some error, committed in fatal moments; and all the Philippines, by worshipping your memory and calling you martyrs, in no sense recognizes your culpability. In so far, therefore, as your complicity in the Cavite mutiny is not clearly proved, as you may or may not have been patriots, and as you may or may not have cherished sentiments for justice and for liberty, I have the right to dedicate my work to you as victims of the evil which I undertake to combat. And while we await expectantly upon Spain some day to restore your name and cease to be answerable for your death, let these pages serve as a tardy wreath of dried leaves over your unknown tombs, and let it be understood that every one who without clear proofs attacks your memory stains his hands in your blood!"

Rizal did not advocate the overthrow of the Spanish Government, but to reform social and governmental defects by the peaceful means, especially by means of education. But the portrayal of the black crimes of Friars in his books and the dedication of the book to three native priests made the Friars the sworn enemy determined to do anything to see his downfall.

There had been many mistakes made by the Spanish Government in the Philippines but the shooting of Dr. Rizal 26 years ago today was the greatest folly committed by the government. The local insurrection led by Katipunan increased its strength through the popular indignation caused by this wanton execution of the beloved patriot. I cannot refrain myself from reciting here "Mi Ultimo Pensamiento", so pathetic yet so pregnant with noble thought and lofty Patriotism.

“TO MY COUNTRY.”

“(Translated from the original Spanish.)

Farewell, beloved country, longed-for region of the sun,
Pearl of the Eastern Seas, our lost Eden.

To give thee this sad life of mine, joyfully I go;
And were it more brilliant, more pleasant, more precious,
Yet for thee I would give it, I would give it for thee.

On field of battle, wrestling with delirium,
Others are giving their lives to thee without hesitation, without regret,
The place does not matter: Cypress, Laurel or box-thorn,
Scaffold or open field, fight or cruel martyrdom,
Tis all the same, if they demand it, the country and the hearth.

I shall die, when I see the sky is coloring (getting light)
If great necessity to redder the (aurora) morning sky
Pours out my blood, shed in good time
And guilds the fullness of the new born light.

My dreams when scarcely an adolescent youth,

my dreams when already a young man, full of vigour,
Were to see thee some day, Pearl of the Eastern Seas,
With thy black eyes serene, high thy smooth forehead,
Without a frown, without a wrinkle, without a blush.

In the dreams of my life, in my ardent life's desire,
My soul soon to depart, is calling to thee greeting.
Greeting, O what a beautiful death it is to give thee!
Dying to give thee life, to die beneath thy skies,
And in thy enchanted soil through eternity to sleep.

If over (on) my grave thou wilt see some day spring up
Between the luxurious grass a simple humble flower,
Press it to thy lips, kiss my soul,
And down in the cool tomb I shall feel on my forehead
Of thy tenderness the breath, of thy breath the warmth.

Let me see the moon with her calm and mild light,
Let my soul send forth the fleeting brightness,
Let the wind moan with its loud murmur;
And if there descends and rests upon my cross an "Ave",
Let the "Ave" sound forth its sweet song of peace.

Let the sun dry up the rains

And return them pure to heaven with my shout for peace.

Let a friendly being weep over my early death,

And in the clear evenings when someone is praying for me

Pray then also, my country, for me resting with God.

Pray for all who have died without a chance,

For those who have suffered torments without a wail

For our poor mothers that they may endure their sorrow,

For orphans and widows; for such as suffer torture,

And pray for thyself that thou mayest see thy final redemption.

And when in obscure night the churchyard is wrapt,

And thus lonely the dead keep their watch,

Do not disturb their repose, do not disturb the mystery,

Perhaps thou mayest hear the harmony of harp or psaltery,

'Tis I, beloved country, I who sing to thee.

And when my grave forgotten at last by all

Has neither cross nor tombstone that designate the spot

Until some one plow it up and moisten it with water,

And my ashes, before they return to nothing,

Shall enrich the dust of thy field which a scabbard stirs up;

Then I mind not your leaving me to oblivion,

Thy atmosphere, thy plains, thy valleys I shall cross.

The quivering and clear note will be for thy ear

Aroma, light, colors, rumor, song, moan,

Constantly repeating the essence of my faith

My country, my idol, pain of my pains,

Beloved Filipinos, hear my last farewell,

Here I leave thee all: my fathers, my loved ones;

I go where there is no slaves, no hang man, no oppressors,

Where (faith) confidence does not kill, where God is he who reigns.

Goodby, father and brothers, parts of my soul,

Friends of my childhood in the last home;

Give thanks that I rest from the trials of the day.

Farewell, sweet lady-love, my friend, my joy;

Farewell, beloved beings, to die is to repose!

Rizal died in order to live. Who among the Filipinos today is not inspired by the noble

example of Rizal!

The insurrection of Aguinaldo though quite successful at one time had to lay down their arms by the pact of Biac-na-Bato and Aguinaldo and his Associates had to leave the country about a year after the execution of Dr. Rizal.

The outbreak of hostilities between the U.S. and Spain in April 1898 gave hopes to the Filipino people that they have at last achieved their goal through the benevolent hands of the U.S. They were disappointed in this, however. Pres. McKinley and majority of American Congress decided to retain the Islands. According to Justice Malcolm of the Supreme Court of the Philippine Island there were four reasons for this decision.

Namely:

"In the first place, natural human exultation over a great victory was inevitable. Ardent belief in the fulfilment of America's manifest destiny and disinclination to haul down the Flag where it had once been planted became the result. *Patriotism!* An altruistic and sincere desire to improve the condition of the Filipinos and to prepare them for self-government was apparent. A course which would best subserve the interests of the Filipino people, which would guard their welfare, and which would lead to their political emancipation, again became the result. *Humanitarianism!* A belief that Providence had opened a way for the spread of civilization and for Christian conversion influenced many. A vision of missionary conquest again became the result. *Religion!* A quick comprehension of the possibilities of trade expansion and a desire for new markets, all for the profit of the United States affected the business interests. The retention of the Philippines in order to use

them as a base for the Eastern trade, especially of China, again became the result. *Commercialism!*" Not satisfied with this decision the Filipino people established a Revolutionary Republic under the leadership of General Aguinaldo at Malolos.

Philippine Republic was, however, short-lived. Revolutionary forces without proper training, without sufficient arms and ammunitions were no match against American troops and the fighting came to an end by the capture of General Aguinaldo in March 1901.

From this time on the Independence movement took more peaceful means, and especially since July 1902, with the granting of the freedom of speech and other political and constitutional rights and privileges, the agitation was carried on chiefly by speeches and writings.

Under the law of July 1902 civil government was established with ex-President Taft as governor. In the year 1907 Legislative Assembly composed of the elected members was opened, giving a share in the legislation to the Filipino people. Resident Commissioners were also sent to Washington as their spokes-men. This was the first step toward self-government and chiefly through the persistent effort of Mr. Quezon, one of the later Resident Commissioners, so-called Jones law which gave a greater measure of self-government to the Filipino people, was enacted under the Democratic President. The importance of Jones law to the cause of Philippine Independence can not be overestimated. In the first place it declares in the preamble the definite promise of granting Independence. In the second place it places in the hands of the Filipino people the entire legislative power. In the third place it gives to the Philippine Senate the control over the executive Department through the appointment of the officials. In short, Jones Law made the Philippines almost autonomous so far as its internal affairs are con-

cerned, together with the promise for future independence.

One of the results of the great European War is the establishment of the principle of the self-determination of the people; Czechoslovakia, Poland and etc. were made independent nations. Filipino people were not slow in seizing this opportunity and a large body of the delegates were sent to the United States in 1918 to ask the United States Government to grant the immediate independence. By this time, however, the Republican party had the majority in the Congress and President Wilson could not do anything more than to recommend it in the following words:

“Allow me to call your attention to the fact that the people of the Philippine Islands have succeeded in maintaining a stable government since the last action of the Congress in their behalf, and have thus fulfilled the condition set by the Congress as precedent to the consideration of granting independence to the Islands. I respectfully submit that this condition precedent having been fulfilled, it is now our liberty and our duty to keep our promise to the people of those Islands by granting them the independence which they so honorably covet.”

Upon the assumption of the office, President Harding appointed General Wood and ex-Governor General Forbes to investigate the general conditions in the Philippines and make recommendations. This commission, after four months' careful and thorough investigation, travelling through almost all parts of the Islands and getting first hand informations, made their report which was made public in Manila just a month ago. The most important point in the recommendations, is, of course, on the question whether or not there exists a stable government, or to put it in a different terms, whether or not the Filipino people are ready to become an independent nation. On this point report says:

“We recommend that the present general status of the Philippine Islands continue until the people have had time to absorb and thoroughly master the powers already in their hands.”

Thus the question of the immediate granting of independence is laid on the table. This is a great disappointment to the Filipino people. But, if we stop to think of the progress of this question, we cannot help thinking of a great stride that has already been made toward the final goal for which they have been so consistently striving. The principle of granting the independence is settled and internal autonomy is secured. It only remains to perfect the governmental organizations and their workings, together with marshalling the economic resources so as to make the country economically independent, in order to finally attain their object and become a member of the family of nations. I sincerely congratulate the Filipino people for the capacity they have shown and the progress they have made in the self-government, and hope in the future, not far from now, we may be working together not only for the salvation of the Oriental countries and peoples but for the peace and progress of the mankind. I thank you.

大正拾壹年四月一日印刷
大正拾壹年四月七日發行

比律賓事情

定價金四圓

著者兼發行者

三 神 敬 長

神奈川縣鎌倉町小町百拾七番地

印刷所

大國印刷株式會社

東京市芝區南佐久間町一丁目三番地

右代表者

吉 武 源 五 郎

不 複

許 製



發行所

株式會社 拓殖新報社
東京市芝區南佐久間町一丁目三番地

電話 芝一八九〇、八〇三五

200

289143

A 672110

DDPL

